

京都府遺跡調査報告集

第165冊

1. 木津川河床遺跡第27次
2. 平等院旧境内遺跡
3. 平成26年度一般国道163号精華拡幅事業関係遺跡
 - (1) 乾谷遺跡
 - (2) 乾谷大崩遺跡

2016

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



2 トレンチ全景(南東から)



26-5 トレンチ全景(北西から)

巻頭図版 3 平等院旧境内遺跡



(1) 24-2 トレンチ杭検出状況(南東から)



(2) 26-2 トレンチと平等院観音堂(北西から)

序

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは昭和56年4月に設立され、今年度設立35年を迎えました。この間、当調査研究センターでは、公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を府内各所で1,250件行い、地域の歴史を明らかにしてまいりました。調査の実施にあたりましては、皆様方のご理解とご協力を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

本書は『京都府遺跡調査報告集』として、平成26年度に国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した木津川河床遺跡、乾谷遺跡・乾谷大崩遺跡、平成24・25・26年度に国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した平等院旧境内遺跡の発掘調査報告を収録したものです。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深めるうえで、ご活用いただければ幸いです。

発掘調査を依頼された各機関をはじめ、京都府教育委員会、八幡市教育委員会、宇治市教育委員会・精華町教育委員会、などの各関係機関、ならびに調査にご参加、ご協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成28年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

例 言

1. 本書に取めた報告は下記のとおりである。

木津川河床遺跡第27次

平等院旧境内遺跡

平成26年度一般国道163号精華拡幅事業関係遺跡

(1) 乾谷遺跡

(2) 乾谷大崩遺跡

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および報告の執筆者は下表のとおりである。

遺 跡 名	所 在 地	調 査 期 間	経 費 負 担 者	執 筆 者
木津川河床遺跡第27次	八幡市川口地内	平成26年5月7日～ 平成26年6月11日 平成26年11月4日～ 平成27年1月29日	国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所	岡崎研一
平等院旧境内遺跡	宇治市宇治塔川	平成24年12月6日～ 平成25年1月16日 (平成24年度調査) 平成26年2月3日～ 平成26年3月4日 (平成25年度調査) 平成26年12月16日～ 平成27年3月10日 (平成26年度調査)	国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所	引原茂治 竹村亮仁
平成26年度一般国道163号精華拡幅事業関係遺跡 乾谷遺跡 乾谷大崩遺跡	相楽郡精華町乾谷	平成26年10月23日～ 平成27年3月6日	国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所	村田和弘 福山博章

3. 上記3事業4遺跡とも本部事務所(向日市寺戸町)で整理・報告作業を実施した。作業については、調査担当者の指示のもと調査課企画調整係が協力して実施した。
4. 本書で使用している座標は、原則として世界測地系国土地院第VI座標系によっており、方位は座標の北をさす。なお、現地調査及び過去の調査との整合性のため日本測地系を使用している場合もある。また、国土地理院発行地形図の方位は経度の北をさす。
5. 土層断面等の土色や出土遺物の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』を使用した。
6. 本書の編集は、調査課担当者の編集原案をもとに、調査課企画調整係が行った。
7. 現場写真は主として調査担当者が撮影し、遺物撮影は、調査課企画調整係主査田中彰が行った。

本文目次

1. 木津川河床遺跡第27次発掘調査報告	1
2. 平等院旧境内遺跡発掘調査報告	19
付編 自然科学的方法による分析結果	56
3. 平成26年度一般国道163号精華拡幅事業関係遺跡発掘調査報告	63
付編 乾谷遺跡の花粉・植物珪酸体分析	88

挿図目次

1. 木津川河床遺跡第27次

第1図 調査地及び周辺主要遺跡分布図	2
第2図 調査地配置図	4
第3図 調査地地区割り図	5
第4図 第1トレンチ堆積状況図	6
第5図 第1トレンチ遺構配置図	7
第6図 第2トレンチ堆積状況図(1)	8
第7図 第2トレンチ堆積状況図(2)	9
第8図 第2トレンチ遺構配置図	10
第9図 第2トレンチ遺構実測図	11
第10図 第2トレンチSD10実測図	12
第11図 出土遺物実測図(1)	13
第12図 出土遺物実測図(2)	14
第13図 出土遺物実測図(3)	15
第14図 出土遺物実測図(4)	16

2. 平等院旧境内遺跡

第1図 周辺地図及び周辺遺跡	20
第2図 トレンチ配置図	23
第3図 平成24年度1トレンチ平面及び断面図	24
第4図 平成24年度2トレンチ平面図及び杭列断面図	25
第5図 平成24年度2トレンチ南壁断面図	25
第6図 平成24年度3トレンチ平面図	26
第7図 平成24年度3トレンチ断面図	26

第8図	平成25年度トレンチ配置図	27
第9図	平成25年度1、4・10、9・15トレンチ各南壁断面図	28
第10図	平成25年度4、12トレンチ伏臥構造検出状況図	29
第11図	平成26年度1、2、3、4トレンチ配置図	30
第12図	平成26年度1トレンチ東壁断面図	30
第13図	平成26年度2トレンチ平面及び西壁断面図	31
第14図	平成26年度3トレンチ北壁及び4トレンチ西壁断面図	32
第15図	平成26年度5トレンチ平面図	33
第16図	平成26年度5トレンチ各南壁断面図	34
第17図	平成26年度S X01遺物出土状況図	35
第18図	平成24年度出土遺物実測図	36
第19図	平成25年度出土遺物実測図1(土器・陶磁器)	37
第20図	平成25年度出土遺物実測図2(瓦)	38
第21図	平成26年度出土遺物実測図1(土器・陶磁器)	40
第22図	平成26年度出土遺物実測図2(軒丸瓦、2・3トレンチ)	42
第23図	平成26年度出土遺物実測図3(軒平瓦、1・2トレンチ)	43
第24図	平成26年度出土遺物実測図4(瓦、2トレンチ)	44
第25図	平成26年度出土遺物実測図5(瓦、5トレンチ)	46
第26図	平成26年度出土遺物実測図6(銭貨)	47
第27図	平成26年度出土遺物実測図7(石造物)	49
第28図	平成26年度出土杭実測図	51

3. 乾谷遺跡・乾谷大崩遺跡

第1図	乾谷遺跡・乾谷大崩遺跡調査位置	64
第2図	乾谷遺跡調査トレンチ配置図	66
第3図	乾谷遺跡1トレンチ北壁土層断面図	68
第4図	乾谷遺跡1トレンチ平面図・畦畔断面図	69
第5図	乾谷遺跡1トレンチ下層北壁土層断面図	70
第6図	乾谷遺跡1トレンチ水田1遺物出土状況図	70
第7図	乾谷遺跡2トレンチ南壁土層断面図	71
第8図	乾谷遺跡2トレンチ平面図	72
第9図	乾谷遺跡3トレンチ南壁土層断面図	73
第10図	乾谷遺跡3トレンチ平面図	74
第11図	乾谷遺跡4トレンチ平面図・土層断面図	75
第12図	乾谷大崩遺跡調査トレンチ配置図	76

第13図	乾谷大崩遺跡1 トレンチ土層断面図	77
第14図	乾谷大崩遺跡1 トレンチ平面図・土坑S K09平断面図・遺物出土状況図	78
第15図	乾谷大崩遺跡2 トレンチ土層断面図	79
第16図	乾谷大崩遺跡2 トレンチ平面図	80
第17図	乾谷大崩遺跡2 トレンチ溝S D01・02平断面図	81
第18図	出土遺物1	83
第19図	出土遺物2	84

付 表 目 次

1. 木津川河床遺跡第27次

付表1	出土遺物観察表	17
-----	---------	----

2. 平等院旧境内遺跡

付表1	出土土器観察表	53
付表2	出土石造物観察表	54
付表3	出土瓦観察表	54

3. 乾谷遺跡・乾谷大崩遺跡

付表1	乾谷遺跡出土遺物一覧	86
付表2	乾谷大崩遺跡出土遺物一覧	87

図 版 目 次

1. 木津川河床遺跡第27次

巻頭図版1	2 トレンチ全景(南東から)
-------	----------------

2. 平等院旧境内遺跡

巻頭図版2	26-5 トレンチ全景(北西から)
巻頭図版3	(1) 24-2 トレンチ杭検出状況(南東から)
	(2) 26-2 トレンチと平等院観音堂(北西から)

1. 木津川河床遺跡第27次

- 図版第1 (1)第2トレンチ全景(上空から、右下が北)
(2)第2トレンチ遺構群全景(上空から、右下が北)
- 図版第2 (1)第1トレンチ全景(南東から)
(2)第1トレンチ全景(北西から)
(3)第1トレンチS D04検出状況(南西から)
- 図版第3 (1)第1トレンチS P01検出状況(北東から)
(2)第1トレンチS P01完掘状況(北東から)
(3)第1トレンチS D03・04近景(北東から)
- 図版第4 (1)第1トレンチS D04堆積状況(北東から)
(2)第1トレンチS D03堆積状況(北東から)
(3)第1トレンチS D03・04近景(南西から)
- 図版第5 (1)第1トレンチS D04堆積状況(南西から)
(2)第1トレンチS D03堆積状況(南西から)
(3)第1トレンチ噴砂近景(南西から)
- 図版第6 (1)第1トレンチ噴砂近景(北東から)
(2)第1トレンチ埋め戻し状況(南東から)
(3)第2トレンチ近景(南東から)
- 図版第7 (1)第2トレンチ全景(北西から)
(2)第2トレンチS D10内遺物出土状況(北から)
(3)第2トレンチS D17近景(北東から)
- 図版第8 (1)第2トレンチS D16、S K21～23近景(北東から)
(2)第2トレンチS D13～15近景(北東から)
(3)第2トレンチS D12近景(北東から)
- 図版第9 (1)第2トレンチS D11近景(北東から)
(2)第2トレンチS D15堆積状況(西から)
(3)第2トレンチS K21堆積状況(西から)
- 図版第10 (1)第2トレンチS K21遺物出土状況(西から)
(2)第2トレンチS K21遺物出土状況(北から)
(3)第2トレンチS K21完掘状況(北から)
- 図版第11 (1)第2トレンチ遺物包含層検出状況(北から)
(2)第2トレンチ遺物包含層検出状況(北東から)
(3)第2トレンチ11区噴砂検出状況(北東から)
- 図版第12 出土遺物

2. 平等院旧境内遺跡

- 図版第1 (1) 調査前全景(南東から)
(2) 調査前全景(北東から)
(3) 調査前全景(南東から)
- 図版第2 (1) 24-1トレンチ全景(北西から)
(2) 24-1トレンチ断面(北から)
(3) 24-2トレンチ杭検出状況(南東から)
- 図版第3 (1) 24-2トレンチ全景(南から)
(2) 24-2トレンチ杭列検出状況(北から)
- 図版第4 (1) 24-2トレンチ杭列断面(北西から)
(2) 24-2トレンチ杭列断面(南東から)
(3) 24-2トレンチ完掘後全景(北西から)
- 図版第5 (1) 24-3トレンチ全景(北から)
(2) 24-3トレンチ杭列検出状況(東から)
(3) 24-3トレンチ完掘後全景(北西から)
- 図版第6 (1) 25-1トレンチ全景(北東から)
(2) 25-1トレンチ断面(北から)
(3) 25-4トレンチ全景(北東から)
- 図版第7 (1) 25-4トレンチ礎検出状況(南東から)
(2) 25-7トレンチ断面(北西から)
(3) 25-7トレンチ礎検出状況(東から)
- 図版第8 (1) 26-1トレンチ全景(北西から)
(2) 26-3トレンチ全景(南東から)
(3) 26-4トレンチ全景(東から)
- 図版第9 (1) 26-2トレンチ全景(南東から)
(2) 26-2トレンチ断面(北西から)
- 図版第10 (1) 26-2トレンチ断面(南西から)
(2) 26-2トレンチと平等院観音堂(北東から)
(3) 26-5トレンチ倒木出土状況(南西から)
- 図版第11 26-5トレンチ全景(南東から)
- 図版第12 (1) 26-5トレンチ堤状遺構SX01全景(北西から)
(2) 26-5トレンチ堤状遺構SX01全景(南東から)
- 図版第13 (1) 26-5トレンチ堤状遺構SX01北半部分(東から)
(2) 26-5トレンチ堤状遺構SX01北西部分(東から)
- 図版第14 (1) 26-5トレンチ堤状遺構SX01南半部(南東から)

- (2) 26-5 トレンチ堤状遺構 S X01 南半部杭検出状況(南から)
- 図版第15 (1) 26-5 トレンチ堤状遺構 S X01 軒平瓦出土状況(北東から)
(2) 26-5 トレンチ堤状遺構 S X01 瓦出土状況(南から)
- 図版第16 (1) 26-5 トレンチ堤状遺構 S X01 杭・流木検出状況(北西から)
(2) 26-5 トレンチ堤状遺構 S X01 瓦出土状況(南から)
(3) 26-5 トレンチ南壁石造物出土状況(北西から)
- 図版第17 (1) 26-5 トレンチ堤状遺構 S X01 礎除去後状況(南から)
(2) 26-5 トレンチ堤状遺構 S X01 礎除去後状況(北西から)
- 図版第18 (1) 平成26年度調査現地説明会(北西から)
(2) 平成26年度調査終了状況(南東から)
(3) 平成26年度調査終了状況(北西から)
- 図版第19 出土遺物 1 (土器・陶磁器)
- 図版第20 出土遺物 2 (軒丸瓦)
- 図版第21 出土遺物 3 (軒丸瓦)
- 図版第22 出土遺物 4 (軒平瓦)
- 図版第23 出土遺物 5 (軒平瓦・鬼瓦)
- 図版第24 出土遺物 6 (瓦)
- 図版第25 出土遺物 7 (瓦)
- 図版第26 (1) 出土遺物 8 (銭貨)
(2) 出土遺物 9 (石造物)

3. 乾谷遺跡・乾谷大崩遺跡

- 図版第 1 (1) 調査地遠景(北東上空から)
(2) 調査地遠景(北西上空から)
- 図版第 2 (1) 乾谷遺跡 1 トレンチ水田検出面全景(東から)
(2) 乾谷遺跡 1 トレンチ水田検出面全景(西から)
(3) 乾谷遺跡 1 トレンチ北壁断面(南西から)
- 図版第 3 (1) 乾谷遺跡 1 トレンチ畦畔断面(c-c') (東から)
(2) 乾谷遺跡 1 トレンチ畦畔断面(d-d') (東から)
(3) 乾谷遺跡 1 トレンチ水田 1 遺物出土状況(南西から)
- 図版第 4 (1) 乾谷遺跡 2 トレンチ第 2 水田面全景(西から)
(2) 乾谷遺跡 2 トレンチ第 2 水田面遺物出土状況(北から)
(3) 乾谷遺跡 3 トレンチ遺構検出面全景(東から)
- 図版第 5 (1) 乾谷遺跡 3 トレンチ南壁断面(北から)
(2) 乾谷遺跡 4 トレンチ遺構検出面(東から)

(3) 乾谷遺跡4 トレンチ東壁断面(西から)

図版第6 (1) 乾谷大崩遺跡1 トレンチ第1 遺構面全景(西から)

(2) 乾谷大崩遺跡1 トレンチ第2 遺構面全景(西から)

(3) 乾谷大崩遺跡1 トレンチ北壁断面(南から)

図版第7 (1) 乾谷大崩遺跡2 トレンチ第2 遺構面全景(西から)

(2) 乾谷大崩遺跡2 トレンチ南壁断面(北から)

(3) 乾谷大崩遺跡2 トレンチ溝S D01・02完掘状況(南から)

図版第8 出土遺物1

図版第9 出土遺物2

図版第10 出土遺物3

1. 木津川河床遺跡第27次発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、緊急用河川敷道路整備事業に先立ち、国土交通省近畿整備局淀川河川事務所の依頼を受けて実施した。調査対象地は、木津川、宇治川、桂川の三川合流地点から約2.5km上流の木津川左岸にあたり、木津川河床遺跡に含まれる。木津川河床遺跡は三川合流地点から木津川沿いに広がる遺跡で、東西約5km、南北約2.5kmの規模を測る弥生時代～近世にかけての複合遺跡である。昭和57年から26回の発掘調査が実施され、今回の発掘調査地は、遺跡の東部にあたる。

開発対象地は現在の河川敷にあたるため、河川などによる削平の可能性もあり、平成25年度に京都府教育委員会によって試掘調査が実施され、その結果を受けて今回の調査地が選定された。調査は、出水期を避けるため平成26年5月7日～同年6月11日の前半期調査と、平成26年11月4日～平成27年1月29日の後半期調査の二期に分けて実施した。調査面積は、前半期が300㎡、後半期が700㎡である。

本報告で使用した国土地標は、日本測地系第Ⅳ座標系で、標高は大阪湾最低潮位(Osaka Peil O.P.)を用いた。発掘調査によって出土した遺物は、整理コンテナ15箱である。

〔調査体制等〕

平成26年度調査

現地調査責任者 調査課長 石井清司

現地調査担当者 調査課調査第1係長 中川和哉

同 主査 石尾政信

調査場所 八幡市川口地内

現地調査期間 平成26年5月7日～同年6月11日(前半期)

平成26年11月4日～平成27年1月29日(後半期)

調査面積 1,000㎡

平成27年度整理報告

整理報告責任者 調査課長 有井広幸

整理報告担当者 調査課調査第2係長 中川和哉

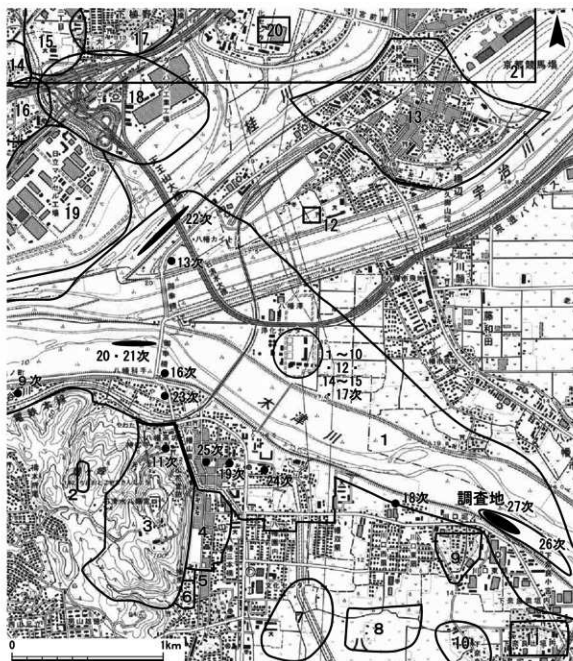
同 主査 岡崎研一

2. 位置と環境

木津川河床遺跡の中央を流れる木津川は、明治2年の木津川流路付け替えによって流路が変更

されたもので、調査地は本来陸地であったそのため、河川敷内には川に洗われて露出した土器が採集できることが古くから知られていた。

木津川河床遺跡における発掘調査は、昭和57年木津川流域下水道浄化センターの建設に先立って初めて実施された以後、現在の木津川と宇治川に挟まれた、京都府洛南浄化センター敷地内を



第1図 調査地及び周辺主要遺跡分布図 (国土地理院 1/25,000 淀)

- | | | | |
|-------------|------------|-------------|-----------|
| 1. 木津川河床遺跡 | 2. 堀ヶ峰経塚群 | 3. 石清水八幡宮遺跡 | 4. 山本町遺跡 |
| 5. 善法律寺境内遺跡 | 6. 馬場遺跡 | 7. 高遺跡 | 8. 川口扇遺跡 |
| 9. 川口環濠集落 | 10. 今里遺跡 | 11. 出畑内遺跡 | 12. 美豆城跡 |
| 13. 淀城跡 | 14. 金成遺跡 | 15. 松田遺跡 | 16. 算用田遺跡 |
| 17. 宮脇遺跡 | 18. 下植野南遺跡 | 19. 山崎津遺跡 | 20. 下津城跡 |
| 21. 長岡京跡 | | | |

中心に実施されてきた。同遺跡地南側では弥生時代末から古墳時代前期の竪穴建物群、古墳時代後期の竪穴建物群が遺跡範囲を越えて発見されている。特筆する遺物としては17次調査において琴柱形石製品が出土したことが上げられる。

近接する古墳時代の遺跡には、桂川右岸の大山崎町算用田遺跡で古墳時代前期の竪穴建物が発見されており、同じく大山崎町下植野南遺跡で古墳時代中期から後期の大規模な集落の存在が知られている。

奈良時代には、調査地のある川口は山城国久世郡に属すが、列栗郷と那羅郷の間にあたることからいずれに帰属するかは不明である。10世紀に書かれた『和名類聚抄』によると、調査地のある川口は奈良郷に含まれ、奈良御園三座として都などに瓜・茄子・大根を取っていたとされている。字は異なるが音が同じため那羅郷に含まれていた可能性も高い。

中世に入ると調査地が所在する川口は、川口郷と呼ばれ、堀之内地区を中心に環濠集落が存在していた。川口郷は中世から江戸時代まで男山八幡宮に帰属していた。同じ木津川左岸の河川敷内を調査した21・22次調査においても中世の遺構、遺物を検出した。中世以後、八幡寺周辺は交通の要衝であるとともに岩清水八幡宮の門前町として栄えた。

木津川河床遺跡では、地震による液状化現象で下層にある砂が上層に吹き上げる噴砂が高い頻度で発見される。これらの噴砂は慶長伏見大地震(1596年)に伴って生じたものとされている。

3. 調査概要

木津川左岸の堤防と流域の間、堤防寄りにトレンチを設定した。東側の調査地を1トレンチ、西側を2トレンチとした(第2図)。調査地は、N55°Wに傾く形状であったため、調査地の南東角から10mごとにトレンチの軸に直行するように区画し、南東から数字を用いて地区名とした。1・2トレンチは、個別に地区割りを行った(第3図)。遺構番号は、1トレンチは1から通し番号を、2トレンチは10から通し番号を付した。

(1) 1トレンチ

①層序(第4図)

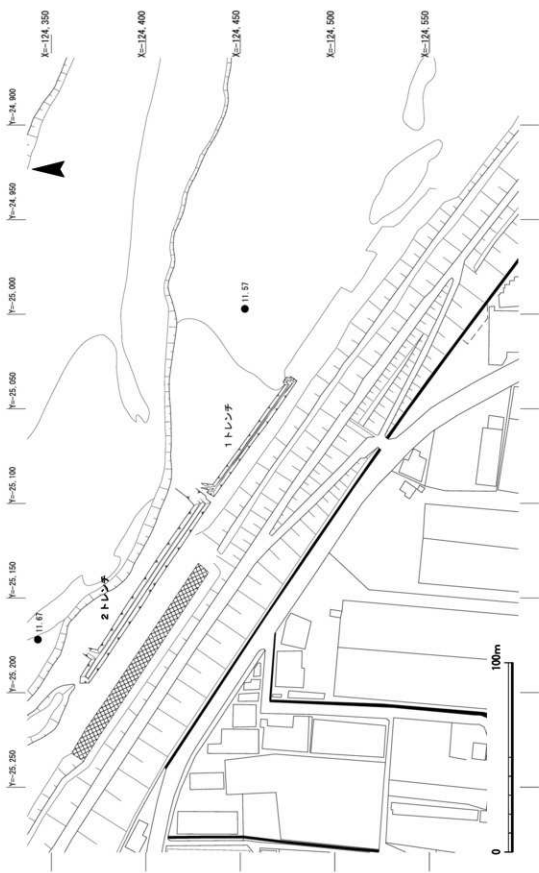
基本層位は、最上部に整地土と考えられる表土が堆積し、次に河川による砂礫層が厚く堆積していた。この砂礫層は、花崗岩起源と考えられる長石、石英、雲母などを含む白色の砂礫で、明治2年の木津川本流付け替え以後に木津川が運んできた堆積物と考えられる。この木津川本流がもたらした砂礫層は、遺構面直上に堆積する3～5・7層を削平しながら堆積したため、遺構検出面直上の堆積層は、0.05～0.2mと薄いものであった。遺構検出面は、14～16・21層で、南東から北西にわずかに傾斜して堆積していた。

なお、土層断面図は遺構や噴砂の少ないトレンチ中央部分を除き、作図した。

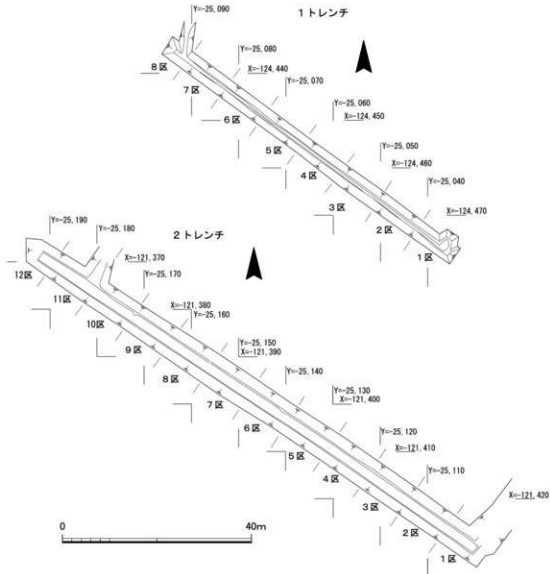
②検出遺構

1トレンチでは、柱穴1か所(S P01)、溝跡(S D02～05)を検出した。

S P01(第4・5図) 1トレンチ7区の壁際から21層を掘り込む形で検出した。柱穴の平面



第2図 調査地配置図



第3図 調査地区区割り図

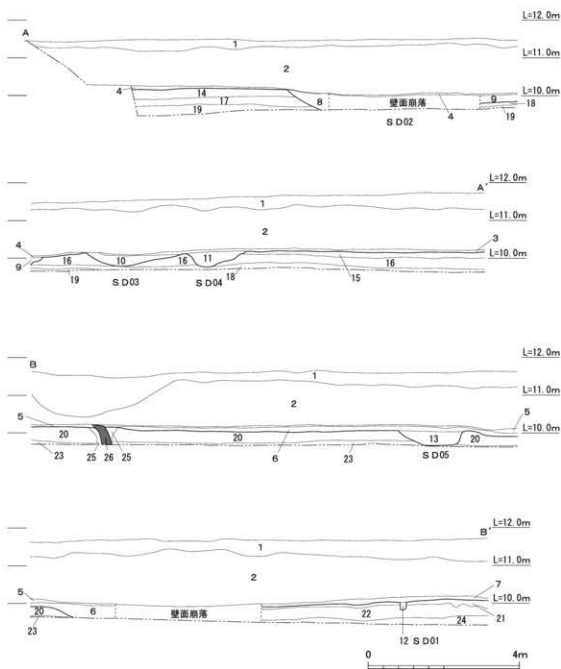
形は真円で、壁は垂直に掘られていた。柱穴の規模は、径約0.2m、深さ約0.2mを測る。遺構内からの出土遺物はなく、時期は不明である。包含層掘削時に、この地区の遺構検出面付近からは、飛鳥時代から平安時代の遺物が出土している。

SD02 (第4・5図) 1トレンチ1区から、4・16層上面で検出した。湧水と安全確保の点から底を確認できなかったが、溝の規模は幅約6.4m、深さ0.4m以上である。遺構内からは出土遺物はなく、時期は不明である。

SD03 (第4・5図) 1トレンチ2区から、16層上面で検出した。溝の規模は、幅約2.7m、深さ約0.3mを測る。遺構内からは出土遺物はなく、時期は不明である。

SD04 (第4・5図) 1トレンチ2区から、15・16層上面で検出した。溝の規模は、幅約1.5m、深さ約0.4mを測る。遺構内からは出土遺物はなく、時期は不明である。

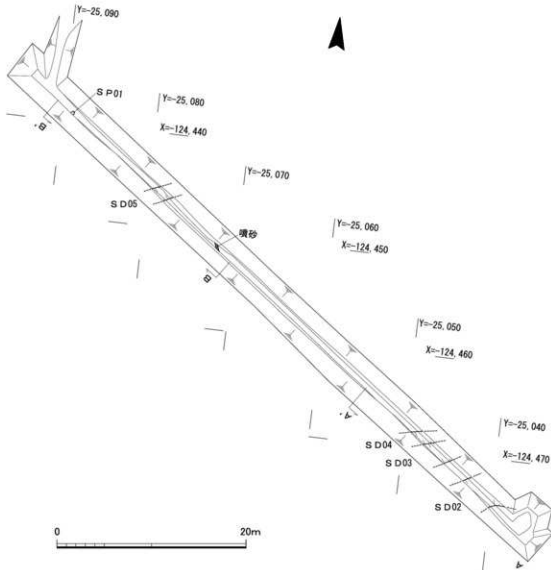
SD05 (第4・5図) 1トレンチ6区から、20層上面で検出した。溝の規模は、幅約1.7m、深さ約0.4mを測る。遺構内からは出土遺物はなく、時期は不明である。しかし、包含層掘削時に、



1. 表土
2. 砂礫層 (7.5YR 7/4) <3~5cm大の礫含む>
3. 褐色 (10YR 4/6) 土
4. 褐色 (7.5YR 4/6) 粘質土
5. にぶい黄褐色 (10YR 7/4) 土
6. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 土
7. にぶい黄褐色 (10YR 5/3) 土
8. 青灰色 (5BG 5/1) 砂質土
9. 青灰色 (2.5Y 6/1) 粘質土
10. 青灰色 (10BG 5/1) 砂質土
11. 緑灰色 (10G 5/1) 砂質土
12. 褐色 (10YR 4/4) 粘質土
13. 暗オリーブ灰色 (5GY 4/1) 砂質土

14. 褐色 (10YR 4/4) 粘質土
15. 灰オリーブ色 (5Y 5/2) 粘質土
16. 暗オリーブ色 (5Y 4/4) 粘質土
17. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 粘質土
18. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 粘質土
19. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 砂質土
20. 暗オリーブ色 (5Y 4/3) 粘質土
21. にぶい黄褐色 (10YR 4/3) 土
22. 灰黄褐色 (10YR 4/2) 土
23. 暗オリーブ色 (5Y 4/4) 砂質土
24. 暗灰黄色 (2.5Y 5/2) 粘質土
25. 明黄褐色 (10YR 6/6) 土
26. 黄褐色 (10YR 5/8) 砂 <噴砂>

第4図 第1トレンチ堆積状況図



第5図 第1トレンチ遺構配置図

この地区の遺構検出面付近からは、飛鳥時代から平安時代の遺物が出土している。

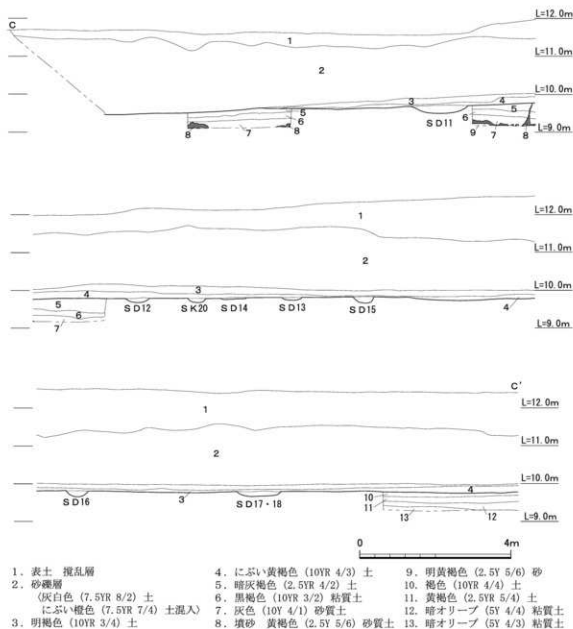
噴砂(第4・5図) 1トレンチ5区から南北方向に延びる噴砂を検出した。噴砂は遺構検出面上に薄く堆積している5層まで噴き上がっていたが、明治2年以後に形成された木津川本流の堆積物には及んでいなかった。噴砂は黄褐色砂で、幅約30cmを測る。噴砂の両側には明黄褐色土が噴砂に沿って薄く認められた。これは、地震が起こった際に起こる液状化現象に伴うものと考えられる。

木津川河床遺跡における噴砂は1596年9月5日に起こった慶長伏見大地震に伴うものとされる。このことから2層より下の堆積層は1596年以前に形成されたことがわかる

(1) 2トレンチ

① 層序(第6・7図)

整地土と考えられる表土はトレンチ南東では0.2m、北西では0.9mと北西に近づくほど厚く堆積していた。表土の下層は、トレンチと同じく木津川起源と考えられる砂礫層が厚く堆積してい



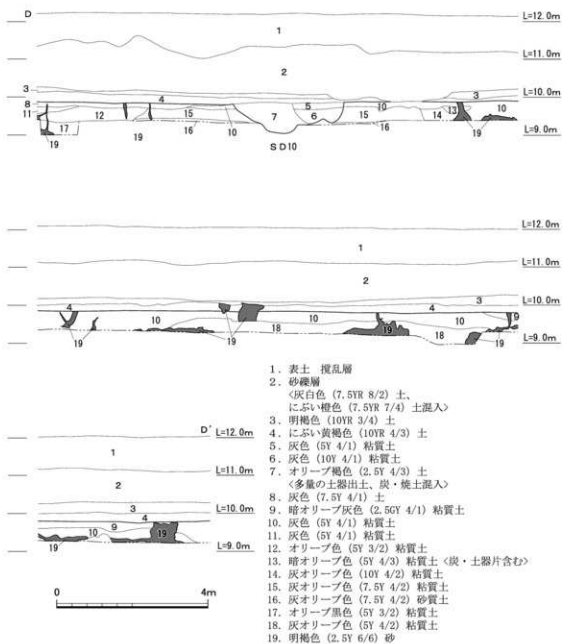
第6図 第2トレンチ堆積状況図(1)

た。その厚さは、0.9～1.9mを測る。この砂礫層は、遺構面直上に堆積する3・4層を削平しながら堆積したため、1トレンチと同じく遺構面直上の堆積層の厚さは、0.1～0.3mと薄いものであった。遺構検出面は、5・10層上面である。遺構はこれらの土層を掘り込む状態で検出できた。

先に述べたように、土層断面図は遺構や噴砂の少ないトレンチ中央部分については割愛した。また、断面図の遺構検出面は線を太くして記載している。また遺構検出面以下の地層については、さらに段を設けてトレンチの内側を断ち割った断面と合成したため整合しない部分も存在する。

②検出遺構

検出した遺構は、柱穴10か所、溝跡9か所、土坑9か所である。これらの遺構の時期は、出土遺物から中世である。このほか噴砂の痕跡を確認した。この中世の遺構面下から奈良～平安時代の土器が混入する土層を確認した。この遺物包含層は、トレンチ中央付近の8区にあり、15層(灰

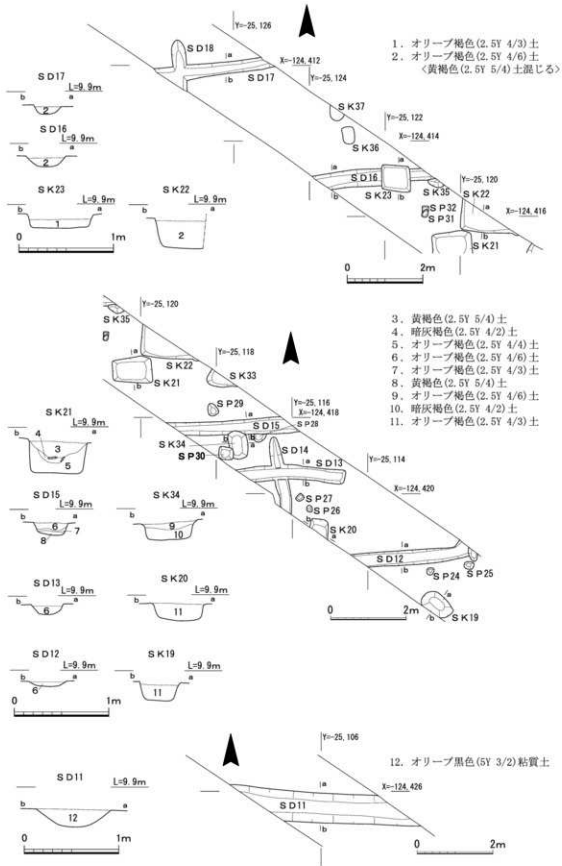


第7図 第2トレンチ堆積状況図(2)

オリブ色砂質土)である。その堆積層の下から同時期の遺構は、確認できなかった。

SD10(第6・8・10図) 2トレンチ7・8区から、10層を掘り込む状態で検出した。溝の規模は、幅約2.9m、深さ約0.8mを測る。断面の観察から、1度の掘り直しが行われていることがわかる。最初の溝の埋土はオリブ褐色土である。掘り直された溝の規模は、幅約1.3m、深さ約0.6mを測る。その溝の埋土は、5・6層である。これら埋土中からは、瓦器碗の破片や土師皿片(56~61・63~65)が多量に出土した。これらのことから中世の溝であると考えられる。また、10区からは、この溝で出土した瓦器碗よりもわずかに古い様相を示す瓦器碗(62)が出土していることから、この溝付近には同時期の遺構が展開するものと考えられる。

SD11(第6・8・9図) 2トレンチ1・2区から、暗灰褐色土を掘り込む形で、真東西方



第9図 第2トレンチ遺構実測図

中世の溝の可能性ある。SD14は南北方向の溝で、その規模は幅約0.4m、検出長約2.0m、深さ約5cmを測る。SD13と同時期の溝である。

SD15(第6・8・9図) 2トレンチ3区から検出した東西方向の溝である。SD12から北方約3.5mに位置する。溝の規模は幅約0.4m、検出長約3.5m、深さ約0.15mを測る。瓦器片や土師器片が出土したことから、中世の溝と考えられる。

SD16(第6・8・9図) 2トレンチ3・4区から検出した東西方向の溝である。SD15から北方約3.5mに位置し、褐色土を掘り込み形で検出した。溝の規模は幅約0.4m、検出長約3.3m、深さ約0.1mを測る。埋土から土師器片が少量出土した。中世の溝と考えられる。

SD17・18(第6・8・9図) 2トレンチ4区から検出した。SD17は東西方向の溝で、規模は幅約0.3m、検出長約3.2m、深さ約0.1mを測る。埋土から土師器片がわずかに出土したことから、中世の溝と考えられる。SD18は、SD17に直交する南北方向の溝で、同時期の溝である。

SK19(第9図) 2トレンチ2区から検出した長楕円形の土坑で、規模は0.5×0.9m、深さ約0.2mを測る。埋土から土師器片が出土した。

SK20(第9図) 2トレンチ3区から検出した長方形を呈すると考えられる土坑である。壁面にかかるため、全容は不明である。土坑の規模は0.5×0.5m以上、深さ約0.15mを測る。

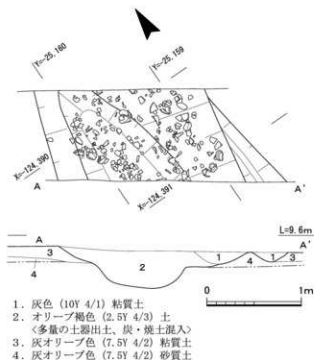
SK21(第9図) 2トレンチ3区から検出した土坑で、規模は0.7×1.1m、深さ約0.3mを測る。埋土から瓦器片や土師器片が出土した。中世の土坑である。

SK22(第9図) 2トレンチ3区から検出したが調査区外に伸びるため、全容は不明である。土坑の規模は1.5m以上×0.7m以上、深さ約0.3mを測る。埋土から瓦器片や土師器片がわずかに出土した。

SK23(第9図) 2トレンチ4区で検出した土坑で、SD16埋没後に掘削された。規模は0.8×0.7m、深さ約0.3mを測る。埋土から土師器片がわずかに出土した。

SP24~32(第9図) 2トレンチ3区から検出した。柱穴の規模は径0.1m~0.3m、深さ0.1~0.2mを測る。これらの柱穴群は、一列に並ぶことなく建物等に復元できない。時期はいずれも不明である。

SK33(第9図) 2トレンチ3区から検出した。土坑の規模は0.5×0.9m、深さ約0.2mを測る。



第10図 第2トレンチSD10実測図

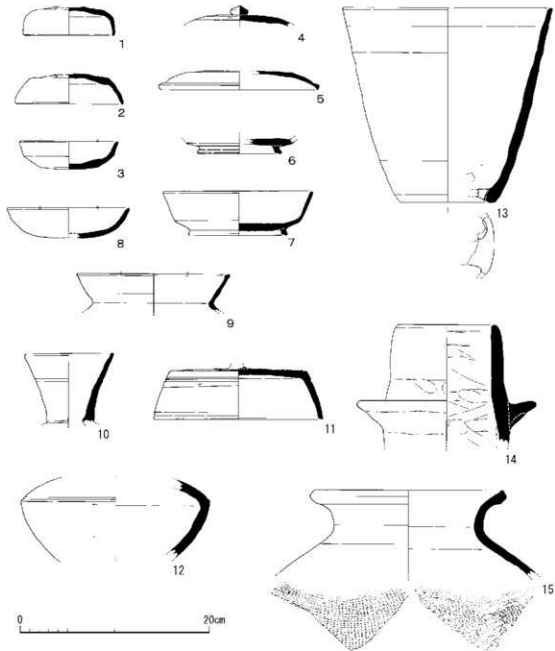
1. 灰色 (10Y 4/1) 粘質土
2. オリーブ褐色 (2.5Y 4/3) 土
 <多量の土器出土、炭・焼土混入>
3. 灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) 粘質土
4. 灰オリーブ色 (7.5Y 4/2) 砂質土

S K 34(第9図) 2トレンチ3区から検出した土坑で、規模は0.5×0.7m、深さ約0.2mを測る。埋土から瓦器片や土師器片がわずかに出土した。

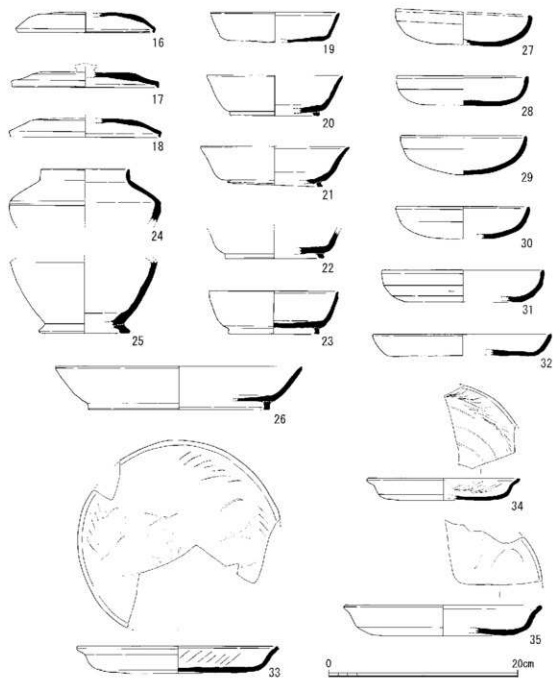
S K 35(第9図) 2トレンチ3区から検出した土坑であるが調査区外に延びるため、全容は不明である。S D 16と重複する形で検出され、土坑埋没後に溝が設けられた。土坑の規模は、径0.4m、深さ約0.1mを測る。

S K 36(第9図) 2トレンチ4区から検出した土坑で、規模は0.3×0.4m、深さ約0.1mを測る。

S K 37(第9図) 2トレンチ4区から検出した土坑で、調査区外に延びるため、全容については不明である。規模は、0.4×0.4m以上、深さ約0.1mを測る。



第11図 出土遺物実測図(1)



第12図 出土遺物実測図(2)

遺物包含層(第6図) 2トレンチ8区から検出したSD10の下層から奈良時代の遺物を包含する層を確認した。層の範囲は、厚さ0.5m、幅7.7mで、調査区外に両端が延びるため規模は不明である。出土遺物が奈良時代に限定され、周囲が後の地層によって削られていることから遺構の埋土であった可能性もある。

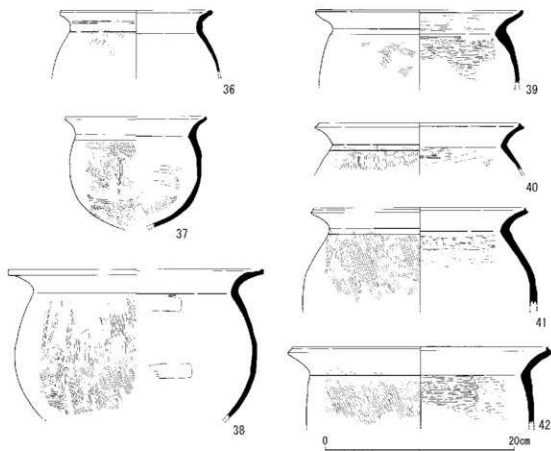
噴砂(第6・8図) 2トレンチ5～9区から検出した。噴砂は、1トレンチと同じく中世の遺構面の上に堆積する地層まで及ぶものがある。

4. 出土遺物(第11～14図)

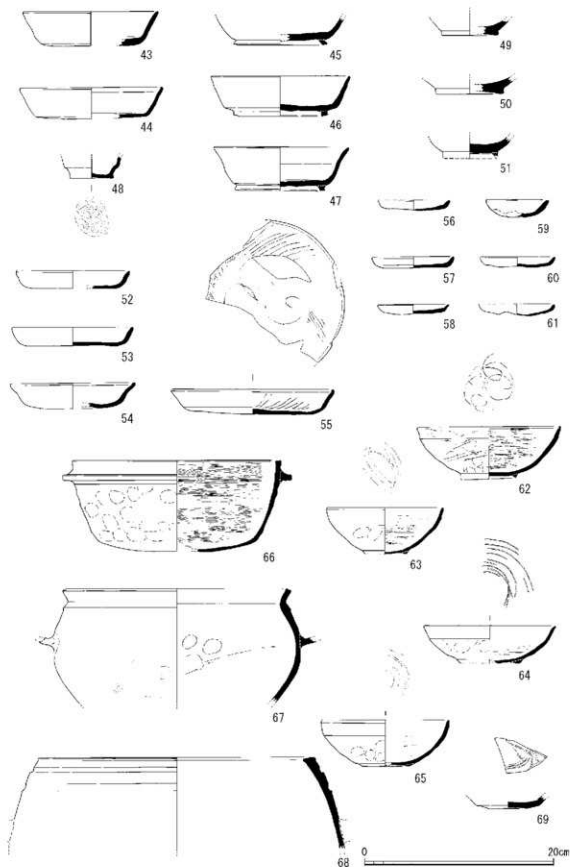
1～15(第11図)は第1トレンチ出土で、16～69(第12～14図)は第2トレンチ出土のものである。遺構出土のものは破片であったため、掲載した実測図は包含層や断ち割りに際して出土したものである。16～35・37～39・41～43は、2トレンチの中世の遺構面下から検出した遺物包含層出土のものである。出土地区や法量については、観察表に記載した。

1・2は須恵器杯蓋である。3は須恵器杯身である。4・5は須恵器の蓋である。6・7は須恵器の杯Bである。8は土師器杯である。9は古墳時代前期の土師器の甕である。10は大きく逆八字状に開く口縁部で、半ばに凹線が1条巡る。11は須恵器の蓋である。天井部中央につまみの欠損痕跡が認められる。12は須恵壺の体部である。13は瓦質の甌である。内外面は回転ナデで、内面底部付近は粘土の継ぎ目が残されている。底部はケズリ調整があり、2か所の大きな蒸気孔がある。14は須恵質の煙突状土製品である。口縁部外面にはタタキの痕跡が残る。15は、須恵器甕である。1トレンチからは古墳時代前期から中世までの遺物が出土している。

16～18は須恵器蓋である。19は須恵器杯Aである。20～23は須恵器杯Bである。24は須恵器の短頸壺である。25は輪状高台の付く須恵器の壺である。26は須恵器杯Bである。27～32は土師器杯である。33～35は土師器杯で、内面底部と体部に暗紋を施す。36～42は、土師器甕である。43～44は須恵器杯Aである。43は内面に漆が付着する。45～47は須恵器杯Bである。48は須恵器甌子である。底部外面に糸切り痕が残る。49～51は緑釉陶器の椀である。緑釉は濃緑色や薄緑色



第13図 出土遺物実測図(3)



第14図 出土遺物実測図(4)

のものがある。52～55は土師器杯である。55は内面に暗文を施す。56～61は土師器皿である。62～65は、瓦器椀である。66～68は瓦質の羽釜である。66は鈿部下半に煤が付着する。68は鈿部が欠損している。69は中国同安窯の青磁皿である。

2トレンチ出土の中世の土師器皿は13世紀前後に該当すると思われる。瓦器椀についてもほぼこの時期に当てはまる。緑軸陶器については9世紀後半のものと思われる。中世遺構面下の遺物包含層出土の土器群は、8世紀中頃のものである。

5. まとめ

今回の調査の結果、古墳時代前期から13世紀にかけての遺物が出土した。2トレンチで検出した遺構は、12～13世紀に属する。また下層から出土した8世紀中頃の土器群は、遺構の検出には至らなかったが、周辺にこの時期の遺構が存在することを示しており、今後の周辺部での調査に期待される。今回の遺物や遺構は、古代の奈良郷や中世の川口郷の広がりを考える上で貴重な資料となった。

注1 福島孝行「木津川河床遺跡第26次調査」(『京都府埋蔵文化財調査報告書』京都府教育委員会)2015

注2 八幡市誌編集委員会編(『八幡市誌』第1・2巻)1986・1980

注3 寒川 旭「付載 木津川河床遺跡で検出された地震の液状化跡」(『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第17集)1995

付表 出土遺物観察表

番号	器種	器形	出土地			法量 (cm)		手法上の特徴
			トレンチ	地区	遺構番号	口径	器高	
1	須恵器	杯蓋	1トレンチ	6・7区	—	94	31	天：ヘラ削り。口：ロクロナデ。
2	須恵器	杯蓋	1トレンチ	6・7区	—	115	33	天：ヘラ削り。口：ロクロナデ。
3	須恵器	杯身	1トレンチ	6区	—	102	30	底：ヘラ削り。口：ロクロナデ。
4	須恵器	蓋	1トレンチ	2区	—	—	—	天：ロクロナデ。
5	須恵器	蓋	1トレンチ	7区	—	166	20	天～口：ロクロナデ
6	須恵器	杯	1トレンチ	5区	—	—	—	底：ロクロナデ
7	須恵器	杯	1トレンチ	6・7区	—	155	47	底～口：ロクロナデ
8	土師器	杯	1トレンチ	6・7区	—	128	32	底～口：ロクロナデ
9	土師器	羹	1トレンチ	7区	—	160	—	口：ナデ
10	須恵器	横瓶口	1トレンチ	6・7区	—	93	—	口：ロクロナデ
11	須恵器	蓋	1トレンチ	6・7区	—	178	56	天：ヘラ削り。口：ロクロナデ
12	須恵器	壺	1トレンチ	6・7区	—	—	—	体：ヘラ削り+ナデ
13	瓦質	瓶	1トレンチ	6・7区	—	220	206	口～体：ロクロ、底部ケズリ、ナデ
14	須恵器	燗突状土製品	1トレンチ	6・7区	—	102	—	口～体：ナデ。タタキ
15	須恵器	羹	1トレンチ	6・7区	—	200	—	口：ナデ。体：タタキ
16	須恵器	蓋	2トレンチ	8区	遺物包含層	143	215	天～口：ロクロナデ
17	須恵器	蓋	2トレンチ	8区	遺物包含層	154	165	天～口：ロクロナデ
18	須恵器	蓋	2トレンチ	8区	遺物包含層	157	20	天～口：ロクロナデ
19	須恵器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	134	32	底～口：ロクロナデ
20	須恵器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	142	92	底～口：ロクロナデ

番号	器種	器形	出土地			法量 (cm)		手法上の特徴
			トレンチ	地区	遺構番号	口径	器高	
21	須恵器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	156	43	底～口：ロクロナデ
22	須恵器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	103	30	底・体：ロクロナデ
23	須恵器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	135	93	底～口：ロクロナデ
24	須恵器	短頸壺	2トレンチ	8区	遺物包含層	92	—	口・体：ロクロナデ
25	須恵器	壺	2トレンチ	8区	遺物包含層	—	—	体：ロクロナデ
26	須恵器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	260	146	底～口：ナデ
27	土師器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	141	35	底～口：ナデ
28	土師器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	137	32	底～口：ナデ
29	土師器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	132	41	底～口：ナデ
30	土師器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	138	34	底～口：ナデ
31	土師器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	170	34	底～口：ナデ
32	土師器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	188	23	底～口：ナデ
33	土師器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	11	29	底：ケズリ+ナデ。口：ナデ+暗紋
34	土師器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	16	24	底：ケズリ+ナデ。口：ナデ+暗紋
35	土師器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	11	32	底：ケズリ+ナデ。口：ナデ+暗紋
36	土師器	羹	2トレンチ	2区	—	158	—	口：ナデ。体：ハケ
37	土師器	羹	2トレンチ	8区	遺物包含層	148	118	口：ナデ。体：ハケ
38	土師器	羹	2トレンチ	8区	遺物包含層	268	—	口：ナデ。体：ケズリ
39	土師器	羹	2トレンチ	8区	遺物包含層	216	—	口～体：ハケ
40	土師器	羹	2トレンチ	2区	—	214	—	口：ナデ。体：ハケ
41	土師器	羹	2トレンチ	8区	遺物包含層	224	—	口：ナデ。体：ハケ
42	土師器	羹	2トレンチ	8区	遺物包含層	268	—	口：ナデ。体：ハケ
43	須恵器	杯	2トレンチ	8区	遺物包含層	141	37	底～口：ナデ
44	須恵器	杯	2トレンチ	3区	—	148	33	底～口：ナデ
45	須恵器	杯	2トレンチ	3区	—	88	31	底・体：ロクロナデ
46	須恵器	杯	2トレンチ	5区	—	145	43	底～口：ロクロナデ
47	須恵器	杯	2トレンチ	5区	—	143	47	底～口：ロクロナデ
48	須恵器	瓶子	2トレンチ	5区	—	—	—	体：ロクロナデ。底：糸切り
49	緑釉陶器	椀	2トレンチ	2区	—	—	—	体：ロクロナデ。底：割りだし高台
50	緑釉陶器	椀	2トレンチ	4区	—	—	—	体：ロクロナデ。底：割りだし高台
51	緑釉陶器	椀	2トレンチ	8・9区	—	—	—	体：ロクロナデ。底：割りだし高台
52	土師器	杯	2トレンチ	7区	—	118	20	底～口：ナデ
53	土師器	杯	2トレンチ	7区	—	129	20	底～口：ナデ
54	土師器	杯	2トレンチ	10区	—	130	27	底～口：ナデ
55	土師器	杯	2トレンチ	9区	—	171	26	底：ケズリ+ナデ。口：ナデ+暗紋
56	土師器	皿	2トレンチ	7区	—	75	11	底～口：ナデ
57	土師器	皿	2トレンチ	7区	—	82	12	底～口：ナデ
58	土師器	皿	2トレンチ	7区	—	74	11	底～口：ナデ
59	土師器	皿	2トレンチ	7区	—	64	19	底～口：ナデ
60	土師器	皿	2トレンチ	7区	—	78	11	底～口：ナデ
61	土師器	皿	2トレンチ	7区	—	78	13	底～口：ナデ
62	瓦器	椀	2トレンチ	10区	—	150	56	底～口：ナデ+暗紋
63	瓦器	椀	2トレンチ	7区	—	122	49	底～口：ナデ+暗紋
64	瓦器	椀	2トレンチ	7区	—	138	40	底～口：ナデ+暗紋
65	瓦器	椀	2トレンチ	7区	—	135	49	底～口：ナデ+暗紋
66	瓦質	羽釜	2トレンチ	7区	—	218	96	底～口：ナデ+ハケ
67	土師器	羽釜	2トレンチ	5区	—	134	—	口：ナデ。体：ナデ+ハケ+ケズリ
68	瓦質	羽釜	2トレンチ	7区	—	290	—	口：ナデ
69	青磁	椀	2トレンチ	10区	—	—	—	底：ケズリ。中国回安楽

2. 平等院旧境内遺跡発掘調査報告

1. はじめに

今回の発掘調査は、塔の島地区改修事業に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所の依頼を受けて実施した。調査地は、宇治川の分流である塔川の河床で、世界遺産平等院の東側に位置する。

平等院は、父藤原道長から宇治の別業を継承した藤原頼通により、永承7(1052)年に創建された寺院である。当時の平等院境内地は現在よりかなり広範であったと考えられている。想定される旧境内地が現在の平等院旧境内遺跡として捉えられている。現在では二条城、清水寺などとも1994年、ユネスコにより「古都京都の文化財」として世界遺産に登録されている。

発掘調査は平成24年度から行っており、今回で3回目の調査となる。これまでの調査で、川底を急激な水流から保護するために打たれた杭群や木杭と河川礫で構築された堤状遺構を検出した。堤状遺構の木杭の放射性炭素年代測定を行ったところ、15世紀(室町時代)の年代を示すものがあった。

調査にあたっては、京都府教育委員会や宇治市教育委員会、宇治市都市整備部歴史まちづくり推進課文化財保護係、宇治市観光協会、宗教法人平等院、宇治市歴史資料館 小嶋正亮氏などにご協力いただいた。感謝したい。なお、調査に係る経費は、すべて国土交通省近畿地方整備局淀川河川事務所が負担した。

〔調査体制等〕

平成24年度

現地調査責任者 調査第2課長 水谷壽克

現地調査担当者 調査第2課課長補佐兼調査第1係長 小池 寛

同 調査員 加藤雅士

調査場所 宇治市宇治塔川

現地調査期間 平成24年12月6日～平成25年1月16日

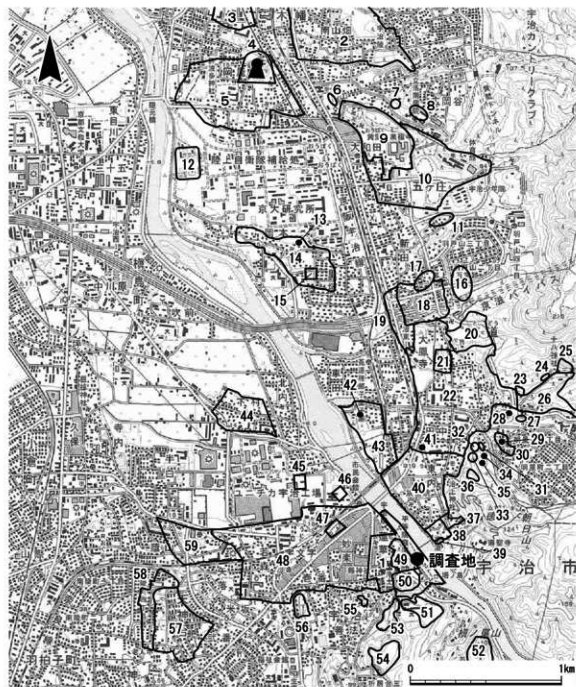
調査面積 400㎡

平成25年度

現地調査責任者 調査課長 水谷壽克

現地調査担当者 調査課調査第2係長 岩松 保

同 主任 増田孝彦



第1図 周辺地図及び周辺遺跡

- | | | | |
|--------------|----------------|----------------|------------------|
| 1. 平等院旧境内遺跡 | 2. 木幡古墳群 | 3. 西浦遺跡 | 4. 二子塚古墳 |
| 5. 寺界遺跡 | 6. 芝ノ東宮跡 | 7. 広岡谷古墓 | 8. 広岡谷遺跡 |
| 9. 萬福寺 | 10. 萬福寺塔頭跡 | 11. 一寺割遺跡 | 12. 尼ヶ塚遺跡 |
| 13. 鹿寺山古墳 | 14. 岡本遺跡 | 15. 岡本塚寺 | 16. 羽戸山遺跡 |
| 17. 牟上り瓦窯跡 | 18. 牟上り遺跡 | 19. 西牟上り遺跡 | 20. 東中遺跡 |
| 21. 大鳳寺跡 | 22. 菟道遺跡 | 23. 志賀谷窯跡 | 24. 三室戸瓦窯跡 |
| 25. 三室戸境内遺跡 | 26. 三室戸子院跡 | 27. 池山瓦窯跡 | 28. 池山古墳 |
| 29. 妙見古墳 | 30. 妙見古墓 | 31. 山本古墓 | 32. 山本瓦窯跡(宇治瓦窯) |
| 33. 山本窯跡 | 34. 二子山北墳(1号墳) | 35. 二子山南墳(2号墳) | 36. 山本古墳 |
| 37. 宇治上神社遺跡 | 38. 宇治神社遺跡 | 39. 悪心院山門前遺跡 | 40. 宇治市街遺跡(川東地区) |
| 41. 狐塚古墳 | 42. 菟道丸山古墳 | 43. 乙方遺跡 | 44. 榎島城跡 |
| 45. 茶壺蔵跡(再建) | 46. 茶壺蔵跡(前建) | 47. 宇治代官所跡 | 48. 宇治市街遺跡(川西地区) |
| 49. 平等院庭園 | 50. 塔ノ川遺跡 | 51. 新別所山遺跡 | 52. 院御所山遺跡 |
| 53. 宇治東山遺跡 | 54. 宇治東山山上遺跡 | 55. 善法古墓 | 56. 下居遺跡 |
| 57. 蛇塚遺跡 | 58. 池森天神遺跡 | 59. 八落遺跡 | |

調査場所 宇治市宇治塔川
 現地調査期間 平成26年2月3日～3月4日
 調査面積 480㎡

平成26年度

現地調査責任者	調査課長	石井清司
現地調査担当者	調査課課長補佐兼調査第2係長	岩松 保
	同 副主査	引原茂治
	同 調査員	竹村亮仁

調査場所 宇治市宇治塔川
 調査期間 平成26年12月16日～平成27年3月10日
 調査面積 1,600㎡

平成27年度整理報告

整理報告責任者	調査課長	有井広幸
整理報告担当者	調査課課長補佐兼調査第1係長	細川康晴
	同 副主査	引原茂治

(引原茂治)

2. 位置と環境

1) 地理的環境

調査対象地である平等院旧境内遺跡が所在する宇治市は、京都盆地の東南に位置している。市の周囲は京都市、久御山市、城陽市、宇治田原町に接しており、東は滋賀県大津市と背接している。宇治市の中央を流れる宇治川は、淀川水系に属し、琵琶湖にその端を發し、瀬田川へと流れ込み、京都府に入り、名を宇治川と改める。かつては、巨椋池に注ぎ、淀川に流れ込む形であったが、文禄3(1594)年に豊臣秀吉によって、堤が築かれ、巨椋池と分断される形となった。1941年に干拓によって巨椋池が消滅した現在では、大山崎町で、桂川、木津川と合流し、さらに淀川へと流れ込み、大阪湾へと続く。

今回の調査地は、平等院より東に約80mの地点であり、宇治川の分流である塔川にかかる喜撰橋、橋橋の間にあたる。

2) 歴史的環境

平等院旧境内遺跡周辺の著名な建造物及び遺跡として浄妙寺跡や白川金色院跡、宇治上神社、菟道稚郎子の墓とされる丸山古墳や藤原氏に関係すると言われる木幡古墳群・古墓群、宇治川東部における最大の古墳である二子塚古墳、豊臣秀吉が築造させた史跡宇治川太閤堤跡などがあげられる。宇治市には平等院を含め、藤原氏に関連する遺構が多く存在している。

宇治市の歴史は、旧石器時代後期に遡り、縄文時代、弥生時代には、宇治川、巨椋池の周辺の

低い台地に集落が形成されていた。西準上がり遺跡では、木葉形尖頭器、押し型土器などが出土している。乙方遺跡では弥生時代中期の竪穴建物、方形周溝竃が見つかった。

古墳時代後期には、宇治二子塚古墳が築造される。後期古墳としては京都府最大級のもので、宇治川を見下ろす位置に築かれている。全長100mを超える前方後円墳であることが宇治市の調査によって確認されている。墳丘の一部は大正時代に開発により破壊されているが、宇治市の調査から二重周濠や造り出しの痕跡、段築テラスには円筒埴輪列が確認されている。埋葬施設については完全に破壊されているが、横穴式石室であると報告されている。さらに藤原一門に関連する木幡古墳群・古墓群が築造され、古墳時代から平安時代までに約350基の墳墓が築造された。

飛鳥時代に入ると準上り瓦窯跡で生産された瓦が飛鳥地域に供給される。大化2(646)年には僧道登により、宇治橋が作られ、宇治は交通の要所をして位置図けられるようになる。

平安時代になると、宇治市は貴族の別業が多く作られるようになる。平等院は左大臣源融の別業といわれ、その後、宇多天皇、藤原道長へと所有者を変え、永承7(1052)年に道長の子、藤原頼通により平等院は寺化されていく。かつての平等院の境内範囲は現在よりも広く考えられおり、平等院旧境内遺跡として周知されている。

寛弘2(1005)年藤原道長によって藤原一門の宗廟として建立された浄妙寺跡は1965・1991年に宇治市によって発掘調査が行われ、三昧堂と多宝塔と考えられる遺構が確認されている。三昧堂は北辺、東辺の遺存が顕著で、西辺は削平を受けている。基壇周辺及び南辺においては厚さ約0.5mもの焼土が確認されている。建物の規模としては7間四方である。一方、多宝塔と考えられている遺構については三昧堂の東辺から約20mの位置で確認している。明確な基壇、礎石などは検出されておらず、『中右記』からの伽藍配置の復元をもとに推定されている。

白川金色院跡は、平等院から南東に約1.5km離れた小盆地に位置している。康和4(1102)年に藤原頼通の娘、藤原寛子によって建立されたとされている。長祿4(1460)年に焼失し、その後再建され、「白川一六坊」と称されるほどの坊院を持つ中世的寺院として発展したが、明治初年の廃仏毀釈により廃寺となった。出土遺物の瓦類には今回の調査でも類例を確認した河内向山系の複弁六葉蓮華文を主文とし、中房に二巴を配するタイプも含まれている。この瓦は康和3(1101)年の平等院修理の際の瓦に位置付けられるものである。

宇治上神社は宇治川の東岸に位置し、平等院と同時に1994年に世界遺産に登録されている。その本殿は現存する日本最古の神社建築として有名である。使用木材の年代から康平3(1060)年ごろと推定されている。平等院との関係については不明だが、平等院の創建が永承7(1052)年であることから何らかの関係はあるものと考えられる。神社の南西には『延喜式』式内社である宇治神社が鎮座している。『延喜式』では宇治神社は2座と記載されていることから、宇治神社、宇治上神社の2社は対をなすものと考えられている。

鎌倉時代になると、建武3(1336)年に楠木正成によって、宇治が焼かれる。このことが転機となり、これまでの摂関家の別業の体制、景観が崩れて、平安時代に造られた地割を無視した新たな街作りが進められていく。

安土・桃山時代に入ると、豊臣秀吉により文禄3（1594）年に伏見城が築城されたことにより、宇治川の流れは大きく変貌する。これまで宇治橋あたりで分流に堤を築き、その流れを北進させ、伏見城に向かって流れるようにした。さらに小倉から向島に至る堤防を築くことで、京都から奈良を結ぶ大和街道を変更した。このことは交通の要としての宇治の性格を変化させていくことにつながった。

（竹村亮仁）

3. 調査概要

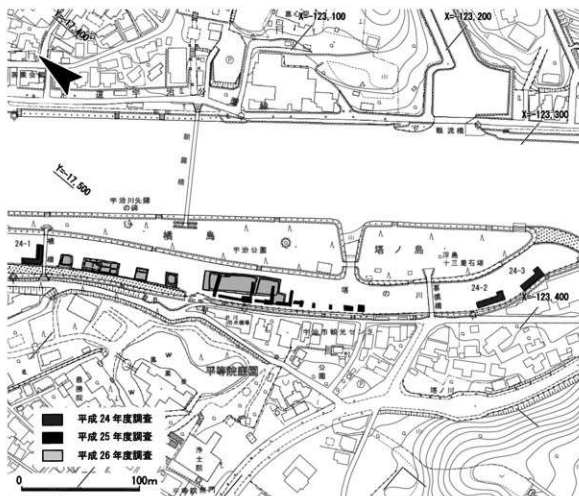
平等院旧境内遺跡は、平等院を中心に南北約400m、東西約400mをその範囲とし、平等院南側には塔ノ川遺跡が南北約130m、東西約160mを範囲に位置している。

平等院旧境内遺跡は、これまでに宇治市、当センターによって調査が行われている。細かな調査成果については割愛するが、これまでの調査成果により縄文時代から中世にかけての遺構、遺物が確認されている。

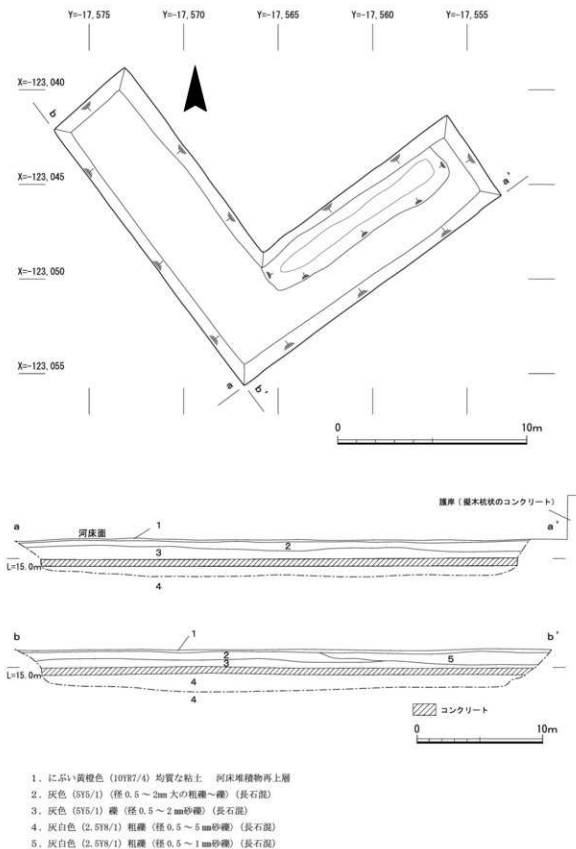
1) 検出遺構

(1) 平成24年度調査

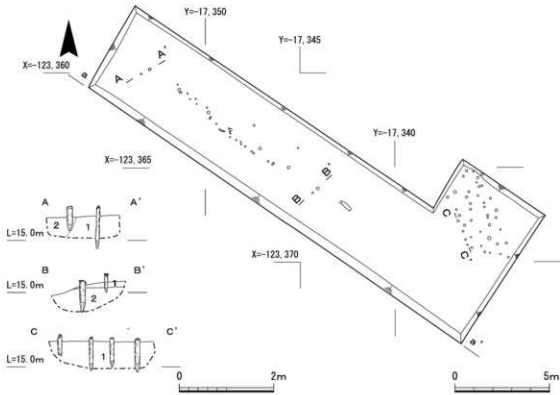
平成24年度調査は、橋橋下流部に1トレンチ、喜撰橋上流部に2、3トレンチを設定し、調査



第2図 トレンチ配置図

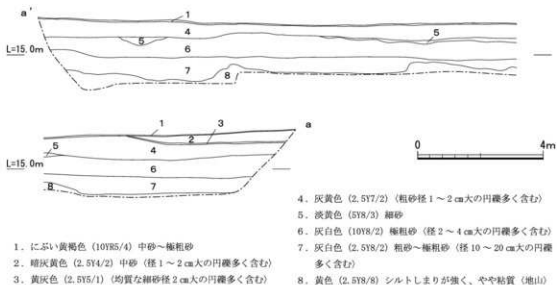


第3図 平成24年度1トレンチ平面及び断面図



- A 1. 灰白色 (2.5Y8/2) (径0.5～2mm大の粗砂～礫)
 2. 灰白色 (2.5Y8/2) 1と同じだが10cm大の円礫の混じる
- B 1. 灰白色 (10YR8/1) (径0.2～0.5mm大の中砂～粗砂が均質に混ざる)
- C 1. 灰白色 (2.5Y8/2) (0.5～2mm大の円礫混じる)
 1. 灰白色 (2.5Y8/2) (径0.5～2mmの中砂～礫が主
 2cm～10cm大の円礫が混ざる)

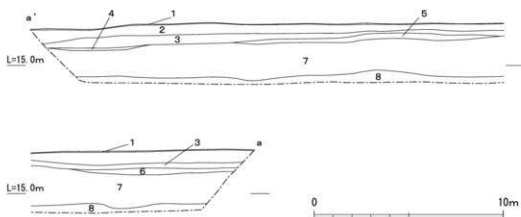
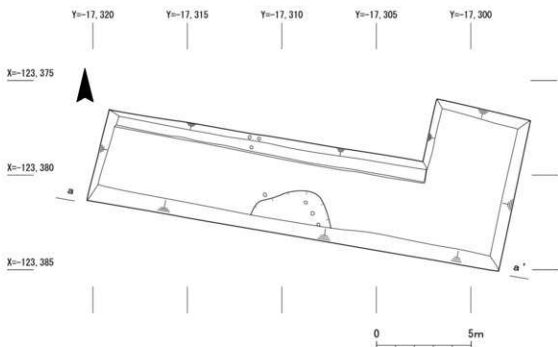
第4図 平成24年度2トレンチ平面図及び杭列断面図



1. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 中砂～極粗砂
 2. 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 中砂 (径1～2cm大の円礫多く含む)
 3. 黄灰色 (2.5Y5/1) (均質な細粗砂2cm大の円礫多く含む)
4. 灰黄色 (2.5Y7/2) (粗砂径1～2cm大の円礫多く含む)
 5. 淡黄色 (5Y8/3) 細砂
 6. 灰白色 (10YR/2) 極粗砂 (径2～4cm大の円礫多く含む)
 7. 灰白色 (2.5Y8/2) 粗砂～極粗砂 (径10～20cm大の円礫多く含む)
 8. 黄色 (2.5YR/8) シルトしまりが強く、やや粘質 (地山)

第5図 平成24年度2トレンチ南壁断面図

を行った。(第2図)1トレンチでは、現在の河床下約1.2mまで掘削を行ったが、河川堆積の礫層であった(第3図)。2、3トレンチでは、現代の遺物が含まれる河床最上面を除去後、杭列を検出した。2トレンチの杭列は2条確認でき、川に平行する列と川を斜めに走る列とがある。前者は、大小の杭が不規則ながら並んでいる。杭の間には板材等が存在していた可能性もあり、護



1. 褐色 (7.5YR4/3) 中砂 河床の最上層 この上にこぶし大の円礫のる
2. 明褐色 (7.5YR7/1) 極粗砂 径1~3cm大の円礫多く混
3. 褐色 (10YR6/1) 粗砂~中砂均質
4. 浅黄褐色 (10YR8/4) 中砂 弱い流れ
5. 灰白色 (2.5YR/2) 中砂均質 弱い流れ
6. 灰黄色 (2.5Y7/2) シルト 均質 弱い流れ
7. 灰白色 (10YR8/1) 中砂~極粗砂 径1~20cm大の円礫非常に多く含む
8. 灰白色 (2.5YR/1) 中砂~粗砂 径2cm大の円礫少し含む

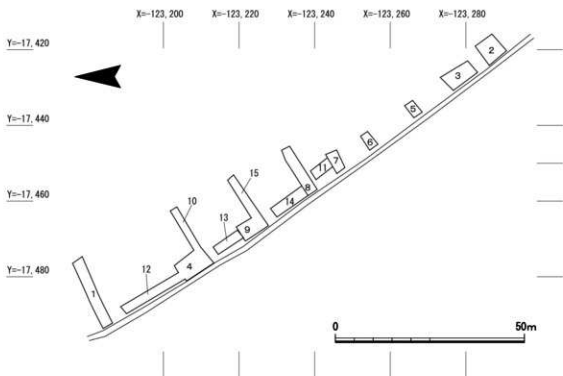
第7図 平成24年度3トレンチ南壁断面図

岸施設と考えられる。直径約0.2mほどの杭が約1.8mの等間隔に打たれる、約12.5mの杭列である。その右岸には直径約0.1m程度の杭が不規則に並んでおり、2孔の杭の間には板材などが存在していた可能性が指摘されている。いずれも手斧のようなもので先端が削られている。後者は、下流方向に45度程度で伸びる杭列で、直径0.1～0.2mの杭が混在して打たれている。前者の杭列を水流から保護するものと考えられる。さらに円礫をからませることでその機能を高めていたものと推定される。3トレンチでも残存状況は不良であるが、宇治川下流に向かっての伸びている杭列を確認した。2、3トレンチの杭列の年代決定は難しいが、浅いものでは明治時代の遺物を含む層の下0.3m程度で留まっていることから、明治時代以降に打たれたものと考えられる。

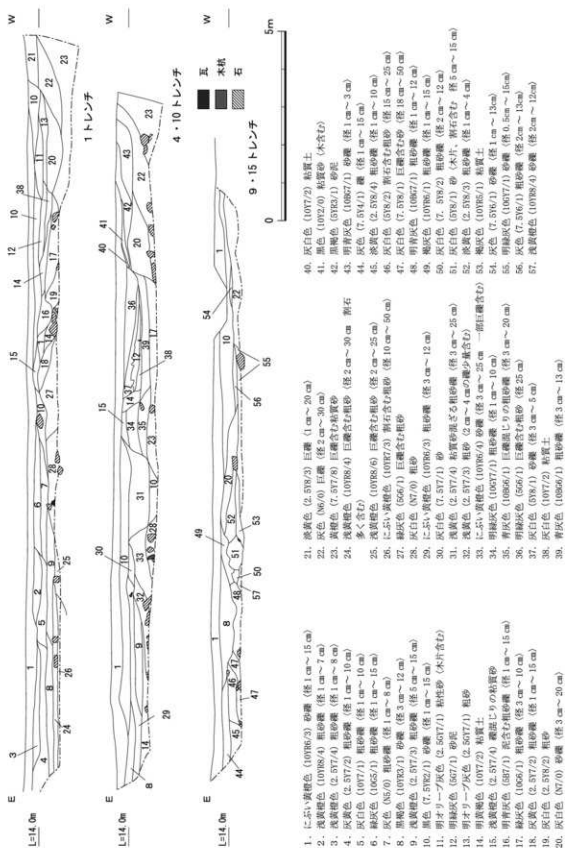
(2) 平成25年度調査

喜撰橋下流約130mに、15か所の調査区を設定し、調査を実施した結果、古い時期の旧河道や護岸施設を確認した。最も新しい河道では、現在の護岸矢板を打ち込んだ護岸施設築造時期のもので、それより下層では3～4条の河道を確認したが、時期については不明である。河道については1トレンチ、10トレンチの断面には確認できるが、15トレンチの断面では確認することができない。それより下層では巨礫検出し、その下に基盤層を確認した。さらに塔の川中央に向けてトレンチを拡張した結果、河道跡及び護岸施設を確認した。

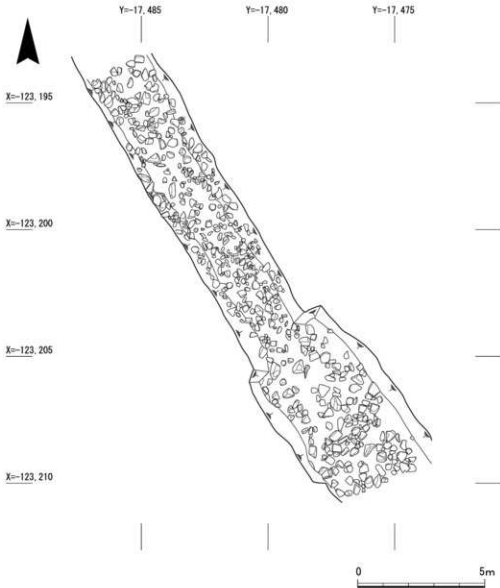
基盤層上面で検出した巨礫については、伏臥構造と呼ばれる自然堆積と判断された。塔の川中央付近で確認した幅約4～6mの巨礫の広がり、伏臥構造のように一定方向に礫が向かず、人工的に配置され、両端全面には杭が打たれ、固定された堤状遺構を推定される。巨礫の間からは奈良時代から平安時代の布目瓦が出土しており、平等院の関連施設の可能性が指摘された。



第8図 平成25年度トレンチ配置図



第9図 平成25年度1・4・10・9・15トレンチ断面図



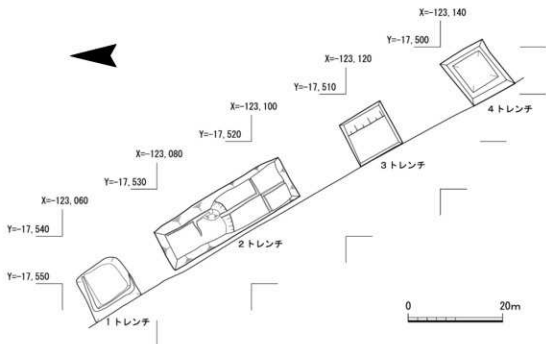
第10図 平成25年度4、12トレンチ伏臥構造物検出状況図

(3)平成26年度調査

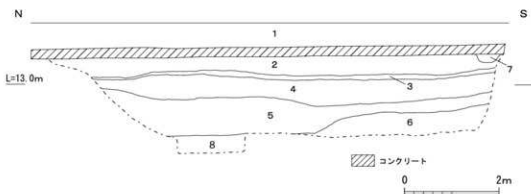
平成26年度の調査は塔の川にかかる喜撰橋から橋橋の間に5か所の調査区を設定し、調査を行った。平成25年度の調査で指摘された堤状遺構の全容を確認するとともに、これまで調査されていなかった橋橋上流部に調査区を設けて、遺構の有無を確認した。

1 トレンチ 調査区のもっとも北に位置する。上層から現在の河川堆積、コンクリート、その下0.2mは河川工事の際の攪乱であった。トレンチ南側には1mほどの巨礫を含む円礫層が広がり、その下層に固く締まった黄褐色のシルトが地山まで続く。黄褐色のシルト下、約0.1mには明青灰色のシルト層が続く。北側には角礫層が堆積し、この角礫層からは古銭や近世の遺物が出土しているが、遺構という判断は積極的にはできなかった。

2 トレンチ 1トレンチの上流部に位置し、釣殿推定地とされる位置にあたる。河川工事による攪乱付近までは1トレンチと同一の層位を呈する。攪乱以下は細砂層、地山の円礫層である。



第11図 平成26年度1、2、3、4トレンチ配置図

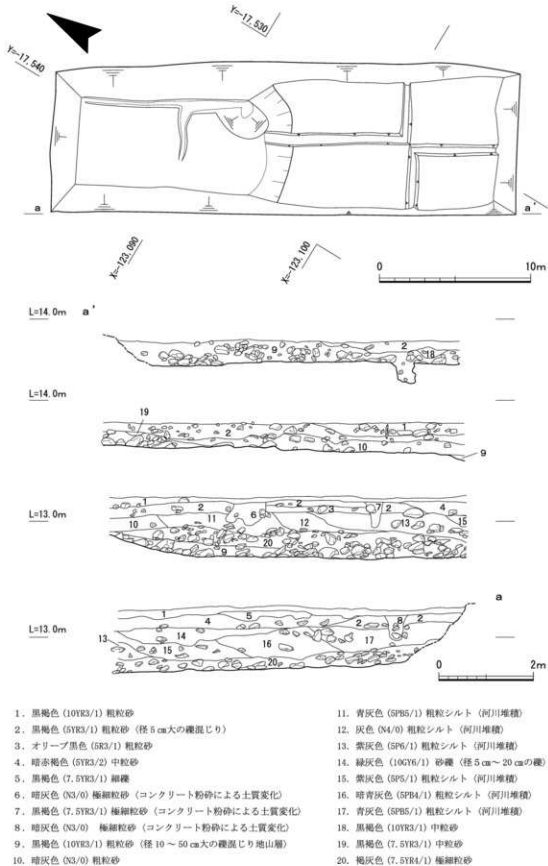


- | | |
|---------------------------------------|---|
| 1. 灰色 (5Y4/1) 礫 (現在の河床堆積) | 5. 黒色 (2.5Y5/6) 礫 (20 cm大の角礫) |
| 2. 灰白色 (2.5Y8/1) 砂礫 (径 2 mm~20 cmの砂礫) | 6. 黄褐色 (2.5Y5/6) 礫 (径 1 cm~5 cmの礫) |
| 3. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 礫 (径 1 cm~5 cmの礫) | 7. 暗オリーブ灰色 (2.5GY/1) 礫 (径 1 cm~10 cmの礫) |
| 4. 黄褐色 (10YR7/8) 砂礫 (径 1 mm~20 cmの砂礫) | 8. 明黄褐色 (10YR6/8) シルト質極細粒砂 (硬質シルト) |

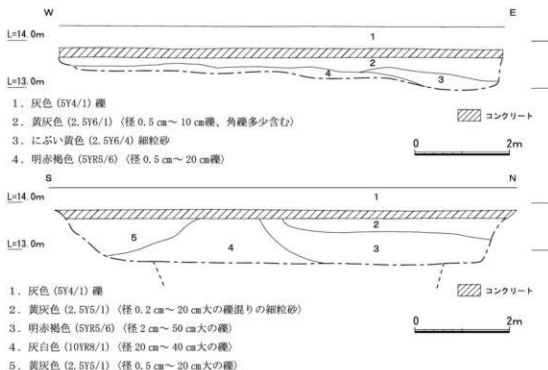
第12図 平成26年度1トレンチ東壁断面図

河川改修による攪乱までは、水平堆積、砂層から下は西から東に下がる堆積を呈している。南北については、南から北に向かって落ち込む堆積を確認している。出土遺物は瓦や中世の土師器皿が出土した。瓦はトレンチ南東部より多く出土した。トレンチ北側では一段下がる地形が確認され、土師器皿や銭貨などが出土した。いずれも攪乱下層の細砂層に包含するものである。包含量から遺構が期待されたが、遺構は検出されなかった。

3トレンチ コンクリート下約0.4mまでは現代の河川改修による攪乱層である。攪乱層直下に地山と思われる0.2m大の円礫層が確認された。この円礫層は2トレンチ同様に西側に向かって上がる様相を呈し、トレンチ東側の断面には途中から細砂が円礫層の上に堆積する。この細砂



第13図 平成26年度2トレンチ平面及び西壁断面図



第14図 平成26年度3トレンチ北壁及び4トレンチ西壁断面図

層は河川の流れによって堆積したものと考えられる。2トレンチでは地山の円礫層に被る砂層から瓦が検出されたが、遺物はほとんど出土しなかった。

4トレンチ 3トレンチと同様な堆積を確認した。コンクリート下約4m掘削を行ったが、0.3~0.5m程度の円礫層が続き、1トレンチで確認したシルト層は確認できなかった。さらに、1~3トレンチでみられる砂層についても確認できなかった。遺物は出土していない。

5トレンチ 平成25年度調査で堤状遺構が確認され、その全容を明らかにするため、昨年度の調査区に重なる形で南北50m×東西6mの調査区を設定し、調査を行った。

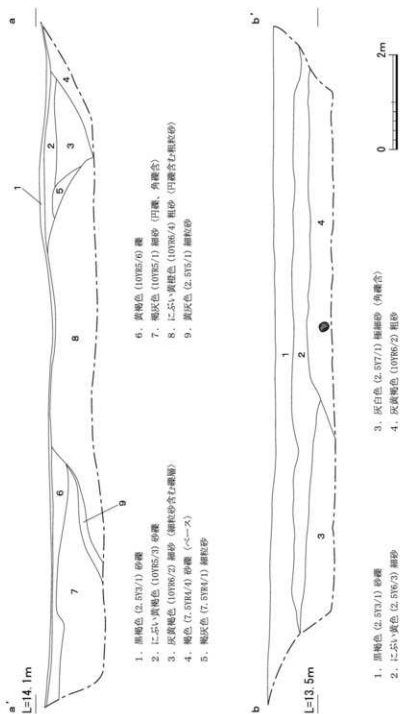
調査の結果、旧河道については面的に確認することができなかった。そのため、堤状遺構の直上まで重機掘削を行った調査の結果、堤状遺構SX01を一基確認した。

SX01 南北約53m×東西約5mの範囲に杭と人頭大の礫群を確認した。平成25年度で確認したものは、今回検出した遺構の最上面と考えられ、掘削深度は、昨年度よりも深い。礫群は規則性を持たず、川に面していたと推定される遺構東側も石垣状には配置されていない。礫の大きさは上流部、下流部で差は認められない。もともと張り出す地点では、石出し状を呈す。川の流れを制御する目的で造られたと考えられる。上流部の石だし状施設は礫や杭の密度は薄く、性格付けは難しいが、石出し状施設の突出部と考えられる礫群が一部残ることから下流部と同様な施設が築かれていたと推定される。下流部の石だし状施設では、瓦や杭が密集して出土する。最下流部では、護岸施設が西岸側に屈折する。トレンチ外に向かうため、全容は確認できなかったが、西岸まで伸びていたものと推定される。

杭の検出は、堤防全体では部分的なものである。上流部は、上流から下流に向かって列状に配



第15図 平成26年度5トレンチ平面図

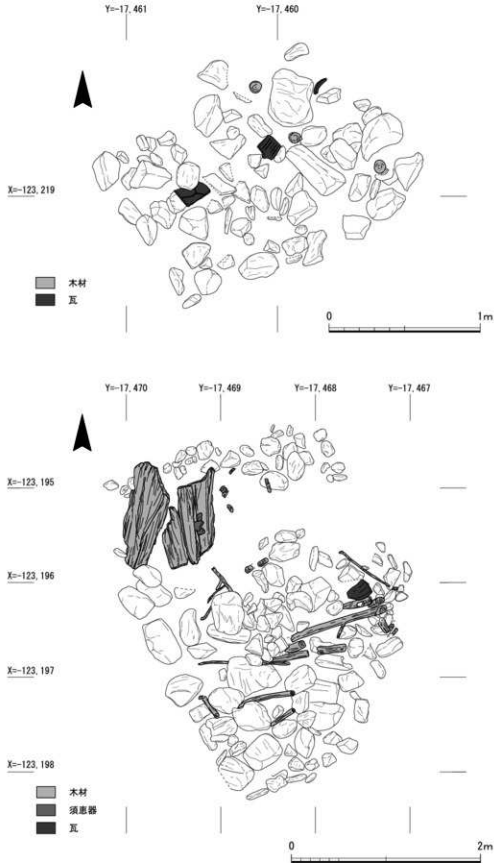


第16図 平成26年度5トレンチ各層断面図

されているが、明確な規則性は認められない。中央部の杭群は石出し状施設に伴うものと推定されるが、判然としない。平安時代の瓦がこの地点から出土した。下流部の杭群についても石出し状施設に伴うものと推定される。突出部に沿うように設置されているようにも見えるが、一部の杭は、杭止め護岸と考えられるが、支え柱や、頭押えは見られず、積極的な判断はできない。

面的には左岸側に向かい、緩やかに円弧をなしている。堤状遺構からは磨滅した瓦片、近代の陶磁器片、明治時代の十銭銅貨などが出土しており、近世以降まで使用されていた可能性がある。

(竹村亮仁)



第17図 平成26年度 S X01遺物出土状況図

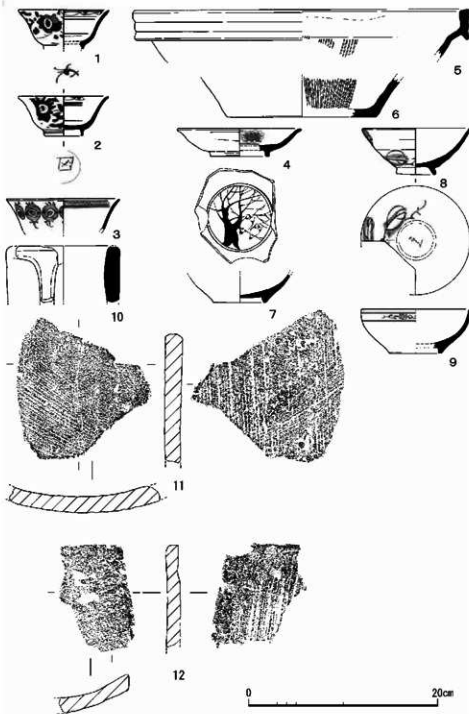
4. 出土遺物

平等院旧境内遺跡の調査では、平成24年度に整理箱1箱、平成25年度に2箱、平成26年度に43箱、計46箱の遺物が出土した。多数を占めるのが瓦類である。ほかに、土器、陶磁器、銭貨、石造物などがある。時期的には、主に平安時代から近世の遺物である。ここでは、調査年度毎に出土遺物を報告する。なお、法量などの詳細は、出土遺物観察表に記載する。

(1) 平成24年度出土遺物(第18図)

1～10は、3トレンチの砂層から出土した。1～3は中国製の青花磁器小椀とみられる。外面に花文を描く。器胎は薄く、口縁部は強く外反する。1・2は同文である。3はやや大振りになるものとみられる。4は中国製の青花磁器皿である。内面に花文を描く。口縁部は外反する。

5は漆焼播鉢の口縁部である。7本単位の櫛状工具で播目が引かれる。18世紀頃のものともみられる。6も

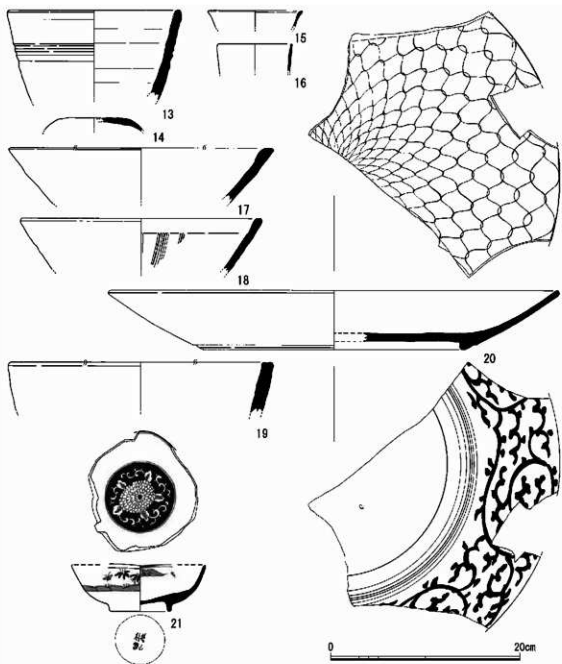


第18図 平成24年度出土遺物実測図

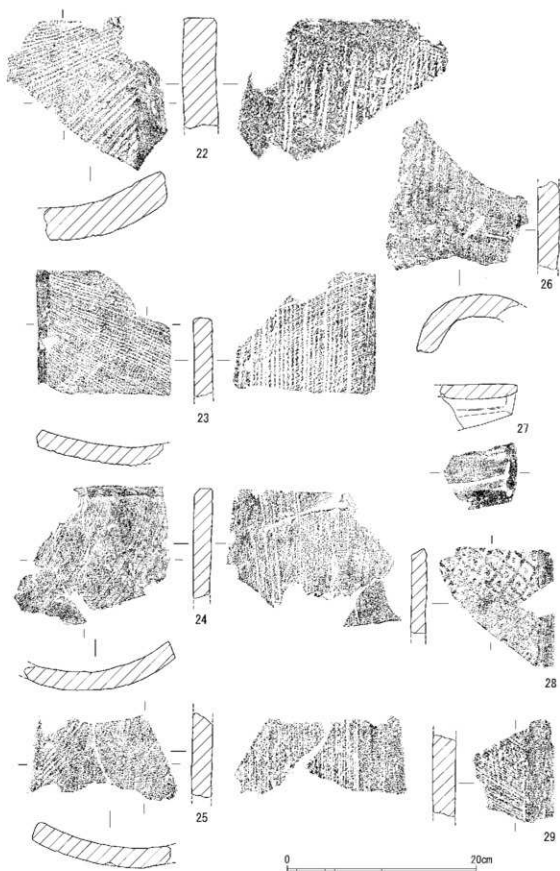
漆焼播鉢の底部とみられる。

7は京焼系の陶器鉢で、見込みに樹枝に止まる泉文を描く。底部は萁笥底状である。近世後期以降のものともみられる。8は柴付磁器碗である。外面に枝葉文を描く。高台内に「六兵衛」の銘をもつ。京焼の清水六兵衛窯の製品で、近世後期以降のものともみられる。9は京焼系の陶器鉢である。外面口縁部に唐草文を描く。底部は萁笥底状で、8と同様の器形ともみられる。近世後期以降のものともみられる。10は陶製もしくは土師質の五徳の一部ともみられる。

11・12は2トレンチから出土した。11は平瓦で、凹面に布目痕、凸面に縄タタキ痕がみられる。12も平瓦で、凹面に布目痕、凸面に縄タタキ痕がみられる。いずれも、古代のものともみられる。



第19図 平成25年度出土遺物実測図1(土器・陶磁器)



第20図 平成25年度出土遺物実測図2(瓦)

(2) 平成25年度出土遺物(第19・20図)

13は須恵器播鉢の口縁部とみられる。外面に2条の沈線を巡らす。古墳時代のものか。14は須恵器杯蓋とみられる。やや小型のものとみられ、古墳時代後期以降の須恵器と考えられる。7世紀頃の杯身の可能性もある。4トレンチから出土した。15は中国製の白磁小碗である。器胎は薄手で、口縁端部が外反する。16は中国製の白磁とみられる。筒状の杯とも考えられる。17は信楽焼の鉢である。胎土に長石粒を含む。17世紀頃の製品とみられる。9トレンチから出土した。18は信楽焼の播鉢である。5本単位の櫛状工具で播目が引かれる。胎土に長石粒を含み、17世紀頃の製品とみられる。9トレンチから出土した。19は瓦質の火舎と考えられる。器胎は厚手であり、無紋である。中世末～近世初頭頃のものか。1トレンチから出土した。20は染付磁器大皿である。肥前磁器(伊万里)とみられる。内面には網目文、外面には唐草文を描く。高台内にハリ支えの痕跡が残る。11トレンチから出土した。21は染付磁器鉢である。口縁端部は輪花状であり、6角もしくは8角の多角形に整形しているとみられる。高台内に「花山精製」の銘がある。産地は不明である。18世紀後半以降のものとみられる。9トレンチから出土した。

22は平瓦で、凹面に布目痕、凸面に縄タタキ痕がみられる。厚手の瓦である。23は平瓦で、22と同様に、凹面に布目痕、凸面に縄タタキ痕がみられる。29も同様の平瓦である。24は平瓦で、凹面に布目痕、凸面に細かい縄タタキ痕がみられる。25は平瓦で、24と同様に、凹面に布目痕、凸面に細かい縄タタキ痕がみられる。28は平瓦で、凸面に菱形蛇の目格子タタキ痕がみられる。26は丸瓦で、凸面に細かい縄タタキ痕がみられる。27は丸瓦の尾部で、凹面に布目痕がみられる。以上の瓦は、古代から中世にかけての瓦と考えられる。なお、22～25・29は1トレンチ出土、26～28は11トレンチ出土である。

(3) 平成26年度出土遺物

平成26年度の出土遺物は他の年度に比べて出土量が多く、種類も多い。特に瓦類の出土が多いのが特色である。そのため、種類別に項目を立てて報告する。また、瓦類については、トレンチ毎に報告することとしたい。

①土器・陶磁器(第21図)

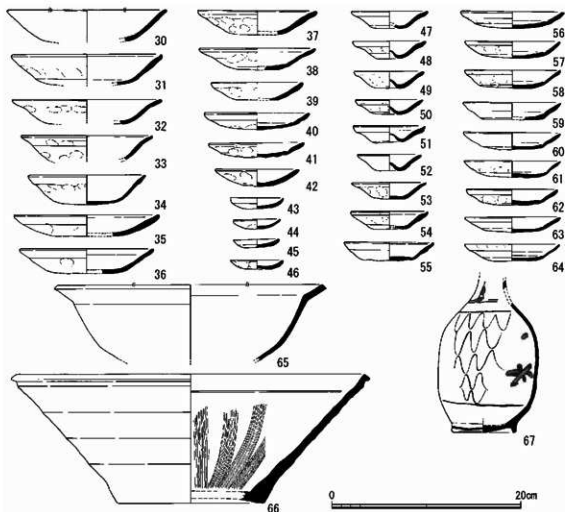
出土した土器では、土師器皿について、『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書(宗教法人平等院 2003)』(以下、整備報告書とする。)で分類が行われている。したがって、その成果と整合性をもたせるため、その分類に従うこととする。なお、図示した遺物は、66以外、全て2トレンチから出土した。66は5トレンチ出土である。

30～36は大形の土師器皿で、平坦な底部から口縁部が丸く屈曲して立ち上がる。器胎はおおよそ薄手で、深めの器形である。内面および口縁端部はナデ調整、外面には指オサエの痕跡が残る。整備報告書の分類ではJⅠ類で、15世紀後葉頃を中心とした時期のものとみられる。37～39は土師器皿で、上記の土師器皿の中形のものともみられる。内面および口縁端部はナデ調整、外面には指オサエの痕跡が残る。JⅡ類で、15世紀後葉頃を中心とした時期のものとみられる。40・41・55は土師器皿で、内面の底部と口縁部の屈曲がやや強くなる。器形は浅目である。内面および口

縁端部はナデ調整、外面には指オサエの痕跡が残る。16世紀頃のものか。47～52は底部の中央が窪む土師器皿で、ヘソ皿と呼ばれるものである。内面および口縁端部はナデ調整、外面には指オサエの痕跡が残る。I類で、15世紀前期のものと考えられる。53・54は土師器皿で、外形はI類に類似するが、底部は平坦である。15世紀中期頃のものと思われる。56～64は土師器皿で、内面の底部と口縁部の屈曲部に沈線をもつものである。内面および口縁端部はナデ調整、外面には指オサエの痕跡が残る。K I・K II類で、18世紀前期のものと思われる。42は土師器皿で、丸みをもった浅目の器形である。L類で、17世紀のものと思われる。43～46は小形の土師器皿で、丸みをもった浅目の器形である。O類で、17世紀のものと思われる。

65は土師器鍋で、口縁部が「く」の字状に外側に屈曲する。内面はナデ調整である。近世初期を中心とする磁器のものと思われる。

66は信楽焼の擂鉢で、胎土に長石粒を含む。内面には、6本を単位とする櫛状工具で擂目を施す。17世紀のものと思われる。67は肥前磁器(伊万里)染付徳利で、胴部に網目文や花文とみられる文様を描く。17世紀後半期の製品である。



第21図 平成26年度出土遺物実測図1(土器・陶磁器)

②瓦類

平成26年度の調査では、瓦が多数出土した。特に、2トレンチと5トレンチに集中する。また、軒瓦が多く含まれる。それで、過去の調査で出土した軒瓦と整合性をもたせるため、軒瓦の型式名は『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書(宗教法人平等院 2003)』(以下、整備報告書とする。)に準ずることとする。

2 トレンチ(第22図～第24図)

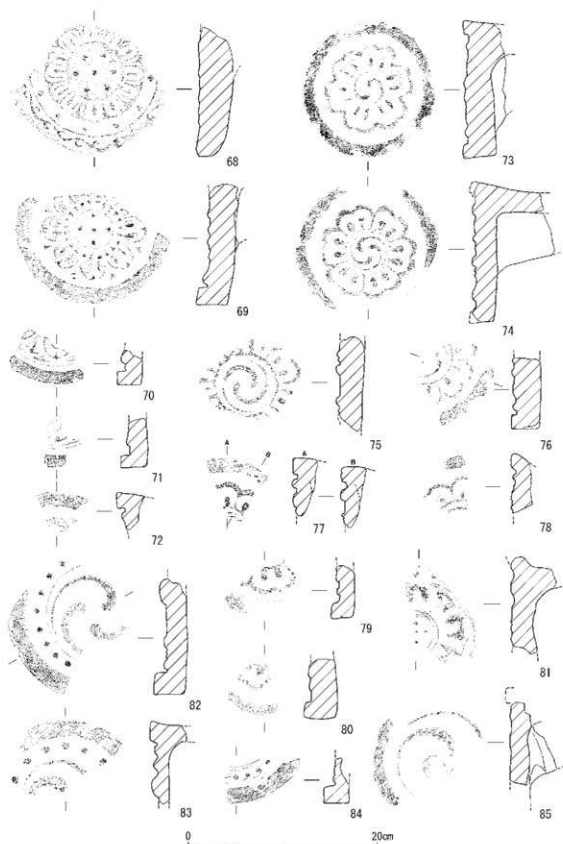
68は複弁蓮華文を内区主文とする軒丸瓦である。中房には1+6の蓮子を配する。蓮弁文の周囲には珠文と圏線が巡り、外周には唐草文が巡る。整備報告書のNM016系とみられるが、唐草文がやや萎縮気味である。平等院創建期の11世紀中葉頃の瓦と考えられるもので、南部系の瓦とみられる。69は複弁八葉蓮華文を主文とする軒丸瓦で、中房には1+4の蓮子を配する。中房の周囲には葉を表す。文様は扁平気味が角が立ち、シャープな印象を受ける。これまでの平等院周辺出土資料に類例は見当たらないが、11世紀頃の瓦とみられる。70は単弁蓮華文を主文とする軒丸瓦である。11世紀頃の瓦とみられる。71は単弁蓮華文を主文とする軒丸瓦で、NM004系とみられる。11世紀頃のものとみられる。72は蓮華文を主文とする軒丸瓦である。小片のため詳細は不明であるが、69と同文とも考えられる。

73は複弁六葉蓮華文を主文とする軒丸瓦で、中房は右巻きの二巴文である。子葉の周囲に圏線をもつ。NM033系のものとみられる。12世紀初頭の平等院改修期に使用されたと考えられる瓦で、河内向山系である。74は複弁六葉蓮華文を主文とする軒丸瓦で、中房は右巻きの三巴文である。NM037系のものとみられる。12世紀中葉頃のものとみられ、河内向山系である。75～80は、上記2点と同様、河内向山系の軒丸瓦である。75は複弁六葉蓮華文を主文とする軒丸瓦で、中房は左巻の二巴文である。子葉に圏線はなく、NM038系とみられる。76～80は中房が不明であり、形式は不明である。77は周縁部に「○」の刻印がある。整備報告書の刻印瓦形式のK01にあたる。78については、子葉の周囲に圏線があり、NM032・033系とみられる。76・77・79・80は、NM034～039系にあたるものとみられる。

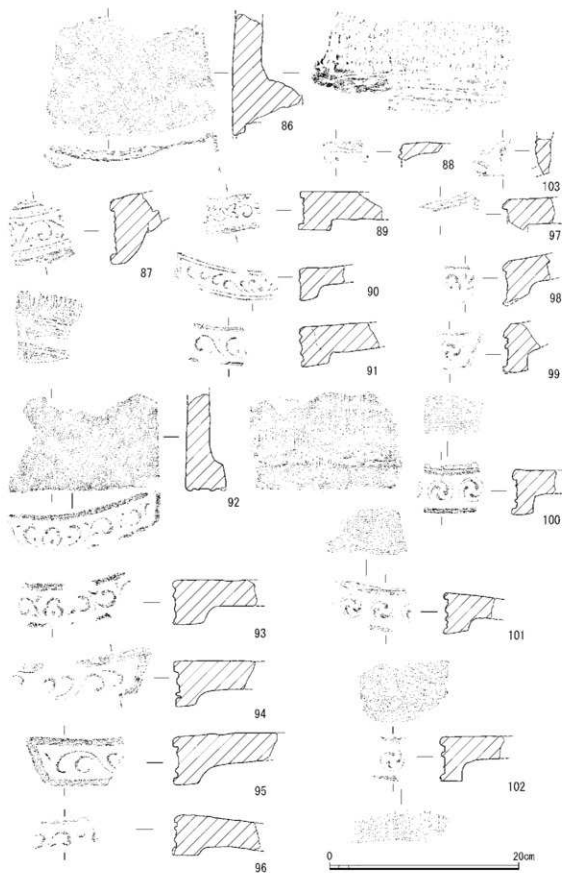
81は複弁八葉蓮華文を主文とする軒丸瓦で、中房には1+4の蓮子を配するものとみられる。これまでの平等院周辺出土資料に類例は見当たらないが、平安時代の瓦とみられる。

82は左巻三巴文を主文とする軒丸瓦で、周囲を珠文が巡る。整備報告書のNM102系のものとみられ、近世瓦である。83も同様の三巴文軒丸瓦で、珠文が82より大きく目であるが、同系の近世瓦とみられる。84は右巻三巴文軒丸瓦でとみられるが、小片であり詳細は不明である。珠文が82・83より小粒で、中世の瓦の可能性も考えられる。

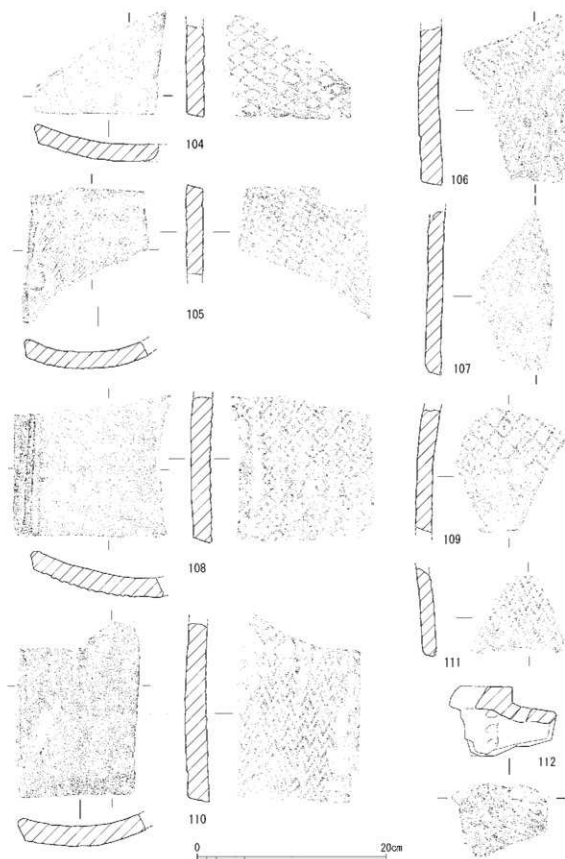
86は軒平瓦で、凹面に布目、凸面に縄タタキ痕が残る。顎部には粗いタタキ痕が残り、丹波篠王子瓦窯の製品とみられる。瓦当目は剥落しており、文様は不明である。藤原道長が建立した法成寺跡からも同様の技法の瓦が出土しており、11世紀前半頃の瓦とみられる。87は唐草文を主文とする軒平瓦で、周囲を圏線および細かい珠文が巡る。顎部に粗いタタキ痕が残り、丹波篠王子瓦窯の製品とみられる。86も同文である可能性も考えられる。整備報告書では、丹波系の軒瓦は



第22図 平成26年度出土遺物実測図2(軒丸瓦、2・3トレンチ)



第23図 平成26年度出土遺物実測図3(軒平瓦、1・2トレンチ)



第24図 平成26年度出土遺物実測図4(瓦、2トレンチ)

報告されていない。なお、法成寺跡と考えられている京都府立鴨沂高校出土と伝える同文の軒平瓦が、同高校に所蔵されている。

88は珠文と圏線が巡る軒平瓦で、主文は不明である。平安時代の瓦とみられる。89は宝相華唐草文を主文とする軒平瓦で、周囲に圏線が巡る。NH003系のもので、11世紀頃の瓦とみられる。やや小型の瓦である。

90～98は河内向山系の唐草文軒平瓦で、中房に巴文を持つ複弁六葉蓮華文軒丸瓦と対になるものとみられる。この系統の軒平瓦は多くの文様パターンがあり、拓本の比較ではどの形式に属するのかわかるのは困難である。92はNH058系に、95は唐草文の端部の形状からNH045系に属するものか。97は文様は不明であるが、胎土や整形の状況から河内向山系の瓦と考えられる。いずれも、12世紀初頭～中葉頃にかけての瓦とみられる。

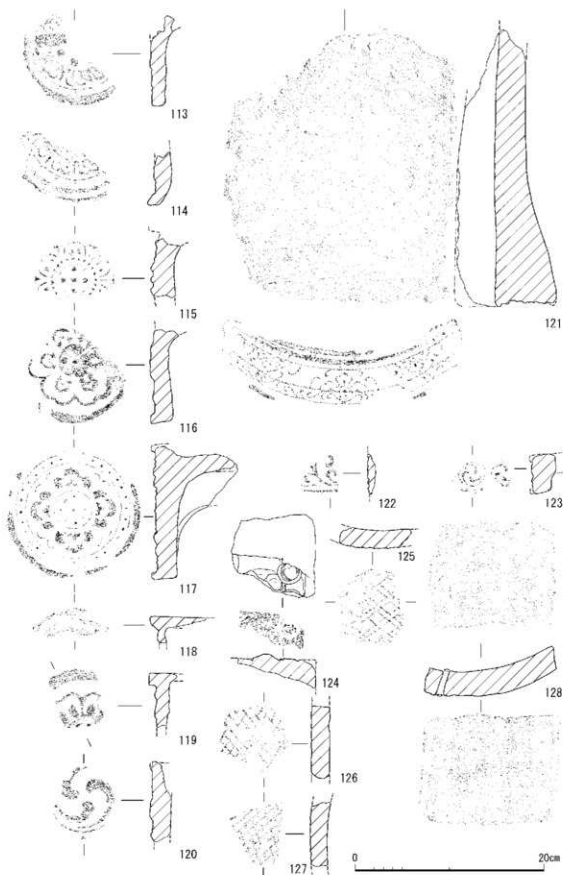
99～102は連続する左巻三巴文の軒平瓦である。全容がわかるものはない。巴文の周囲に圏線がないので、NH064もしくは065系とみられる。河内向山系の瓦と考えられる。整備報告書によると、12世紀初頭頃の三巴文軒丸瓦と対になるものとみられるが、今回の調査では、それに該当する軒丸瓦は出土していない。

104は凸面に菱形格子文タタキ痕をもつ平瓦で、凹面には糸切痕および布目痕が残る。105～107は凸面に細かい菱形格子文タタキ痕をもつ平瓦で、凹面には糸切痕・布目痕がみられる。108・109は凸面に菱形蛇の目格子文タタキ痕をもつ平瓦で、凹面に糸切痕・布目痕が残る。110・111は凸面に鋸歯文タタキ痕をもつ平瓦で、凹面に布目痕が残る。以上の平瓦は中世のものと考えられる。112は丸瓦の尾部で、釘穴をもち、内面には布目痕が残る。

5 トレンチ(第25図)

113は複弁八葉蓮華文軒丸瓦とみられ、中房に大粒の蓮子をもつ。瓦当面に帯状の范傷がある。蓮弁文の周囲に圏線・珠文が巡る。これまでの平等院周辺出土資料に類例は見当たらないが、11世紀頃の瓦とみられる。114も複弁八葉蓮華文軒丸瓦とみられる。113に近い文様構成とみられるが、詳細は不明である。115は複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。中房には1+4の蓮子をもち、中房の周囲に葉が巡る。文様およびその表現は26-2トレンチ出土の軒丸瓦69に類似しており、ほぼ11世紀頃の瓦とみられる。116は六葉蓮弁文軒丸瓦で、中房には1+4の蓮子をもつ。整備報告書に同文瓦は掲載されていないが、弁の形状が、巴文の中房をもつ複弁六葉蓮華文軒丸瓦に類似しており、それと同じ時期の瓦とも考えられる。なお、この瓦当の文様は、子葉の形状から、宝相華文とも考えられる。117は四葉宝相華文軒丸瓦で、中房には1+8の蓮子をもつ。宝相華文の周囲を、圏線・珠文・圏線が巡る。NM041系の瓦とみられる。11世紀頃のものとみられる。118は軒丸瓦で、文様等は不明であるが、胎土等から平安時代の瓦とみられる。119・120は中房に巴文をもつ河内向山系の軒丸瓦である。119は子葉に圏線をもたない。120は中房が右巻の三巴文である。12世紀の瓦とみられる。

121は半截花文を主文とする軒平瓦である。半截花文の周囲を圏線が巡り、その下方に均整唐草文が展開する。明瞭な頸部をもたない。凹面には布目痕が残る。整備報告書には同文瓦の記載



第25図 平成26年度出土遺物実測図5(瓦、5トレンチ)

がないが、ほかの半截花文軒平瓦の例からみて、11世紀頃の瓦と考えられる。122は唐草文軒平瓦である。瓦当の一部が剥がれたもので、型式は不明であるが、平安時代の瓦とみられる。123は連続する左卷三巴文の軒平瓦である。巴文の周囲に圈線がないので、NH064もしくは065系とみられる。河内向山系の瓦で、12世紀初頭頃の瓦と考えられる。

124は周縁部に竹管文を巡らした鬼瓦の一部と考えられる。時期は不明であるが、中世のもの可能性もある。

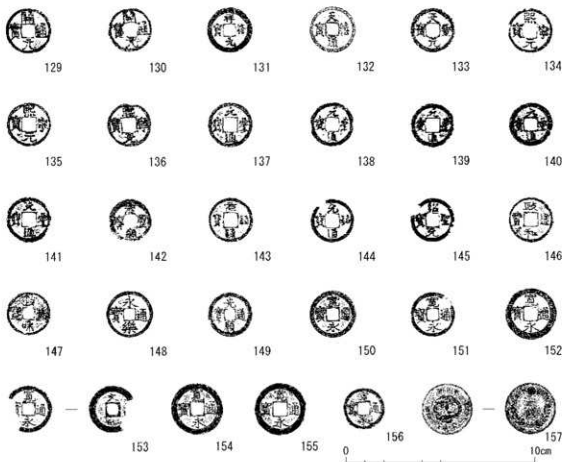
125は複線菱形格子文タタキ痕をもつ平瓦である。中世の瓦と考えられる。126・127は細かい菱形格子文タタキ痕をもつ平瓦で、127の格子文の線がやや太めである。中世の瓦とみられる。128は平瓦で、長方形の釘穴をもつ。凹面に布目痕、凸面に細い縄タタキ痕が残る。古代の瓦とみられる。

その他のトレンチ(第22図・第23図)

103は唐草文軒平瓦で、1トレンチから出土した。文様の詳細は不明であるが、NH209系の可能性があり、近世瓦とみられる。85は左卷三巴文軒丸瓦で、3トレンチから出土した。文様は扁平気味で、中世の瓦とみられる。

③銭貨(第26図)

129・130は唐銭の開元通寶で、初鑄は621年である。129は1トレンチから、130は2トレンチ



第26図 平成26年度出土土遺物実測図6(銭貨)

から出土した。

131は北宋銭の祥符元寶で、1008年初鑄である。2トレンチから出土した。132は北宋銭の天禧通寶で、1017年初鑄である。2トレンチから出土した。133は北宋銭の天聖元寶で、1023年初鑄である。2トレンチから出土した。134～136は北宋銭の熙寧元寶で、1068年初鑄である。2トレンチから出土した。137～142は北宋銭の元豐通寶で、1078年初鑄である。137～141は行書体で、142は篆書体である。139が1トレンチ出土で、その他は2トレンチから出土した。143・144は北宋銭の元祐通寶で、1086年初鑄である。143は篆書体、144は行書体である。2トレンチから出土した。145は北宋銭の紹聖元寶で、1094年初鑄である。2トレンチから出土した。146・147は北宋銭の政和通寶で、1111年初鑄である。146は楷書体、147は篆書体である。146は1トレンチから、147は2トレンチから出土した。

148は明銭の永樂通寶で、1408年初鑄である。2トレンチから出土した。149はヴェトナムの光順通寶で、1460年初鑄である。2トレンチから出土した。

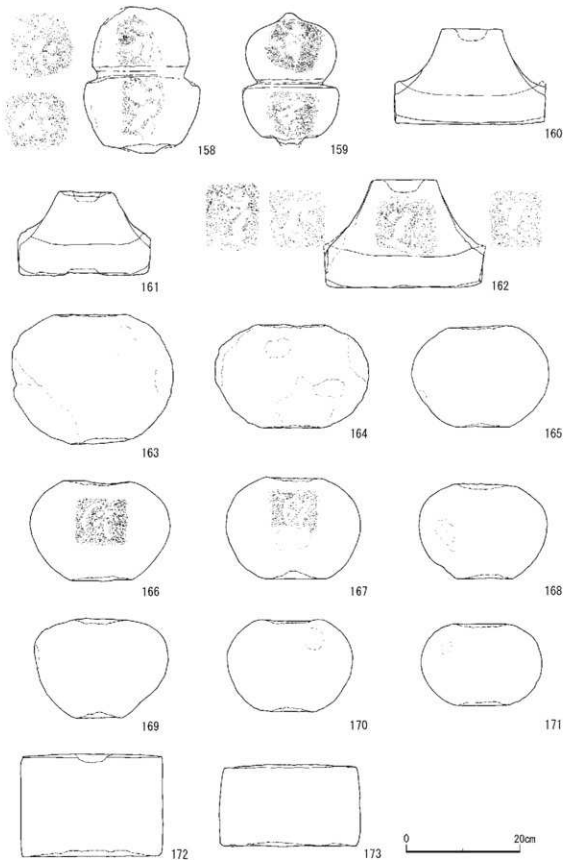
150・151は寛永通寶で、1636年初鑄の、いわゆる古寛永である。150は1トレンチから、151は2トレンチから出土した。151は背面に「文」の字を鑄出した寛永通寶で、文銭とも呼ばれる。1688年初鑄の、いわゆる新寛永である。2トレンチから出土した。152～154は背面に青海波文を鑄出した寛永通寶で、四文銭である。1768初鑄の、新寛永である。5トレンチの堤状遺構 S X01から出土した。156は寛永通寶で、1697年初鑄の新寛永である。2トレンチから出土した。157は明治20(1887)年発行の一銭銅貨である。5トレンチの堤状遺構 S X01から出土した。

④石造物(第27図)

出土した石造物は、全て五輪塔の部材である。5トレンチ南半部にあたる上流側の砂層中から出土した。

158は風空輪で、花崗岩製である。4面に梵字が刻まれていたとみられるが、2面は剥落しており残存していない。図示した面には、空輪に「アン」、風輪に「バン」の、西方菩提門の梵字が刻まれているものとみられる。その向かって左側面には、空輪に「アク」、風輪に「バク」の、北方涅槃門の梵字が刻まれている。剥落が著しいが、比較的大振りの風空輪であり、古様を示す。14世紀に遡る可能性もある。159は風空輪で、花崗岩製である。残存状況は比較的良好で、1面に梵字を刻む。空輪には「ケン」、風輪には「ウン」の梵字が刻まれる。胎藏大日真言の一部とみられる。158に比べて、やや小振りである。15世紀頃のもののか。

160は火輪で、暗緑色を帯びた堅緻な火成岩とみられる石材で作られており、稜部が明瞭に残存する。梵字は刻まれておらず、上部に風空輪を受けるホゾ穴がある。軒反りは上面が端部でやや高めに反り上がるが、下面は緩やかに反る。15世紀頃のもののか。161は火輪で、花崗岩製である。梵字は刻まれていない。上部に風空輪を受けるホゾ穴があり、下部にも水輪を受けるホゾ穴をもつ。軒反りは上面が端部で高めに反り上がり、下面はほぼ水平で端部で反り上がる。160より小振りであり、軒部も新しい様相を示す。16世紀頃のもののか。162は火輪で、花崗岩製である。四面に梵字を刻む。図示した面には「ラ」の東方発心門の梵字を刻む。向かって左側の面には「ラ



第27図 平成26年度出土遺物実測図7(石造物)

一」の南方修行門の梵字を刻む。向かって右側の面には「ラク」の北方涅槃門の梵字を刻む。背面には「ラン」の西方菩提門の梵字を刻む。法量は160とほぼ同様であるが、梵字の有無と石材に違いがある。15世紀頃のものか。

163・164は水輪で、花崗岩製である。表面が剥落しているが、梵字は刻まれていないものとみられる。上面・下面ともホゾはなく、平坦に仕上げる。163は扁平気味の球形、164は最大胴径を上半部にもつ扁平な壺形を呈する。15世紀頃のものか。165～171は水輪で、暗緑色を帯びた堅緻な火成岩とみられる石材で作られている。上面・下面ともホゾはなく、中央を浅く窪ませている。166・167は「ピ」の梵字が刻まれている。胎藏大日真言の一字とみられる。形体的には、壺形のものと同扁平な球形のものがある。比較的大振りのものが古いものとみられ、相対的に15～16世紀頃のものと考えられる。

172は地輪で、花崗岩製である。上面はわずかに盛り上がり気味で、中央にホゾ穴を穿つ。梵字は刻まれていない。15世紀頃のものか。173は地輪で、暗緑色を帯びた堅緻な火成岩とみられる石材で作られている。上面にはホゾ穴がなく、梵字も刻まれていない。16世紀頃のものか。

(引原茂治)

5. まとめ

1) 平等院釣殿について

藤原道長は宇治に別業を所有していたが、万寿4(1027)年の道長の死後、子の藤原頼道に伝領された。頼通は、永承7(1052)年にこの別業を寺に改めて、平等院と号した。その後、康和3(1101)年以降に藤原忠実によって平等院の大規模な改修が行われたと考えられている。

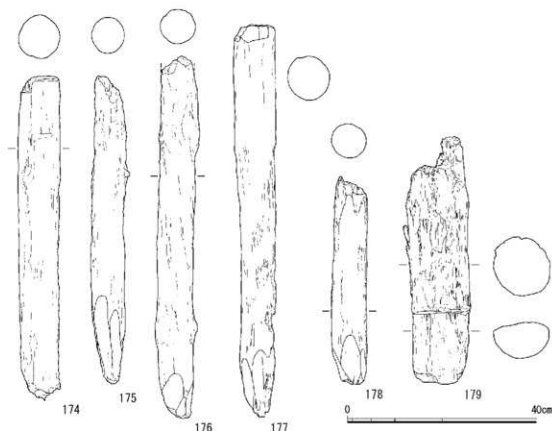
平安時代には平等院本堂が現観音堂の位置にあったとされる。文献により、本堂から宇治川に向かって翼廊が延び、その先端に宇治川に張り出して釣殿があったと想定されている。『宇治旧記』によると、釣殿は中世後期まで残存しており、元亀・天正の頃に焼失したと伝える。

平成26年度2トレンチは観音堂の東側の位置に設定した。釣殿の想定地付近にあたる。トレンチ付近では、昭和48(1973)年の災害復旧工事中に大面取をした角柱が1本見つかり、釣殿の柱と考えられた。このトレンチの調査では、釣殿に関連する遺構の検出を主たる目的とした。調査の結果、このトレンチからは、釣殿に関連する遺構は確認できなかった。また、昭和48年に確認された釣殿の柱と考えられる木材についても残存していなかった。しかし、平等院に関係すると考えられる瓦類が、あまり摩滅を受けていない状態で多数出土した。中世の土師器皿等も出土している。

2) 検出遺構について

今回の3年度にわたる調査地は、宇治川の中州である塔の島および橋島で宇治川本流から隔てられた分流の塔の川の川底にあたる。調査では、24年度2・3トレンチの杭列や26年度5トレンチの堤状遺構S X01などの遺構を検出した。

堤状遺構S X01は、川底に多数の杭を打ち、その杭の間に礫を投入して構築されたものと考え



第28図 平成26年度出土杭実測図

られる。平成24年度に検出した杭列もそのような構築物の名残とも考えられる。礫を除去した後の状況からみれば、土砂を盛り上げてその表面に礫を敷いたとは考えにくく、杭と礫による構築物と考えるのが妥当とみられる。礫の下層に見られる砂を主とするわずかな盛り上がりは、杭と礫によって水流が堰き止められることにより堆積したものと考えられる。

堤状遺構 S X01 の性格は特定できないが、塔の川の西岸近くにあることから、水流を制御する防災施設として造られた可能性がある。『宇治市史』によると、平等院から宇治橋にかけては宇治川の増水で水害が頻発したため、江戸時代に堤が設けられたとされる。安永5(1776)年の史料では、堤は「前々よりの仕来り」とあり、それ以前から堤が造られていたと考えられる。また、平等院から宇治橋にかけては、宇治浜・平等院浜と呼ばれ、近世末・明治初頭には舟問屋や舟宿があった。堤状遺構 S X01 は、宇治川の急な水の流れから船着場や川岸を護るために水流を弱める施設として造られたとも考えられる。また、船溜り状の施設とも考えられる。

また、堤状遺構 S X01 は井川の堰であるという考えもある。井川は、宇治市街地南西側の小倉地区へ給水する農耕用の用水路である。井川存在は、江戸時代前期までさかのぼることが可能と言われる。現在の井川に給水する井川揚水機場は26年度5トレンチの北西側に位置している。堤状遺構 S X01 は下流側の北端部で西岸側に屈曲しており、揚水機場設置以前の給水施設の可能性も考えられる。

附載したとおり、堤状遺構 S X01 の杭の放射性炭素による年代測定では、15世紀から近代まで

の杭が残存していることが判明している。また、この遺構からは、中世の瓦や明治20年発行の一銭銅貨も出土している。堤状遺構が中世から近代にかけて築かれ続けてきたことを物語るものであろう。宇治川と周辺に暮らした人々との係りを示す遺構であり、かつての宇治川河畔の景観を復元する手掛かりとなる遺構と言えよう。

3) 出土遺物について

調査地は、宇治川分流の塔の川の川底である。宇治川は急流として知られ、また、河川改修も行われている。洪水などにより、また工事により、多くの遺物が流下し失われたものと考えられる。そのような状況の中で川底に残存したのが、今回の出土遺物と言える。

26-2トレンチからは平等院に関係すると思われる瓦類が多数出土した。特に、12世紀前半期の藤原忠実による改修時に使用されたと考えられる瓦が多い。軒丸瓦では、中房が巴文となる河内向山系の瓦がそれにあたる。軒平瓦では、河内向山系の唐草文軒平瓦や連続する左巻三巴文の軒平瓦がそれにあたる。軒丸瓦では出土点数17点のうち8点で約47%、軒平瓦では出土点数17点のうち13点で約76%と、いずれも多数を占める。これは、藤原忠実によって行われた改修事業の規模の大きさを示すものと考えられる。また、その改修により、平等院が最も栄えた時期を迎えたことをも示すと考えられる。

このトレンチから出土した瓦は、これまでの平等院の修理等で不要になった瓦を付近に投棄したものとみることでもきよう。また、上記のとおり、出土した瓦には水流によって磨滅した痕跡がなく、遠隔地から流下したものとみられない。付近に何らかの平等院関係の建物があった可能性も否定できないと考えられる。

平成24・25年度に出土した近世後期以降の陶磁器からは、この地が行業客等でにぎわった様子が見えてくる。景勝の地として多くの人々を迎えたことを示す遺物といえる。

(引原茂治)

参考文献

- 宇治市編『宇治市歴史的風致維持向上計画』宇治市 2012
- 宇治市教育委員会編『五ヶ庄二子塚古墳発掘調査報告』宇治市文化財調査報告3 宇治市教育委員会 1992
- 宇治市教育委員会編『平等院旧境内遺跡発掘調査概報-主要地方道天津南郷宇治線新設改良に伴う発掘調査-』宇治市埋蔵文化財発掘調査概報 第22集 宇治市教育委員会 1993
- 宇治市教育委員会編『白川金色院跡発掘調査報告書』宇治市文化財調査報告6 宇治市教育委員会 2003
- 宇治市教育委員会編『宇治川太閤堤跡発掘調査報告書』宇治市埋蔵文化財発掘調査報告書 第73集 宇治市教育委員会 2014
- 加藤雅士「平等院旧境内遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第120号公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2013
- 川勝政太郎『梵字講話』河原書店 1980
- 宗教法人平等院編『平等院境内遺跡発掘調査報告書』宗教法人 平等院 2000

宗教学人平等院編『史跡及び名勝平等院庭園保存整備報告書』宗教学人 平等院 2003

林屋辰三郎ほか編『宇治市史1』古代の歴史と景観 宇治市 1973

林屋辰三郎ほか編『宇治市史2』中世の歴史と景観 宇治市 1974

林屋辰三郎ほか編『宇治市史3』中世の歴史と景観 宇治市 1976

林屋辰三郎ほか編『宇治市史4』近代の歴史と景観 宇治市 1978

林屋辰三郎ほか編『宇治市史5』東部の生活と環境 宇治市 1979

増田孝彦「平等院旧境内遺跡 史跡・名勝平等院庭園」(『京都府埋蔵文化財情報』公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)第124号2014

昭和48(1973)年2月23日付けの『洛南タイムズ』第6048号

付表1 出土土器観察表

押印番号	トレンチ	器種	器形	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	整形調整	備考
1	24-3	青花磁器	碗	9.6	(4.15)	-	密	堅緻	-	輪轆整形	
2	24-3	青花磁器	碗	(9.5)	4.25	-	密	堅緻	-	輪轆整形	
3	24-3	青花磁器	碗	(12.0)	(3.65)	-	密	堅緻	-	輪轆整形	
4	24-3	青花磁器	皿	(12.8)	2.95	-	密	堅緻	-	輪轆整形	
5	24-3	陶器(漆)	擦鉢	(35.3)	(5.2)	-	粗	堅緻	-	輪轆整形	
6	24-3	陶器(漆)	擦鉢	-	(4.3)	(15.6)	粗	堅緻	-	輪轆整形	
7	24-3	陶器(京)	鉢	-	(3.1)	5.5	密	堅緻	-	輪轆整形	
8	24-3	染付磁器(京)	碗	(10.8)	4.9	-	密	堅緻	-	輪轆整形	「六兵衛」銘
9	24-3	陶器(京)	鉢	(11.4)	4.7	-	密	堅緻	-	輪轆整形	
10	24-3	瓦質土器	五徳	(10.6)	(4.3)	-	密	良好	灰白7.5Y8/1	ナデ	
13	表採	須恵器	擦鉢	(17.8)	(9.6)	-	密	良好	灰白7.5Y7/1	内外面ナデ	
14	25-4	須恵器	杯蓋	-	(1.45)	-	密	良好	灰N6/0	内面ナデ・外面ヘラ切	
15	表採	白磁	碗	(9.8)	(1.8)	-	密	堅緻	-	輪轆整形	
16	表採	白磁	杯	(7.7)	(3.0)	-	密	堅緻	-	輪轆整形	
17	25-9	陶器(伊奈)	鉢	(27.4)	(5.3)	-	粗	堅緻	-	輪轆整形	
18	25-9	陶器(伊奈)	擦鉢	(23.4)	(5.8)	-	粗	堅緻	-	輪轆整形	
19	25-1	瓦質土器	火舎	(27.2)	(5.4)	-	粗	やや軟	濁灰5YR4/1	外面ナデ	
20	25-11	染付磁器(肥前)	皿	(47.0)	6.3	(27.0)	密	堅緻	-	輪轆整形	ハリ支え
21	25-9	染付磁器	鉢	(13.9)	4.9	6.2	密	堅緻	-	輪轆整形	「花山精製」銘
30	26-2	土師器	皿	(17.0)	3.5	-	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	内面ナデ・外面指オサエ	
31	26-2	土師器	皿	(15.7)	3.3	-	密	良好	灰白10YR8/2	内面ナデ・外面指オサエ	
32	26-2	土師器	皿	(15.5)	2.6	-	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	内面ナデ・外面指オサエ	
33	26-2	土師器	皿	(13.6)	(2.7)	-	密	良好	にぶい黄橙 7.5YR7/4	内面ナデ・外面指オサエ	
34	26-2	土師器	皿	(12.0)	3.2	-	密	良好	灰白10YR8/2	内面ナデ・外面指オサエ	
35	26-2	土師器	皿	(13.6)	2.7	-	密	良好	にぶい黄橙 7.5YR7/4	内面ナデ・外面指オサエ	
36	26-2	土師器	皿	(14.1)	2.6	-	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/2	内面ナデ・外面指オサエ	
37	26-2	土師器	皿	(12.4)	(2.6)	-	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	内面ナデ・外面指オサエ	
38	26-2	土師器	皿	(13.6)	2.7	-	密	良好	にぶい黄橙 7.5YR7/4	内面ナデ・外面指オサエ	
39	26-2	土師器	皿	(9.4)	1.9	-	密	良好	にぶい黄橙 7.5YR8/4	内面ナデ・外面指オサエ	
40	26-2	土師器	皿	(11.0)	1.8	-	密	良好	灰白2.5Y8/1	内面ナデ・外面指オサエ	
41	26-2	土師器	皿	(9.9)	1.5	-	密	良好	にぶい黄橙 7.5YR7/4	内面ナデ・外面指オサエ	
42	26-2	土師器	皿	8.6	1.85	-	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/2	内面ナデ・外面指オサエ	
43	26-2	土師器	皿	5.6	1.2	-	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	内面ナデ・外面指オサエ	
44	26-2	土師器	皿	(5.0)	1.05	-	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	内面ナデ・外面指オサエ	
45	26-2	土師器	皿	4.8	0.9	-	密	良好	にぶい黄橙 7.5YR7/4	内面ナデ・外面指オサエ	
46	26-2	土師器	皿	5.8	1.0	-	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	内面ナデ・外面指オサエ	
47	26-2	土師器	皿	7.8	1.9	-	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	内面ナデ・外面指オサエ	ヘソ皿
48	26-2	土師器	皿	7.6	1.9	-	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/3	内面ナデ・外面指オサエ	ヘソ皿
49	26-2	土師器	皿	7.2	1.8	-	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/3	内面ナデ・外面指オサエ	ヘソ皿
50	26-2	土師器	皿	7.0	1.6	-	密	良好	にぶい黄橙 7.5YR7/4	内面ナデ・外面指オサエ	ヘソ皿
51	26-2	土師器	皿	7.5	1.8	-	密	良好	浅黄橙 7.5YR8/4	内面ナデ・外面指オサエ	ヘソ皿
52	26-2	土師器	皿	6.6	1.7	-	密	良好	灰白2.5Y8/2	内面ナデ・外面指オサエ	ヘソ皿
53	26-2	土師器	皿	(7.8)	1.75	-	密	良好	灰白2.5Y8/2	内面ナデ・外面指オサエ	

神国 番号	トレンチ	器種	器形	口径	器高	底径	胎土	境成	色調	整形調整	備考
54	36-2	土師器	皿	(8.0)	1.9	-	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	内面ナデ・外面指オサエ	
55	36-2	土師器	皿	9.3	2.0	-	密	良好	明灰輪 7.5YR2/3	内面ナデ・外面指オサエ	
56	36-2	土師器	皿	(10.8)	1.8	-	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/4	内面ナデ・外面指オサエ	
57	36-2	土師器	皿	10.2	1.8	-	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	内面ナデ・外面指オサエ	
58	36-2	土師器	皿	10.0	1.95	-	密	良好	灰白 2.5Y8/2	内面ナデ・外面指オサエ	
59	36-2	土師器	皿	(10.2)	1.85	-	密	良好	灰白 2.5Y8/1	内面ナデ・外面指オサエ	
60	36-2	土師器	皿	10.2	1.8	-	密	良好	浅黄橙 10YR8/3	内面ナデ・外面指オサエ	
61	36-2	土師器	皿	10.0	1.8	-	密	良好	灰白 2.5Y8/1	内面ナデ・外面指オサエ	
62	36-2	土師器	皿	(9.6)	1.7	-	密	良好	橙 7.5YR7/6	内面ナデ・外面指オサエ	
63	36-2	土師器	皿	10.0	1.65	-	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	内面ナデ・外面指オサエ	
64	36-2	土師器	皿	10.0	1.8	-	密	良好	にぶい橙 7.5YR7/3	内面ナデ・外面指オサエ	
65	36-2	土師器	罎	(28.0)	(8.0)	-	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ナデ	
66	36-5	陶器(信楽)	摺鉢	(37.2)	13.7	(15.2)	粗	堅緻	-	輪軸整形	
67	36-2	染付磁器(肥前)	徳利	-	(16.6)	6.4	密	堅緻	-	輪軸整形	

※()数字は復元径・残存高

付表2 出土石造物観察表

神国 番号	トレンチ	出土地点	名称	部位	幅(径)	高さ	契字	石材	備考
158	36-5	南側砂層	五輪塔	風空輪	(25.8)	20.5	(四面)	花崗岩	下部にホゾ
159	36-5	南側砂層	五輪塔	風空輪	23.2	17.0	一面	花崗岩	下部にホゾ
160	36-5	南側砂層	五輪塔	火輪	26.5	17.0	-	不明	上面にホゾ穴
161	36-5	南側砂層	五輪塔	火輪	23.4	15.0	-	花崗岩	上面・下面にホゾ穴
162	36-5	南側砂層	五輪塔	火輪	27.8	19.0	四面	花崗岩	上面にホゾ穴
163	36-5	南側砂層	五輪塔	水輪	28.5	29.9	-	花崗岩	
164	36-5	南側砂層	五輪塔	水輪	27.1	18.3	-	花崗岩	
165	36-5	南側砂層	五輪塔	水輪	24.2	17.0	-	不明	
166	36-5	南側砂層	五輪塔	水輪	24.7	16.2	一面	不明	
167	36-5	南側砂層	五輪塔	水輪	23.6	18.0	一面	不明	
168	36-5	南側砂層	五輪塔	水輪	22.6	16.8	-	不明	
169	36-5	南側砂層	五輪塔	水輪	23.9	17.6	-	不明	
170	36-5	南側砂層	五輪塔	水輪	22.2	16.2	-	不明	
171	36-5	南側砂層	五輪塔	水輪	21.3	14.4	-	不明	
172	36-5	南側砂層	五輪塔	地輪	25.0	18.0	-	花崗岩	上面にホゾ穴
173	36-5	南側砂層	五輪塔	地輪	24.8	14.3	-	花崗岩	

付表3 出土瓦観察表

神国 番号	トレンチ	瓦種	瓦出面径・高	厚さ	備考
11	24-2	平瓦	-	1.9	凸面縄タタキ
12	24-2	平瓦	-	1.6	凸面縄タタキ
22	25-1	平瓦	-	3.9	凸面縄タタキ
23	25-1	平瓦	-	2.1	凸面縄タタキ
24	25-1	平瓦	-	2.1	凸面に細かい縄タタキ
25	25-1	平瓦	-	2.3	凸面に細かい縄タタキ
26	25-11	丸瓦	-	2.3	凸面に細かい縄タタキ
27	25-11	丸瓦	-	1.5	
28	25-11	平瓦	-	1.8	凸面に菱形絞の目格子タタキ
29	25-1	平瓦	-	2.4	凸面縄タタキ
68	36-2	軒丸瓦	17.1	3.6	NM016系、南郡系
69	36-2	軒丸瓦	16.2	3.3	
70	36-2	軒丸瓦	-	2.6	
71	36-2	軒丸瓦	-	2.9	NM004系
72	36-2	軒丸瓦	-	3.2	69と同文か
73	36-2	軒丸瓦	14.6	3.5	NM030系、河内向山系
74	36-2	軒丸瓦	15.0	2.5	NM037系、河内向山系
75	36-2	軒丸瓦	-	2.9	NM038系、河内向山系
76	36-2	軒丸瓦	-	3.1	NM034～039系、河内向山系

77	26-2	軒丸瓦	-	26	N M 034 ~ 039 系、河内向山系、刷印 K1
78	26-2	軒丸瓦	-	27	N M 032・033 系、河内向山系
79	26-2	軒丸瓦	-	25	N M 034 ~ 039 系、河内向山系
80	26-2	軒丸瓦	-	35	N M 034 ~ 039 系、河内向山系
81	26-2	軒丸瓦	-	25	
82	26-2	軒丸瓦	-	29	N M 102 系
83	26-2	軒丸瓦	-	12	N M 102 系
84	26-2	軒丸瓦	-	27	中世か
85	26-3	軒丸瓦	-	25	中世
86	26-2	軒平瓦	(7.5)	28	丹波藤王子瓦葺葺
87	26-2	軒平瓦	6.8	40	丹波藤王子瓦葺葺
88	26-2	軒平瓦	-	-	
89	26-2	軒平瓦	3.8	29	N H 003 系
90	26-2	軒平瓦	3.8	1.85	河内向山系
91	26-2	軒平瓦	4.4	3.0	河内向山系
92	26-2	軒平瓦	4.3	2.5	N H 008 系、河内向山系
93	26-2	軒平瓦	4.7	2.8	河内向山系
94	26-2	軒平瓦	4.7	3.0	河内向山系
95	26-2	軒平瓦	5.2	3.2	N H 045 系、河内向山系
96	26-2	軒平瓦	4.4	3.0	河内向山系
97	26-2	軒平瓦	-	2.65	河内向山系
98	26-2	軒平瓦	4.2	2.7	河内向山系
99	26-2	軒平瓦	4.2	2.5	N H 064・065 系、河内向山系
100	26-2	軒平瓦	5.0	2.5	N H 064・065 系、河内向山系
101	26-2	軒平瓦	5.0	2.2	N H 064・065 系、河内向山系
102	26-2	軒平瓦	4.8	2.5	N H 064・065 系、河内向山系
103	26-1	軒平瓦	-	-	N H 209 系か
104	26-2	平瓦	-	1.8	凸面に菱形格子タタキ
105	26-2	平瓦	-	1.7	凸面に細かい菱形格子文タタキ
106	26-2	平瓦	-	2.2	凸面に細かい菱形格子文タタキ
107	26-2	平瓦	-	1.65	凸面に細かい菱形格子文タタキ
108	26-2	平瓦	-	2.0	凸面に菱形蛇の目格子文タタキ
109	26-2	平瓦	-	1.6	凸面に菱形蛇の目格子文タタキ
110	26-2	平瓦	-	2.2	凸面に鋸歯文タタキ
111	26-2	平瓦	-	1.5	凸面に鋸歯文タタキ
112	26-2	丸瓦	-	2.7	釘穴
113	26-5	軒丸瓦	-	2.6	
114	26-5	軒丸瓦	-	1.9	
115	26-5	軒丸瓦	-	2.5	
116	26-5	軒丸瓦	-	1.8	
117	26-5	軒丸瓦	14.2	2.5	N M 041 系
118	26-5	軒丸瓦	-	-	
119	26-5	軒丸瓦	-	2.9	河内向山系
120	26-5	軒丸瓦	-	2.2	河内向山系
121	26-5	軒平瓦	6.5	3.2	瓦当幅 25.5cm
122	26-5	軒平瓦	-	-	
123	26-5	軒平瓦	4.5	2.3	N H 064・065 系、河内向山系
124	26-5	鬼瓦	-	(3.2)	中世か
125	26-5	平瓦	-	1.5	凸面に複線菱形格子文タタキ
126	26-5	平瓦	-	2.0	凸面に細かい菱形格子文タタキ
127	26-5	平瓦	-	1.7	凸面に細かい菱形格子文タタキ
128	26-5	平瓦	-	2.8	凸面に縄タタキ、釘穴

付編 自然科学的方法による分析結果

1. 放射性炭素年代測定(平成25年度調査)

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・小林克也

1. はじめに

京都府宇治市に位置する平等院旧境内遺跡で出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。

2. 試料と方法

試料は、7トレンチで出土した木杭1(針葉樹:PLD-27126)と、10トレンチで出土した木杭2(針葉樹:PLD-27127)、1トレンチで出土した木杭3(針葉樹:PLD-27128)の3点である。いずれの試料も最終形成年輪が残っていた。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS:NEC製1.5SDH)を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行った暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期5730 \pm 40年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.1(較正曲線データ: IntCal13)を使用した。なお、1 σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に2 σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は14C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表1 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-27126 遺物 No. 木杭1	23.28 \pm 0.18	144 \pm 17	145 \pm 15	1680AD(11.7%)1694AD 1727AD(27.0%)1764AD 1801AD(9.3%)1813AD 1854AD(1.3%)1857AD 1863AD(1.0%)1866AD 1918AD(17.4%)1939AD	1669AD(15.5%)1700AD 1729AD(32.1%)1780AD 1797AD(11.5%)1819AD 1832AD(17.4%)1880AD 1915AD(19.0%)1945AD
PLD-27127 遺物 No. 木杭2	-25.37 \pm 0.17	307 \pm 17	305 \pm 15	1523AD(64.3%)1572AD 1630AD(13.9%)1643AD	1515AD(72.4%)1597AD 1617AD(23.0%)1647AD
PLD-27128 遺物 No. 木杭3	-27.84 \pm 0.19	425 \pm 17	425 \pm 15	1440AD(68.2%)1460AD	1435AD(95.4%)1477AD

4. 考察

7トレンチで出土した木杭1(PLD-27126)は、2 σ 暦年代範囲(確率95.4%)において1669-1700 cal AD(15.5%)、1720-1780 cal AD(32.1%)、1797-1819 cal AD(11.5%)、1832-1880 cal AD(17.4%)、1915-1945 cal AD(19.0%)で、17世紀後半~20世紀中頃の年代を示した。

10トレンチで出土した木杭2(PLD-27126)は、2 σ 暦年代範囲において1515-1597 cal AD(72.4%)および1617-1647 cal AD(23.0%)で、16世紀前半~17世紀中頃の年代を示した。

1トレンチで出土した木杭3(PLD-27128)は、2 σ 暦年代範囲において1435-1477 cal AD(95.4%)で、15世紀の年代を示した。

今回の測定試料はいずれも最終形成年輪が残っており、測定結果は木材の枯死・伐採年代を示している。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20. 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafldason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.

2. 放射性炭素年代測定(平成26年度調査)

パレオ・ラボAMS年代測定グループ

伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林紘一

Zaur Lomtadize・小林克也

1. はじめに

京都府宇治市に所在する平等院旧境内遺跡より出土した試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料について樹種同定も行われている(樹種同定の項参照)。

2. 試料と方法

試料は、2 Trでコンクリート除去中に出土した生材の杭1点(PLD-30075)と、5 TrのSX01から出土した生材の杭5点(試料No.④: PLD-30076、試料No.⑤: PLD-30077、試料No.⑨: PLD-30078、試料No.⑯: PLD-30079、試料No.⑰: PLD-30080)の、計6点である。いずれの試料も最終形成年輪が残っていた。また樹種同定の結果、2 Trの杭、SX01の試料No.⑨、⑯、⑰はいずれもマツ属複雑管束亜属で、SX01の試料No.④と⑤はいずれもヒノキであった。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ、コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-30075	位置: 2 Tr 層位: コンクリート除去中	種類: 生材(マツ属複雑管束亜属) 試料の性状: 最終形成年輪 器種: 杭 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30076	位置: 5 Tr 遺構: SX01 試料 No. ④	種類: 生材(ヒノキ) 試料の性状: 最終形成年輪 器種: 杭 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30077	位置: 5 Tr 遺構: SX01 試料 No. ⑤	種類: 生材(ヒノキ) 試料の性状: 最終形成年輪 器種: 杭 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30078	位置: 5 Tr 遺構: SX01 試料 No. ⑨	種類: 生材(マツ属複雑管束亜属) 試料の性状: 最終形成年輪 器種: 杭 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30079	位置: 5 Tr 遺構: SX01 試料 No. ⑯	種類: 生材(マツ属複雑管束亜属) 試料の性状: 最終形成年輪 器種: 杭 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30080	位置: 5 Tr 遺構: SX01 試料 No. ⑰	種類: 生材(マツ属複雑管束亜属) 試料の性状: 最終形成年輪 器種: 杭 状態: wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)

3. 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、それぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代(yrBP)の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.2を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年較正に較正した年代範囲	
				1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
PLD - 30075 2TR	-30.85 \pm 0.17	156 \pm 17	155 \pm 15	1677 - 1687 cal AD (8.1%)	1667 - 1695 cal AD (15.8%)
				1731 - 1777 cal AD (39.2%)	1726 - 1783 cal AD (45.4%)
				1799 - 1808 cal AD (8.1%)	1796 - 1814 cal AD (11.4%)
				1927 - 1941 cal AD (12.8%)	1857 - 1843 cal AD (1.0%) 1852 - 1858 cal AD (1.2%) 1917 - 1949 cal AD (19.2%)
PLD - 30076 5TR SX01 試料 No. ④	-25.27 \pm 0.21	118 \pm 19	120 \pm 20	1690 - 1706 cal AD (10.9%)	1682 - 1736 cal AD (27.9%)
				1719 - 1728 cal AD (6.3%)	1805 - 1894 cal AD (54.4%)
				1810 - 1820 cal AD (6.4%)	1905 - 1935 cal AD (13.2%)
				1833 - 1882 cal AD (37.1%)	
PLD - 30077 5TR SX01 試料 No. ⑤	-24.04 \pm 0.15	113 \pm 17	115 \pm 15	1914 - 1926 cal AD (7.5%)	
				1603 - 1707 cal AD (10.6%)	1685 - 1732 cal AD (27.2%)
				1719 - 1727 cal AD (6.0%)	1807 - 1894 cal AD (56.8%)
				1813 - 1826 cal AD (9.2%)	1906 - 1928 cal AD (11.4%)
PLD - 30078 5TR SX01 試料 No. ⑥	-27.51 \pm 0.21	505 \pm 18	505 \pm 20	1833 - 1885 cal AD (40.2%)	
				1913 - 1916 cal AD (2.2%)	
				1416 - 1432 cal AD (68.2%)	1408 - 1439 cal AD (95.4%)
PLD - 30079 5TR SX01 試料 No. ⑦	-28.94 \pm 0.16	327 \pm 17	325 \pm 15	1515 - 1529 cal AD (10.3%)	1491 - 1603 cal AD (76.8%)
				1543 - 1597 cal AD (44.0%)	1614 - 1640 cal AD (18.6%)
				1618 - 1634 cal AD (13.9%)	
PLD - 30080 5TR SX01 試料 No. ⑧	-31.15 \pm 0.20	312 \pm 18	310 \pm 20	1522 - 1575 cal AD (31.0%)	1497 - 1506 cal AD (1.9%)
				1585 - 1590 cal AD (3.2%)	1512 - 1601 cal AD (72.2%)
				1625 - 1642 cal AD (14.0%)	1616 - 1645 cal AD (21.3%)

4. 考察

以下、 2σ 暦年代範囲(確率95.4%)に着目して結果を整理する。

2Trの杭(PLD-30075)は1667-1695 cal AD (15.8%)、1726-1783 cal AD (45.4%)、1796-

1814 cal AD (11.4%)、1837-1843 cal AD (1.0%)、1852-1868 cal AD (2.6%)、1917-1949 cal AD (19.2%)で、17世紀後半～20世紀中頃の暦年代を示した。これは、江戸時代前期～末期または大正時代～昭和時代に相当する。

5TrのSX01から出土した試料5点の暦年代は、いくつかの時期に分かれた。試料No.⑨(PLD-30078)は1408-1439 cal AD (95.4%)で、15世紀初頭～前半の暦年代を示した。これは、室町時代に相当する。

試料No.⑩(PLD-30079)は1491-1603 cal AD (76.8%)および1614-1640 cal AD (18.6%)、試料No.⑪(PLD-30080)は1497-1506 cal AD (1.9%)、1512-1601 cal AD (72.2%)、1616-1645 cal AD (21.3%)で、15世紀末～17世紀中頃の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

試料No.⑫(PLD-30076)は1682-1736 cal AD (27.9%)、1805-1894 cal AD (54.4%)、1905-1935 cal AD (13.2%)、試料No.⑬(PLD-30077)は1685-1732 cal AD (27.2%)、1807-1894 cal AD (56.8%)、1906-1928 cal AD (11.4%)で、17世紀後半～18世紀前半または19世紀前半～20世紀前半の暦年代を示した。これは、江戸時代前期～昭和時代に相当する。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫(2000)放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」: 3-20。日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Halldason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M. and van der Plicht, J.(2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 55(4), 1869-1887.

3. 平等院旧境内遺跡出土木製品の樹種同定(平成26年度調査)

小林克也(パレオ・ラボ)

1. はじめに

平等院旧境内遺跡から出土した木製品の樹種同定を行った。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている(放射性炭素年代測定の項参照)。

2. 試料と方法

試料は、2Trのコンクリート除去中に出土した生材の杭? 1点(試料No.1)と、5Trの河川跡であるSX01から出土した杭5本(試料No.2~6)の、計6本である。放射性炭素年代測定の結果、試料No.4は室町時代、試料No.5と6は室町時代~江戸時代前期、試料No.2と3は江戸時代前期~昭和時代、試料No.1は江戸時代前期~末期または大正時代~昭和時代の暦年代を示した。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行った。

生材の樹種同定では、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柃目)について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラルで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

3. 結果

同定の結果、針葉樹であるマ

表1 平等院旧境内遺跡出土木製品の樹種同定結果

試料の時期	室町時代		室町時代~江戸時代前期		江戸時代前期~昭和時代		合計
	樹種	器種	杭	杭	杭	杭?	
マツ属複維管束亜属			1	2		1	4
複維管束亜属が4点で、ヒノキ					2		2
合計			1	2	2	1	6

キが2点であった。いずれの

試料も木取りは芯持丸木であった。

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に光学顕微鏡写真を示す。

(1) マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxyylon* マツ科 図版 1 1a-1c (No.4)、2a-2c (No.6)

仮道管と放射仮道管、放射組織、垂直および水平樹脂道で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列のものと、水平樹脂道を含む多列のものがみられる。分野壁孔は窓状で、放射仮道管の水平壁は内側に向かって鋸歯状に肥厚する。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育する。どちらも材質は重硬だが、切削等の加工は容易である。

(2) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl. ヒノキ科 図版1 3a-3c(No.3)
 仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部はやや薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は同性で、高さ2~11列となる。分野壁孔はトウヒ〜ヒノキ型で、1分野に2個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

4. 考察

室町時代および室町時代〜江戸時代前期の杭は、いずれもマツ属複雑管束亜属であった。マツ属複雑管束亜属は木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良く耐水性にも優れる樹種である(伊東ほか, 2011)。試料は河川の護岸に用いられた杭材であり、真っ直ぐで耐水性の良いマツ属複雑管束亜属が利用されたと考えられる。

江戸時代前期〜昭和時代の杭はヒノキであった。また、2 Trから出土した江戸時代または大正時代〜昭和時代の杭はマツ属複雑管束亜属であった。ヒノキもマツ属複雑管束亜属と同様に、木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良い樹種である(伊東ほか, 2011)。真っ直ぐなヒノキやマツ属複雑管束亜属が杭材として利用されたと考えられる。

限られた試料数ではあるが、室町時代および室町時代〜江戸時代前期の杭と江戸時代前期〜昭和時代の杭は、樹種が異なっていた。材料に周辺植生を利用していたとすると、杭材の樹種の違いは周辺植生の変化による可能性がある。また、時期によって樹種の選択性に違いがあった可能性なども考えられる。

参考文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)日本有用樹木誌, 238p, 海青社。

付表1 平等院旧境内遺跡出土木製品の樹種同定結果一覧

試料 No.	トレンチ	遺物 No.	遺構名	器種	樹種	木取り	年代測定番号
1	2 Tr	-	コンクリート除去中	杭?	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木	PLD-30075
2	5 Tr	㊸	SX01	杭	ヒノキ	芯持丸木	PLD-30076
3	5 Tr	㊹	SX01	杭	ヒノキ	芯持丸木	PLD-30077
4	5 Tr	㊺	SX01	杭	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木	PLD-30078
5	5 Tr	㊻	SX01	杭	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木	PLD-30079
6	5 Tr	㊼	SX01	杭	マツ属複雑管束亜属	芯持丸木	PLD-30080

3.平成26年度一般国道163号精華拡幅事業 関係遺跡発掘調査報告

1.はじめに

本報告は、平成26年度一般国道163号精華拡幅事業に伴い、国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所の依頼を受けて実施した発掘調査の成果を取ったものである。

乾谷遺跡では弥生時代の石包丁などが発見されている遺跡であり、その西方に所在するのが、乾谷大崩遺跡である。

現地調査を進めるに当たっては、京都府教育委員会、精華町教育委員会はじめ各関係機関のご指導・ご協力を得た。さらに、土層堆積については、当調査研究センター増田富士雄理事の指導を受けた。また、地元自治会や近隣住民の方々には、発掘調査へのご理解とご協力をいただいた。記して感謝します。

なお、調査に係る経費は、全額国土交通省近畿地方整備局京都国道事務所が負担した。

(福山博章・村田和弘)

〔調査体制等〕

平成26年度調査

現地調査責任者	調査課長	石井清司
現地調査担当者	調査課調査第1係長	中川和哉
	同 主任	村田和弘
	同 調査員	福山博章

調査場所 相楽郡精華町乾谷

現地調査機関 平成26年10月23日～平成27年3月6日

調査面積 乾谷遺跡：1,703㎡、乾谷大崩遺跡：347㎡

総面積：2,050㎡

平成27年度整理作業

整理報告責任者	調査課長	有井宏幸
整理報告担当者	調査課調査第2係長	中川和哉
	同 調査員	福山博章

2.遺跡の位置と歴史的環境

1)地理的環境

調査地が所在する京都府相楽郡精華町は京都府の南西端に位置し、北辺は京田辺市、東辺は木津川市、南辺は県境を越えて奈良市、西は生駒市に隣接する。

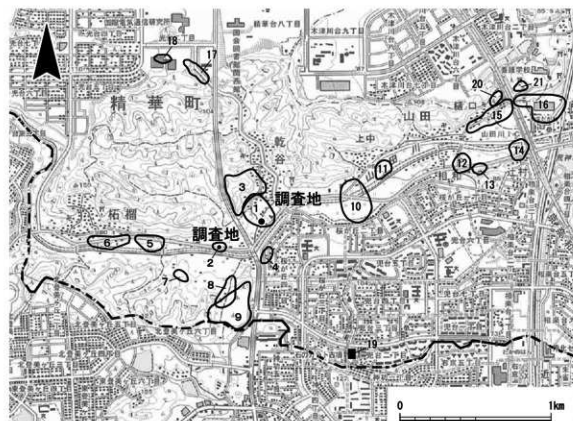
調査地は相楽郡精華町の南西端の奈良県境近辺に所在する。調査地の北側には京阪奈良陵、南側には奈良山丘陵が位置する。2つの丘陵の間には西から東に向かって山田川が流れ、木津川に注いでゆく。山田川は、奈良県生駒市・京都府相楽郡精華町・木津川市を流れる淀川水系の一級河川であり、川に沿って国道163号線(清滝街道)が東西に通る。調査地は山田川によって開析された谷底平野に所在し、山田川の流れに沿って東西方向に河岸段丘が発達している。

2) 歴史的環境

調査地周辺には山田川に沿って耳所遺跡(4)、石原遺跡(5)、柘榴川原遺跡(6)、金堀遺跡(10)などの遺物散布地が数多く所在する(第1図)。しかし、多くの遺跡が未調査であるため詳細は不明である。

精華町内の縄文時代の遺跡としては、精華町北東部に所在する椋ノ木遺跡で縄文時代晩期の土器が出土している。

弥生時代では、精華町北部の丘陵上に所在する畑ノ前遺跡で弥生時代中期の竪穴建物が検出されており、集落の存在が確認されている。また、乾谷遺跡では石包丁が採集されており、周辺に



第1図 乾谷遺跡・乾谷大崩遺跡調査位置図

- | | | | | | |
|-------------|-----------|-------------------|------------------|----------|-----------|
| 1. 乾谷遺跡 | 2. 乾谷大崩遺跡 | 3. 乾谷城山城跡 | 4. 耳所遺跡 | 5. 石原遺跡 | 6. 柘榴川原遺跡 |
| 7. 得所瓦窯跡 | 8. 乾谷窯跡群 | 9. 大平遺跡 | 10. 金堀遺跡 | 11. 平林遺跡 | 12. 相和遺跡 |
| 13. 下条遺跡 | 14. 中島遺跡 | 15. 上川原遺跡(旧樋ノ口遺跡) | 16. 樋ノ口遺跡(旧城西遺跡) | 17. 金前遺跡 | 18. 西出合遺跡 |
| 19. 石のカラト古墳 | 20. 心蓮寺跡 | 21. 新殿神社遺跡 | | | |

集落の存在が想定されている。

古墳時代では精華町北部の鞍岡山古墳群で前期から中期の4基の円墳が確認されており、後期には横穴式石室を埋葬施設に持つ畑ノ前古墳群が築かれる。

奈良時代には石のカラト古墳が築造される。石のカラト古墳は上円下方墳で墳丘には葺石が敷かれていた。埋葬施設は凝灰岩製の横口式石槨であり、漆塗りの棺が納められ、金製・銀製の玉類などの副葬品が出土した。

山田川右岸の河岸段丘上には、平城宮などへ供給した瓦を製作した乾谷窯跡群や得所窯跡群が所在する。乾谷窯跡群は4基の瓦窯の存在が確認されている。そのうちの発掘された乾谷1号窯跡は半地下式、無階段の登窯であり、燃焼室と焼成室の壁体は日乾煉瓦を平積みにしてアーチ状に構築している。出土した瓦は丸瓦・平瓦のみであった。得所窯跡群では1基の瓦窯があり、平窯であることが確認されている。軒平瓦が採集されており、平城宮6710Cと同范である。朱雀大路、羅城門、西隆寺等に顕著に見られる軒平瓦で、平城宮Ⅲ期、天平17～天平勝宝年間(740～757)年に位置づけられている。

現在の近鉄山田川駅西側には樋ノ口遺跡がある。奈良時代の掘立柱建物跡や築垣跡が検出されており、離宮もしくは寺院跡である可能性が提示されている。

また、精華町南部は古代から中世までは大和国添下郡に属していたとされる。13世紀後半ないし14世紀初頭に作成された『京北班田図』によると、添下郡京北二条から四条の五里・六里の6か里が現在の山田川流域の柘榴、乾谷周辺に該当し、相楽川という記載がみられる。国境が変化した理由は不明であるが、山城国に属した荘園である朝日庄の勢力が山田川上流域にまで及んだ結果であるという解釈が提示されている。

室町時代の南北朝動乱や応仁・文明の乱では南山城地域が主戦場となり、各地の土豪たちが城を築いて防備を固めていた。このようななかで、大北城、稲屋妻城、乾谷山城跡が築かれるが、城郭構造などの詳細は不明である。

(福山博章)

3. 調査経過

調査は、道路拡幅工事の予定地内に所在する乾谷遺跡と乾谷大崩遺跡の2遺跡において調査区を設定して実施した。調査トレンチは、乾谷遺跡内に4か所で設定し、面積1,703㎡を調査した。乾谷大崩遺跡内では2か所に設定し、面積347㎡を調査した。総面積は、2,050㎡である。

乾谷遺跡では、国道163号の北に南部の西側を1トレンチ、東部を2トレンチとして設定し調査を実施した。また、1・2トレンチの北側、道路を挟んだ対象地の2か所の水田に2か所設定し、西側を3トレンチ、東側を4トレンチとした(第2図)。調査は、現地表面から遺構検出面直上までを重機による掘削を行い、以後、人力による掘削作業を行った。検出した遺構は、江戸時代初期の遺物が出土する水田面と室町時代後半の遺物を含む堆積層などを検出した。また、山田川の氾濫による洪水砂の堆積層が確認できた。

乾谷大崩遺跡では、国道163号線と国道168号線の交差点より西へ約150mの地点で、2か所の調査トレンチを設定して調査を実施した。東側を1トレンチ、西側を2トレンチとした(第12図)。検出した遺構は、複数の水田面や中世後半期と思われる溝などを検出した。遺物では土師器皿などの遺物が出土した。

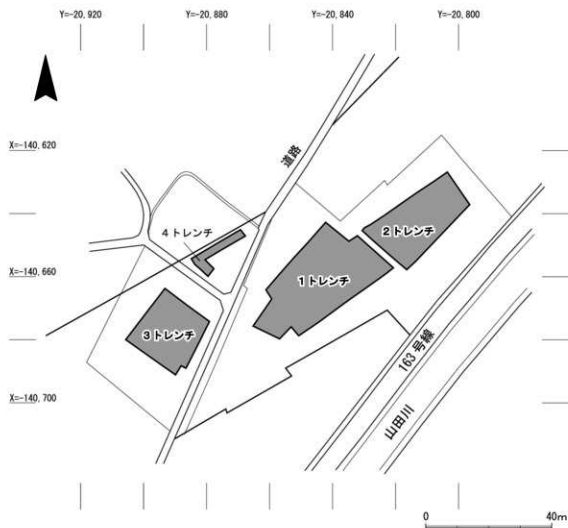
調査成果がおおむね明らかになった平成27年2月19日に地元住民の方々に対して発掘現場見学会を行い、54名の参加を得た。また、平成27年3月19日に空中写真撮影を実施した。

乾谷遺跡の水田土壌の花粉分析・植物珪酸体分析をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託し実施した(付編)。

なお、調査における遺構番号は、各遺跡の各トレンチに通し番号で遺構番号を付与した。出土した遺物は、整理箱にして7箱出土した。

(村田和弘)

4. 調査の概要



第2図 乾谷遺跡調査トレンチ配置図

(1) 乾谷遺跡

1 基本層序

4か所に設定した調査トレンチのうち、1・2トレンチと3・4トレンチでは堆積状況が異なっていた(第2図)。工事範囲内の国道163号の北に近接して設定した1トレンチは畑地、2トレンチについては、店舗跡地であり解体後に盛土され、整地されていた。現地表面の標高は約58mを測り、盛土は厚さ約0.8~1mあり、標高約57mで遺構検出面を確認した。2トレンチでは店舗解体時に攪乱を受けていた。

1・2トレンチの基本的な層序としては、現代の耕作土・床土があり、遺構検出面までには数層の細砂がラミナ状に堆積した層がある(第4図5~9、12~18層)。この砂の堆積は、山田川の氾濫による洪水砂であることを確認した。堆積構造の観察から砂層は徐々に堆積したものではなく、水際の深い水中に多量の砂が流れ込み堆積したことがわかった。確認した遺構面は、近世の水田面(第4図23層)であり、その上層は洪水砂によって水田面が覆われていることが確認できた。1トレンチでは室町時代の遺物を含む堆積層を確認した。下層では、標高53.9mまで掘削したが、粘土質と砂層の互層で堆積していた。2トレンチでは、3面の水田面と思われる層を確認した。

3・4トレンチは、1・2トレンチの北側の道路を挟んだ水田地に設定した。周辺の地形は、北側の丘陵の先端部にあたり、3トレンチの標高が59.2m、4トレンチが58.6mを測る。

層序は、耕作土・床土があり、床土直下で近世の耕作溝を検出した。3トレンチの下層調査では、標高55.4mまで掘削したが、遺構は検出できず、洪水による堆積と思われる数層の細かい砂層が堆積していた。

2 検出遺構

① 1トレンチ

現地表面の標高は西側で57.8m、東側で58.1mを測る。調査面積は798㎡である。

耕作土・床土の直下の洪水による砂の堆積層の下、標高約57mで、第1遺構面として江戸時代初期と思われる遺物が出土する畦畔によって区画された水田を7面確認した(第3~5図)。平面での調査や土層観察などによって、水田面は西から東に向けて段差をつけ下がっていることが確認できた。

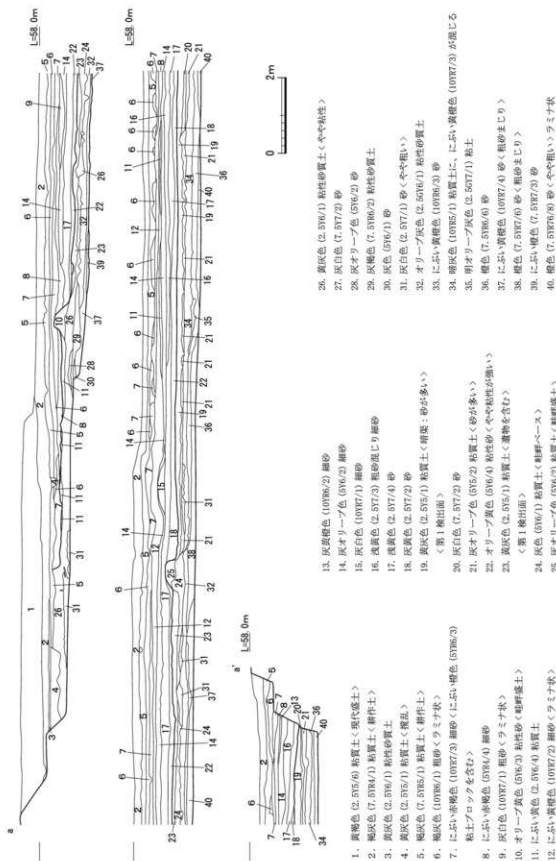
水田面では、少量の遺物片が出土し、人などの足痕を確認した。水田の床土を除去すると、約0.5mの深度で砂の堆積層を確認した。

水田1では、土師器の皿や椀などの陶磁器片や木製の下駄が1点出土した(第6図)。水田4・5・6では、少量の遺物片が出土し、水田3~7で人や動物の偶蹄目と思われる足痕を確認した。

水田面の下層(第5図15層)では、室町時代後半の遺物を含む耕作土と思われる堆積層を確認した。さらに下層の確認調査を行ったが、遺物・遺構は確認できなかった。

② 2トレンチ

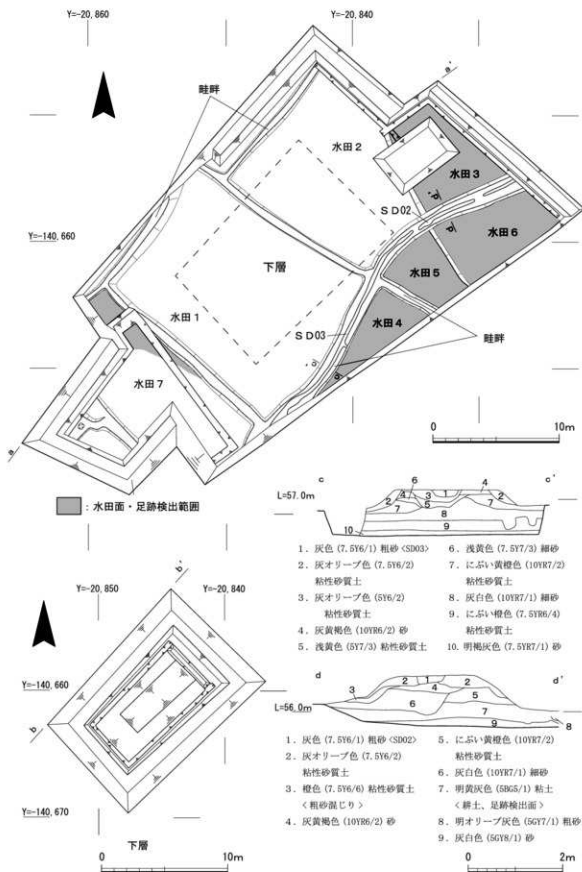
1トレンチの東側に設定したトレンチである(第7・8図)。現地表面の標高は58mを測る。調



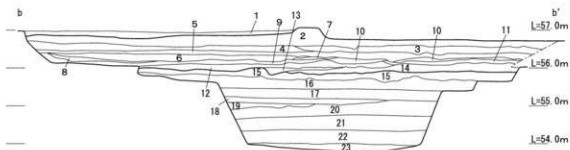
第3図 総合遺跡1トレンチ北壁土層断面図

1. 黄褐色 (2.5N5/6) 粘質土<現代盛土>
2. 黒灰色 (7.5B4/1) 粘質土<耕作土>
3. 黒灰色 (2.5B6/1) 粘性砂質土
4. 黒灰色 (2.5N5/1) 粘質土<埋藏土>
5. 黒灰色 (7.5B5/1) 粘質土<耕作土>
6. 黒灰色 (10B6/1) 粗砂<ラミナ状>
7. にぶい赤褐色 (10B7/2) 細砂<にぶい褐色 (5B6/2) 粘土ブロックを含む>
8. にぶい赤褐色 (5B4/4) 細砂
9. 灰白色 (10B7/1) 粗砂<ラミナ状>
10. オリーブ黄色 (5B6/3) 粘性砂<埋藏土>
11. にぶい黄土 (2.5B6/4) 粘質土
12. にぶい黄褐色 (10B7/2) 細砂<ラミナ状>

13. 灰黄褐色 (10B6/2) 細砂
14. オリーブ色 (5B6/2) 細砂
15. 灰白色 (10B7/1) 細砂
16. 浅黄色 (2.5B7/3) 粗砂混じり細砂
17. 浅黄色 (2.5B7/4) 砂
18. 灰黄色 (2.5B7/2) 砂
19. 黄灰色 (2.5B5/1) 粘質土<崩壊；砂が多い>
<第1検出層>
20. 灰白色 (7.5B7/2) 砂
21. オリーブ色 (5B5/2) 粘質土<砂が多い>
22. オリーブ黄色 (5B6/4) 粘性砂<粘性が強い>
23. 黄灰色 (2.5B5/1) 粘質土<遺物を含む>
<第1検出層>
24. 灰色 (5B6/1) 粘質土<埋藏土>
25. オリーブ色 (5B6/2) 粘質土<埋藏土>
26. 黄灰色 (2.5B6/1) 粘性砂質土<やや粘性>
27. 灰白色 (7.5B7/2) 砂
28. オリーブ色 (5B6/2) 砂
29. 灰褐色 (7.5B6/2) 粘性砂質土
30. 灰色 (5B6/1) 砂
31. 灰白色 (2.5B7/1) 砂<やや粗い>
32. オリーブ灰色 (2.5B6/1) 粘性砂質土
33. にぶい黄褐色 (10B6/3) 砂
34. 暗灰色 (10B5/1) 粘質土に、にぶい黄褐色 (10B7/3) が混じる
35. 明オリーブ灰色 (2.5B7/1) 粘土
36. 褐色 (7.5B6/6) 砂
37. にぶい黄褐色 (10B7/4) 砂<粗砂まじり>
38. 褐色 (7.5B7/6) 砂<粗砂まじり>
39. にぶい褐色 (7.5B7/3) 砂
40. 褐色 (7.5B7/6/8) 砂<やや粗い>ラミナ状



第 4 図 乾谷遺跡 1 トレンチ平面図・畦畔断面図

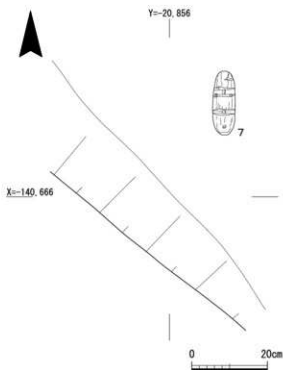


下層北壁土層断面

- | | |
|-------------------------------|----------------------------------|
| 1. 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土<遺物を含む> | 13. 灰色 (5Y6/1) 粘質土 |
| 2. 灰色 (5Y6/1) 粘質土<水田底部> | 14. オリーブ灰色 (5GY5/1) 砂 |
| 3. 橙色 (7.5YR7/6) 砂<粗砂混じり> | 15. オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 砂質土<遺物を含む> |
| 4. 橙色 (7.5YR6/8) 砂<やや粗い、ラミナ状> | 16. オリーブ灰色 (5GY8/1) 粘性砂質土 |
| 5. 灰白色 (10YR7/1) 砂<ラミナ状> | 17. 明緑灰色 (7.5GY6/1) 砂<やや粘性> |
| 6. 灰白色 (2.5Y7/1) 砂<ラミナ状> | 18. オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘性粗砂 |
| 7. 浅黄色 (2.5Y7/4) 細砂 | 19. 灰白色 (7.5Y7/2) 粗砂 |
| 8. 灰白色 (5Y7/2) 細砂 | 20. オリーブ灰色 (10Y6/2) 砂<細砂混じり> |
| 9. 灰色 (10Y6/1) 細砂 | 21. 明緑灰色 (10GY6/1) 粗砂<やや粘性> |
| 10. 浅黄色 (5Y7/3) 細砂 | 22. 明緑灰色 (7.5GY6/1) 細砂 |
| 11. 灰色 (7.5Y6/1) 細砂 | 23. 灰白色 (7.5Y7/2) 砂<やや黄色> |
| 12. 濃い黄褐色 (10YR7/3) 砂 | |



第5図 乾谷遺跡1トレンチ下層北壁土層断面図



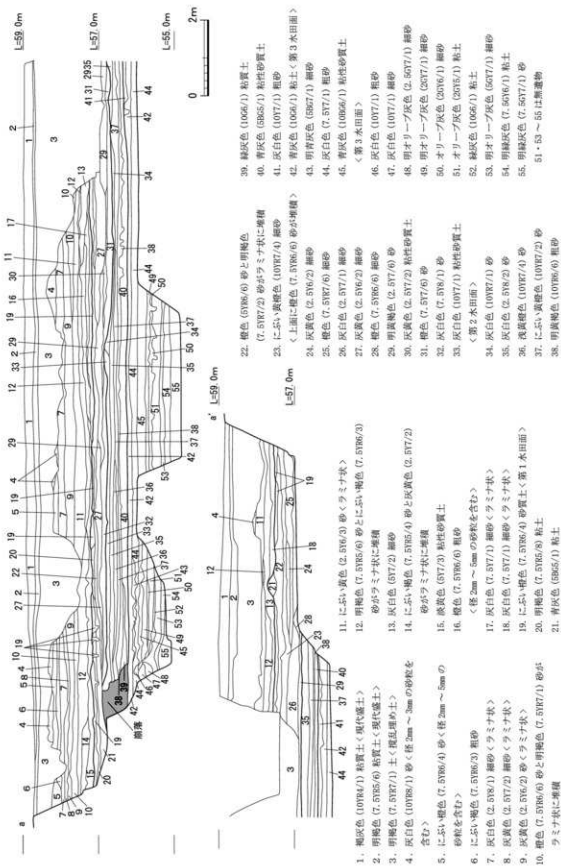
第6図 乾谷遺跡1トレンチ水田1遺物出土状況図

③3トレンチ

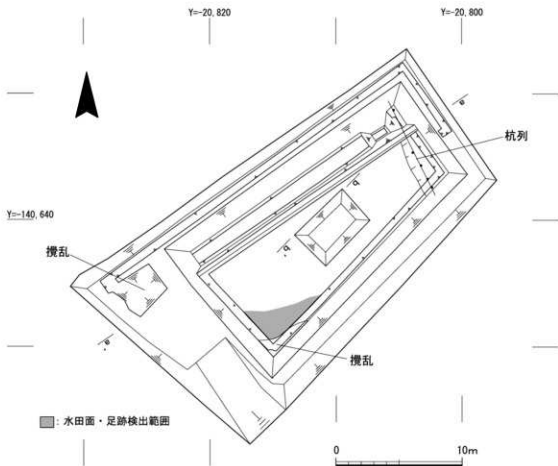
1トレンチの北西側に設定した。調査地は1・2トレンチよりは北側の丘陵に近く、現地表の標高は59.2mを測る。調査面積は、393㎡である。表土および耕作土を除去すると、現代の攪乱

断面積は447㎡である。現代の盛土の下層で、1トレンチと同様に約0.8mの山田川の洪水による砂層を確認した。トレンチ東端で南北方向の杭列を検出した。畦畔は確認できなかったが、水田の耕作土(第8図19層)があり、土師器皿などの遺物が出土した。さらに、下層調査では、粘土層と砂質土層の互層を確認し、2面の水田耕作土と思われる層を確認した(第8図33、45層)。

杭列 トレンチの東端部で木製杭がならぶ遺構を検出した。杭は5本残存していた。杭列の方位は北に25度西に傾いている。杭の西側には溝状の遺構があり、溝の掘形と考えられる。幅は不明であるが、検出した最大幅は2.7m、深さ0.2mを測る。遺物は出土しなかった。



第7図 乾谷遺跡2トレンチ南壁土層断面図



第8図 乾谷遺跡2トレンチ平面図

と東西方向と南北方向の近世耕作溝を検出した(第9・10図)。耕作溝は幅約0.1~0.5m、深さ約0.03~0.05cm程度であった。

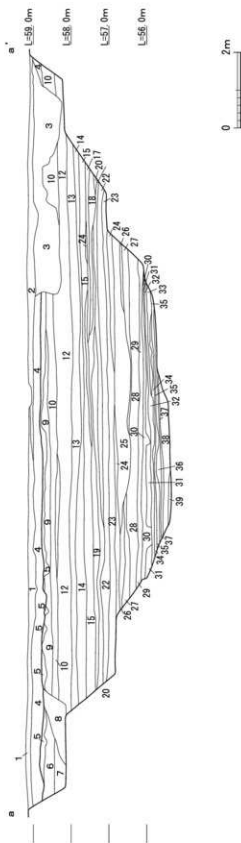
このトレンチでは、1・2トレンチとは様相が異なり水田面は検出できず、標高約55mまで掘削したが、比較的粗い砂層が厚く堆積する状況であった。1・2トレンチで確認した洪水による細かい砂の堆積とは異なった堆積状況であった。4トレンチを含むこの周辺は、北側の丘陵の先端部に位置しており、1・2トレンチで確認した洪水による砂層より古い時期の堆積層である可能性が考えられる。

④4トレンチ

3トレンチの東側に設定した。現地表面の標高は約58.6mである。調査面積は65㎡である。

耕作土・床土を除去すると3トレンチ同様に近現代の攪乱と南北方向と東西方向近世の耕作溝を検出した(第11図)。その下層については3トレンチ同様に粗い砂の堆積層であった。下層での遺構・遺物は検出できなかった。

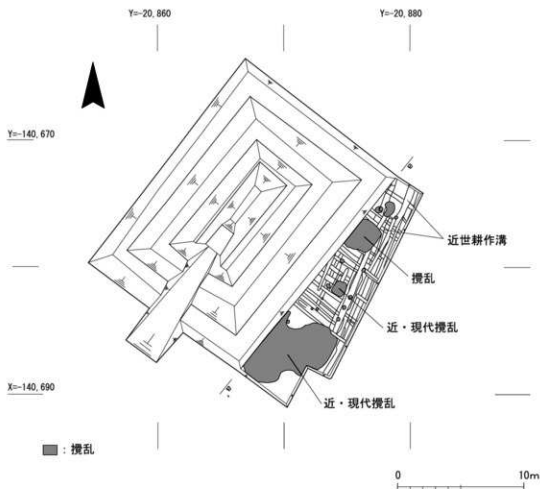
(村田和弘)



附壁土層断面

1. 明黄褐色 (10YR6/6) 砂質土<現代盛土>
 2. 灰色 (10Y4/1) 砂質土<耕作土>
 3. 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) 粘質土<積込土>
 4. オリーブ灰色 (10Y3/1) 粘質土<耕作土>
 5. にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘性砂質土
 6. にぶい黄褐色 (10YR6/3) 泥砂
 7. 灰黄褐色 (10YR6/2) 粗砂
 8. オリーブ灰色 (7.5Y3/1) 粘質土
 9. にぶい黄褐色 (10YR7/2) 粘砂<粗砂混じり>ラミナ状
 10. 黄褐色 (2.5Y7/3) 粘砂<粗砂混じり>ラミナ状
 11. 浅灰色 (2.5Y7/2) 粘砂<3~5mmの小石を多く含む>
 12. 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘砂 ラミナ状
 13. 灰白色 (5Y7/2) 粗砂<3~5mmの小石を多く含む>
 14. オリーブ黄色 (5Y6/4) 粘性砂質土
 15. 黄褐色 (5Y7/3) 砂質土 ラミナ状
 16. 黄褐色 (5Y7/3) 砂質土
 17. 黄褐色 (5Y7/3) 粘砂
 18. 灰白色 (5Y7/2) 粘砂
 19. 黄褐色 (7.5Y7/3) 粘砂
 20. 灰オリーブ色 (7.5Y7/2) 粗砂
 21. 灰白色 (7.5Y7/2) 粘砂<粗砂混じり>
 22. 灰白色 (10Y7/2) 粘砂
 23. 黄褐色 (5Y7/4) 粘砂
 24. オリーブ黄色 (5Y6/3) 粘砂
 25. 灰白色 (5Y7/1) 粗砂<3~5mmの小石を多く含む>
 26. 黄褐色 (7.5Y7/3) 粘砂
 27. 灰白色 (7.5Y7/2) 粘砂
 28. 浅灰色 (5Y7/4) 粘砂
 29. 黄色 (5Y7/6) 粘性砂質土
 30. 灰白色 (5Y7/2) 粗砂
 31. 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘砂
 32. 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘砂
 33. 黄褐色 (2.5Y6/1) 粗砂
 34. 黄褐色 (7.5Y7/3) 砂
 35. 浅黄色 (2.5Y7/3) 砂
 36. 灰色 (5Y6/1) 砂
 37. 浅黄色 (5Y7/4) 粘土
 38. 灰色 (10Y5/1) 粗砂<0.5~2mmの小石を多く含む>
 39. 灰色 (10Y6/1) 粗砂
- 9~30までラミナ状の層積
33以下から湧水

第9図 乾谷遺跡3トレンチ南壁土層断面図



第10図 乾谷遺跡3トレンチ平面図

(2) 乾谷大崩遺跡

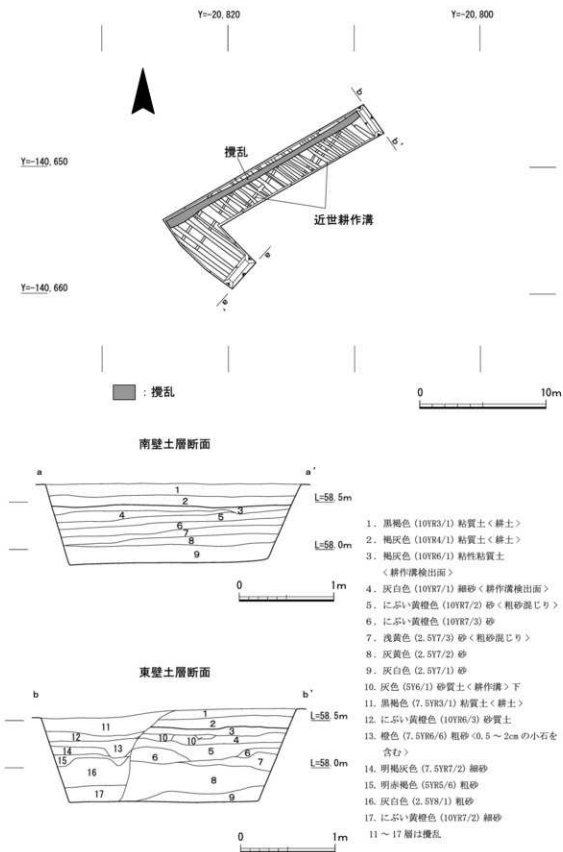
1 基本層序

周辺の地形は、北側の丘陵の先端部にあたり、現地表の標高は約61.7mを測り、標高61.5m付近で遺構面を確認した(第12図)。

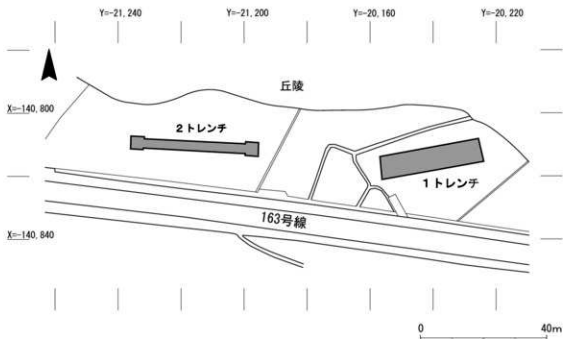
1・2トレンチの基本的な層序は、耕作土・床土があり、その直下で近世の耕作溝や水田に伴う足跡を検出した。また、乾谷遺跡と同様に、遺構検出面までには0.1m程度の褐灰色細砂の堆積層を確認した。この砂の堆積層は山田川の氾濫による洪水砂であり、1トレンチでは0.01m程度の堆積であるが、2トレンチでは0.1m程度堆積しており、調査地点で堆積の違いを確認した。遺構面は、近世の水田面であり、洪水砂によって水田面が覆われていることが確認できた。

下層では、1トレンチは標高61m付近以下では灰色粘質土層となる。調査の最終段階で標高59.6mまで掘削したが、灰色粘質土層が堆積しており、遺構・遺物は確認できなかった。2トレンチの下層では溝、畦畔、耕作に伴う溝を検出した。2トレンチの東西端を標高60.2mまで掘削した結果、東では1トレンチと同様の灰色粘土層を確認したが、西では灰白色砂層を検出した。2トレンチの東西で堆積状況の異なる層序を確認したが、遺構・遺物は検出できなかった。

2 検出遺構



第11図 乾谷遺跡4トレンチ平面図・土層断面図



第12図 乾谷大崩遺跡調査トレンチ配置図

① 1トレンチ

現地表面の標高は61.7mを測る。調査面積は235㎡である。遺構面は西から東に向かって低く傾斜する。調査の結果、耕作土・床土の直下で江戸時代前期以降の土坑S K09と江戸時代前期の耕作溝(S D04・08など)を検出した(第13・14図)。下層では標高61m付近の第7層褐色粘質土までは遺物を検出したが、遺構は認められなかった。標高60.5mの第10層以下では灰色粘質土となり、標高59.6mまで掘削したが、遺物・遺構は認められなかった。

土坑S K09 トレンチ西側で検出した。長辺1.17m、短辺0.77m、深さ0.02mの隅丸方形を呈する。埋土は単層であり、耕作溝の後に掘削されているため、江戸時代前期以降の遺構である。遺物は出土しなかった。

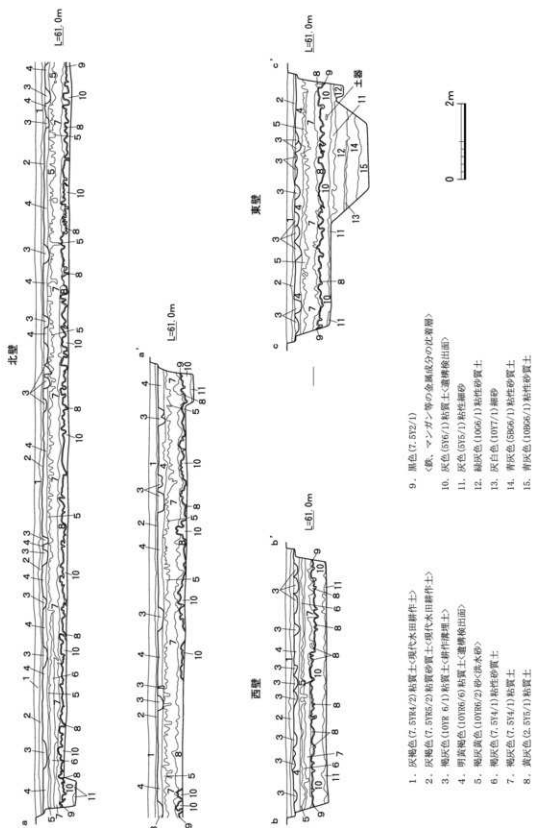
耕作溝S D04・S D08など トレンチ全面で北西方向に掘削された溝群を検出した。トレンチ中央から西寄りの部分で、その溝群を切る南東方向に掘削された溝5条を検出した。溝は幅0.2～0.4m、深さ0.05～0.03mである。遺物は土師器皿の破片が出土している。

② 2トレンチ

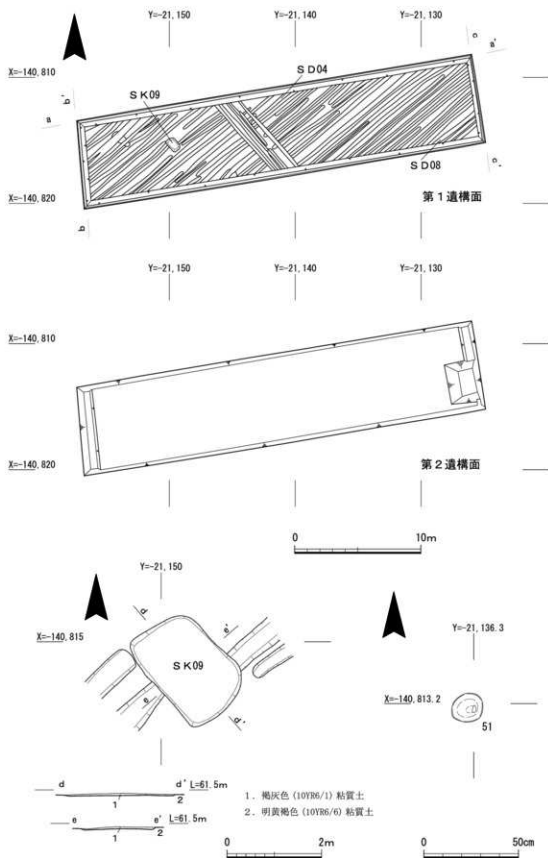
1トレンチの西側に設定したトレンチである。現地表面の標高は62.3mを測る。調査面積は112㎡である。遺構面は西から東に向かって低く傾斜する。標高約62mで遺構面を検出した(第15～17図)。

第1遺構面は山田川の洪水による砂層で厚く覆われており、砂層を除去すると、水田区画の畦畔1畝と畝の東側と西側で人や動物の偶蹄目と考えられる足跡を確認した。

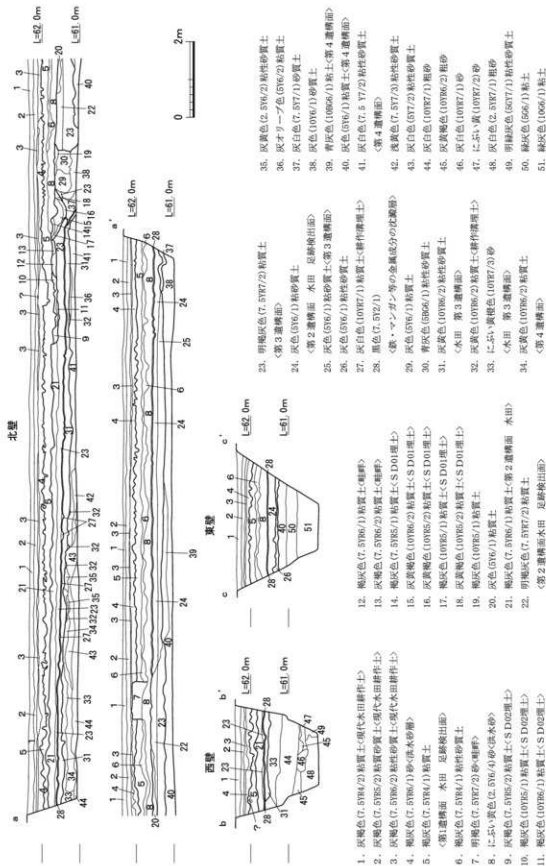
下層の第2遺構面ではトレンチ中央部で南北方向の溝2条(S D01・02)と溝の間に畦畔1畝を検出した。東側では上層と同様に人や動物の偶蹄目と考えられる足跡を確認した。さらに下層の第3・4遺構面では、西側で耕作溝(S D03・04・05)を検出した。このように、水田などの耕作



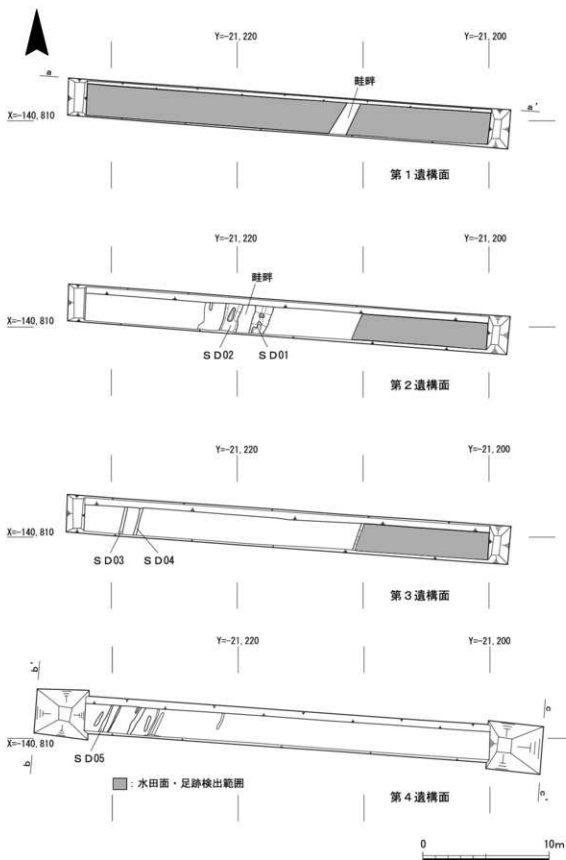
第13図 乾谷大跡遺跡 1 トレンチ土層断面図



第14図 乾谷大崩遺跡1トレンチ平面図・土坑S K09平面図・遺物出土状況図



第15図 乾谷大跡遺跡2トレンチ土層断面図



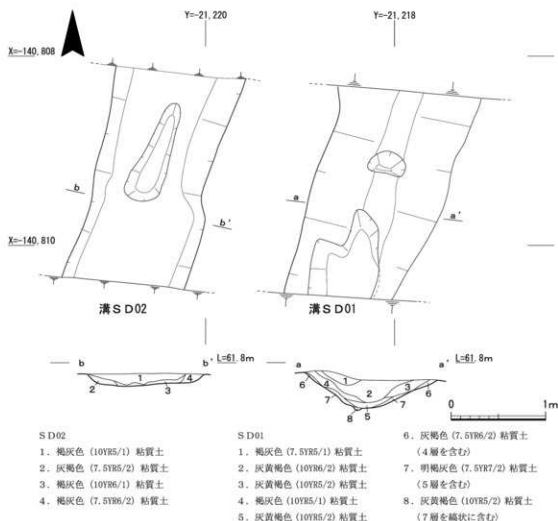
第16図 乾谷大崩遺跡2トレンチ平面図

が現代まで営まれ、トレンチ中央部の溝と畦畔を境に土地利用が異なっていたと考えられる。

トレンチの東西端を標高60.2mまで掘削した結果、東部では標高61.4m以下では1トレンチと同様の灰色粘土層を確認したが、西部では標高61.3m以下では灰白色砂層を検出した。トレンチの東西で堆積状況の異なる層序を確認したが、遺構・遺物は検出できなかった。

溝SD01 トレンチ中央部のSD01の東側で検出した南北方向の溝である。幅11.3~15.0m、深さ0.4~0.7mである。埋土はレンズ状の堆積であり、溝底の高さは北から南に向かって低く傾斜しているため、丘陵部から山田川に向かって流水していたと考えられる。溝底の南側が深くなっているのは、急流のために、溝底が浸食されたためと考えられる。遺物は土師器の皿と銅の破片が出土している。

溝SD02 トレンチ中央部で検出した南北方向の溝である。幅11.6~13.4m、深さ0.13~0.21mである。溝底は平坦であり、中心部分が凹んでいる。SD01と同様に丘陵部から山田川に向かって流れていたと考えられるが、溝の深さは浅く、溝底が平坦であり、堆積層からは流水の痕跡は認められない。常時水が流れているような溝ではなく、排水など特定の用途で機能していた溝であると考えられる。遺物は土師器皿の破片が出土している。



第17図 乾谷大崩遺跡2トレンチ溝SD01・02平面断面図

耕作溝 S D03・04 トレンチ西部で南北方向の耕作溝を2条検出した。幅0.2～0.3m、深さ0.03～0.06mである。遺物は出土していない。

耕作溝 S D05など トレンチ西部で検出した耕作溝 S D03・04の下層より9条の耕作溝を検出した。幅0.1～0.4m、深さ0.02～0.05mである。S D05より土師器皿の破片が出土している。

(福山博章)

5. 出土遺物

1～47は、乾谷遺跡から出土した遺物である(第18・19図、付表1)。

1～26は、1トレンチから出土した遺物である。1～15は水田1から出土した。1は現代の耕地の床土直下で出土した須恵器の杯Bである。奈良時代の土器であるため、混入したものと思われる。2は水田上面で遺構精査時に出土した土師器の鍋と思われる口縁部である。3～5は水田1で出土した16世紀中頃の肥前の伊万里焼の碗である。6は中国製龍泉窯の無文碗と思われる。7は水田1の西側畦付近で出土した小型の差歯下駄である。歯の部分は欠損している。8は磁器碗の高台部分である。9・10は16世紀の美濃の天目茶碗の高台部分である。11～14は水田1から出土した土師器皿である。14の口縁部には煤が付着していることから灯明皿と思われる。15は鉄製の釘であるが、先端部が欠損している。残存長3.9cmを測る。16～18は水田2から出土した遺物である。16は16世紀中頃の肥前の伊万里焼の碗である。17・18は土師器皿である。19は水田5から出土した土師器皿で口縁部に煤が付着しており灯明皿と思われる。20は肥前の伊万里の鉢の口縁部と思われる。内面に煤が付着している。21は水田7から出土した土師器の羽釜片である。22～25は水田面より下層から出土した。22は須恵器の蓋の口縁部片である。23・24は土師器皿、25は瓦器皿である。26は水田1の南側畦の上部から出土した平瓦片である。

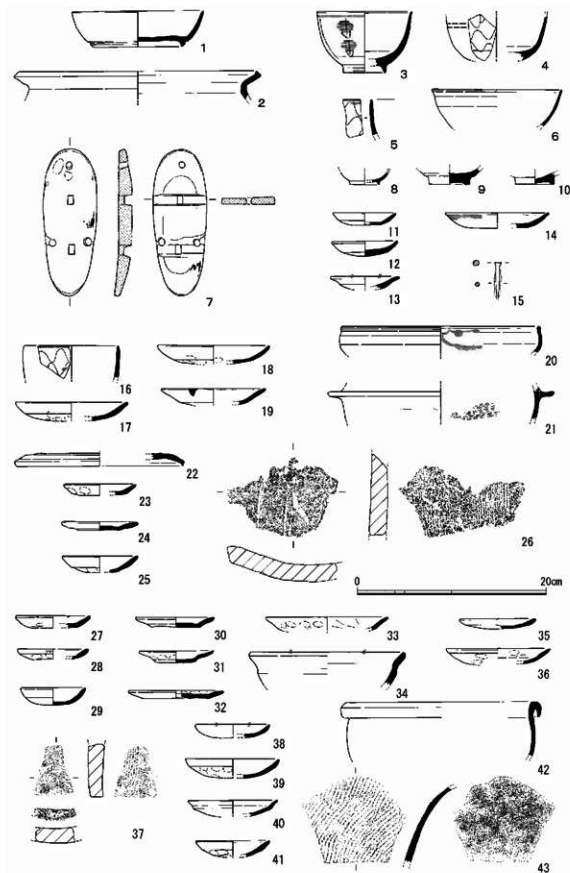
27～37は2トレンチから出土した遺物である。27～33は第1水田面から出土した土師器皿である。27の口縁部には煤が付着していることから灯明皿と思われる。34は瓦器の鍋の口縁部である。35・36は第2水田面から出土した土師器皿である。37は第2水田面から出土した平瓦片である。

38～43は3トレンチから出土した遺物である。38・39は現代の攪乱1内から出土した土師器皿である。40～41は近世の耕作溝から出土した土師器皿である。42は信楽の鉢の口縁部である。43は須恵器甕の体部片である。

44～47は4トレンチから出土した遺物である。44は近世耕作溝から出土した17世紀後半の肥前の施釉陶器の碗と思われる。45は12世紀の中国製の白磁の碗である。46・47は銅製の煙管である。

48～78は乾谷大崩遺跡から出土した遺物である(第19図、付表2)。

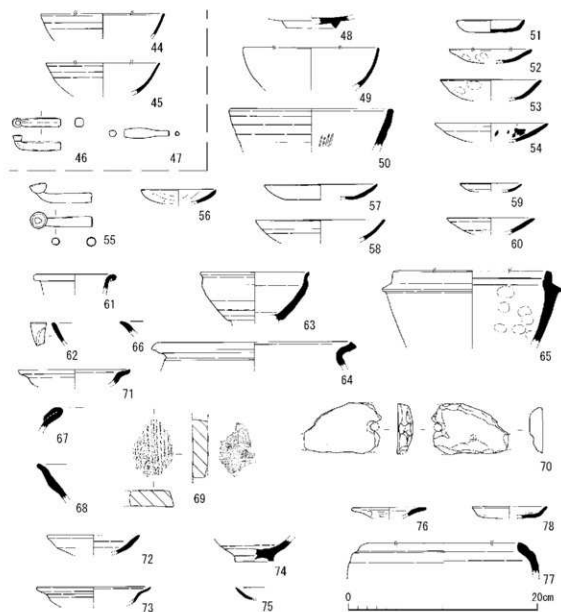
48～60は1トレンチから出土した遺物である。48は精査時に出土した灰釉陶器の碗の高台部分である。49は精査時に出土した中国製、龍泉窯青磁碗の口縁部である。13～14世紀に属するものと思われる。50は掘削時に出土した信楽のすり鉢である。51～54は掘削中に出土した土師器皿である。55は掘削時に出土した銅製の煙管の雁首部である。56～58は褐色粘質土(第7層)から出土した土師器皿である。59・60は耕作溝から出土した。59は溝 S D04、60は溝 S D08から出土し



第18図 出土遺物 1

た土師器皿である。

61～78は2トレンチから出土した遺物である。61・62は精査時に出土した。61は白磁の壺の口縁部である。62は青磁碗の口縁部である。体部に蓮弁が認められる。63・64は褐灰色粘質土(第5層)から出土した。63は美濃の鉢、64は土師器の鍋の口縁部である。65～68は褐灰色粘質土(第21層)から出土した。65は14～15世紀の瓦器の鍋で、66は14～15世紀の古瀬戸の皿、67は土師質の釜、68は信楽のすり鉢の破片である。16世紀に属する。69・70は第3遺構面の明褐灰色粘質土(第23層)から出土した遺物である。69は平瓦の破片である。凸面にはタタキ痕、凹面には布目が認められる。古代の瓦であると考えられる。70は石包丁の未成品である。大きく折損しているが、本体には殴打痕と両面加工による擦痕が認められる。2ヶ所に穿孔が認められる、1ヶ所は貫通しておらず、もう一か所は欠損しているが両面から穿孔している。71は水田面である第1構面の



第19図 出土遺物 2

褐灰色粘質土(第5層)上層で出土した美濃の皿である。72～74は水田面検出の足跡内から出土した遺物である。72・73は土師器皿、74は唐津の椀の高台部である。75は溝S D01から出土した土師器皿である。76・77は溝S D02から出土した。76は土師器皿、77は土師質の釜の口縁部である。78は耕作溝S D05から出土した土師器皿である。

(村田和弘・福山博章)

6. まとめ

乾谷遺跡では、1トレンチで近世の水田面を確認した。出土した遺物から江戸時代初期(17世紀初め)に造られた水田であることがわかった。水田面の下層では、さらに1面の水田と思われる室町時代後期(16世紀)の遺物を含む堆積層を確認したが、断面では畦畔などの区画を示す堆積層内の変化は確認できなかった。

検出した水田は、南に流れる山田川の洪水に幾度か見舞われるが、その度に新たに水田を作り直していたことがわかった。当時の水田は、畦畔によって細かく分けられていたことも明らかになった。また、洪水による砂の堆積層の中から、奈良時代の須恵器杯や中世の土器などが出土しており、洪水によって流され混入したものと思われる。2トレンチでは水田耕作土と思われる層を面として3面確認した。3・4トレンチでは、近世の耕作溝を検出したが、下層では1・2トレンチのような水田やそれ以前の遺構は検出できなかった。1・2トレンチで検出した水田から採取した土壌を花粉・植物珪酸体分析を行った結果、イネ属化石の検出などから稲作が行われていたとの結果を得た。また、ソバ属も検出されたことから周辺でソバの栽培・利用も考えられる。

一方、乾谷大崩遺跡では、乾谷遺跡と同様に、水田跡を検出した。特に2トレンチでは、4面の遺構検出面が確認でき、水田の畦畔とそれに伴う中世後半期の2条の溝を検出した。調査によって近世の耕作溝や中世の溝が確認できた。乾谷大崩遺跡においても、水田面の上層で洪水砂の堆積が確認できたが、0.03～0.05mの堆積で乾谷遺跡より山田川の氾濫の被害は少なかったと考えられる。

今回の調査では、乾谷遺跡・乾谷大崩遺跡ともに中・近世の遺構を検出し、少量ではあるが遺物が出土した。室町時代や江戸時代において、山田川の氾濫による周辺の水田などの被害状況などの資料を得ることができた。

また、今回の調査では洪水堆積層から弥生時代の石包丁や奈良時代の土器が出土していることから、周辺に水田よりも古い時期の集落が存在することが考えられる。今後、山田川の氾濫がおよんでいない地点での集落に関連する遺構の確認が期待される。

(村田和弘)

<参考文献>

- 梅原末治・赤松俊秀「山田荘村乾谷の瓦窯跡」(『京都市史蹟名勝天然記念物調査報告』第一四冊)1933年
 精華町市編纂委員会「考古編」(『精華町史 史料篇I』)1989年
 精華町市編纂委員会「原始・古代編」(『精華町史 本文編』)1996年

付表1 乾谷遺跡出土遺物一覧

実測番号	トレンチ	出土地点	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	成形調整など
1	1	床土直下	須臾器	杯 B	138	38	3/12	密	良好	灰 N6/0	内外面：回転ナデ
2	1	精査中	土師器	鍋?	25.1	-	1/16	やや粗	良好	淡赤褐色 25YR7/4	内外面：回転ナデ
3	1	水田1	磁器	碗	100	65	5/12	密	堅緻	素地：灰白 5Y7/1 釉：灰白 10Y7/1	肥前伊万里
4	1	水田1	磁器	碗	104	495	-	密	堅緻	素地：灰白 5Y7/1 釉：灰白 10Y7/1	肥前伊万里
5	1	水田1	磁器	碗	-	-	-	密	堅緻	素地：灰白 5Y7/1 釉：灰白 10Y7/1	肥前伊万里
6	1	水田1	青磁	無文碗	137	-	-	密	堅緻	灰 5Y6/1	中国製龍泉窯
7	1	水田1	木製品	下駄	155	14	11/12	-	-	-	差歯
8	1	水田1	磁器	碗	-	-	-	密	堅緻	灰白 10Y8/1	高台
9	1	水田1	陶器	碗	-	-	-	密	良好	黒 N5/0	美濃、天目、高台
10	1	水田1	陶器	碗	-	-	-	密	良好	黒褐色 5Y2/1	美濃、天目、高台
11	1	水田1	土師器	皿	67	13	3/12	密	良好	にぶい黄褐色 10YR7/3	内外面：ヨコナデ
12	1	水田1	土師器	皿	70	16	3/12	良密	良好	灰黄 25Y7/2	内外面：ヨコナデ
13	1	水田1	土師器	皿	73	13	1/12	密	良好	にぶい黄褐色 10YR7/4	内外面：ヨコナデ
14	1	水田1	土師器	皿	110	16	2/12	密	良好	にぶい黄褐色 10YR7/3	内外面：ヨコナデ 灯明皿?
15	1	水田1	鉄製品	釘?	-	-	11/12	-	-	-	長さ：3.9cm 重さ：4.8g
16	1	水田2	磁器	碗	99	-	2/12	密	堅緻	素地：灰白 5Y7/1 釉：灰白 10Y7/1	肥前伊万里
17	1	水田2	土師器	皿	118	20	2/12	密	良好	にぶい黄褐色 10YR7/4	内外面：ヨコナデ
18	1	水田2	土師器	皿	119	20	3/12	やや密	良好	にぶい黄褐色 10YR7/5	内外面：ヨコナデ
19	1	水田5	土師器	皿	108	17	2/12	密	良好	淡褐色 5YR8/4	灯明皿
20	1	水田6	磁器	鉢?	207	-	1/12	密	良好	にぶい赤褐色 25YR4/3	伊万里?
21	1	水田7	土師器	羽釜	-	-	2/12	密	やや軟	にぶい黄褐色 10Y7/4	
22	1	水田1 下層	須臾器	蓋	176	12	-	密	やや軟	灰 5Y6/1	
23	1	水田1 下層	土師器	皿	75	12	3/12	やや密	良好	黄灰 25Y4/1	内外面：ヨコナデ
24	1	水田1 下層	土師器	皿	79	09	3/12	密	良好	灰黄 25Y6/2	内外面：ヨコナデ
25	1	水田1 下層	瓦器	皿	90	175	1/12	密	良好	オリ-ブ黒 5Y3/1	内外面：ヨコナデ
26	1	畦上面	瓦	平	-	-	-	やや粗	良	灰 N6/0	表面：赤目 裏面：黒目
27	2	掘削中	土師器	皿	79	13	3/12	密	やや軟	にぶい黄褐色 10Y7/3	灯明皿
28	2	第1水田面	土師器	皿	75	11	2/12	密	良好	にぶい褐色 7.5YR6/3	内外面：ヨコナデ
29	2	第1水田面	土師器	皿	69	19	3/12	やや密	やや軟	浅黄 25Y7/3	内外面：ヨコナデ
30	2	第1水田面	土師器	皿	83	11	完形	やや粗	良好	灰黄 25Y6/2	内外面：ヨコナデ
31	2	第1水田面	土師器	皿	79	12	8/12	やや密	良好	灰黄 25Y7/2	内外面：ヨコナデ
32	2	第1水田面	土師器	皿	100	085	2/12	やや密	良好	暗灰黄 25Y5/2	内外面：ヨコナデ
33	2	第1水田面	瓦器	皿	130	-	1/12	やや密	良好	黄灰 25Y4/7	内外面：ヨコナデ
34	2	第1水田面	瓦器	鍋	160	-	1/12	密	良好	暗灰 N3/0	内外面：ヨコナデ
35	2	第2水田面	土師器	皿	81	11	2/12	密	良好	にぶい黄褐色 10YR6/3	内外面：ヨコナデ
36	2	第2水田面	土師器	皿	110	16	1/12	やや密	良好	浅黄 25Y7/3	内外面：ヨコナデ
37	2	第2水田面	瓦	平	-	-	-	-	粗	良好	灰 N4/0 表面：赤目 裏面：黒目
38	3	掘削1内	土師器	皿	79	14	1/12	密	良好	浅黄褐色 10YR8/3	内外面：ヨコナデ
39	3	掘削1内	土師器	皿	99	20	1/12	やや密	良好	にぶい黄褐色 10YR7/4	内外面：ヨコナデ
40	3	耕作溝	土師器	皿	93	17	1/12	やや粗	良好	黄 5YR6/6	内外面：ヨコナデ
41	3	耕作溝	土師器	皿	77	17	2/12	密	良好	にぶい褐色 7.5YR7/3	内外面：ヨコナデ
42	3	掘削中	陶器	鉢	199	-	2/12	粗	良好	灰オリ-ブ 5Y6/2	信楽、攝津
43	3	灰白色粗砂	須臾器	変?	-	-	-	密	やや軟	灰白 N7/0	タタキ
44	4	耕作溝	陶器	碗	129	-	1/12	密	堅緻	外面：緑灰 5G5/1 内面：灰白 7.5Y7/1	肥前?
45	4	耕作溝	白磁	碗	120	-	1/12	密	堅緻	灰白 7.5Y8/1	中国製
46	4	掘削中	銅製品	煙管	-	-	完形	-	-	-	雁首部 長さ：50.5cm
47	4	耕作溝	銅製品	煙管	-	-	完形	-	-	-	喉い付部 長さ：42cm

付表2 乾谷大崩遺跡出土遺物一覧

実測番号	トレンチ	出土地点	器種	器形	口径(cm)	器高(cm)	残存(%)	胎土	焼成	色調	成形調整など
48	1	精査中	灰釉陶器	碗	-	-	4/12	密	堅緻	灰白5Y7/2	高台部
49	1	精査中	青磁	碗	14.2	-	1/12	密	堅緻	明緑灰7GY7/1	中国製龍泉窯
50	1	掘削中	陶器	すり鉢	17.1	40	1/12	やや密	良好	にぶい赤褐25YR5/4	信楽
51	1	掘削中	土師器	皿	7.0	1.4	完形	やや密	やや軟	浅黄緑10YR8/3	内外面:ヨコナテ
52	1	掘削中	土師器	皿	8.9	1.5	1/12	やや密	良好	にぶい橙75YR7/4 内:黄緑10YR8/6 外:明黄褐10YR6/6	内外面:ヨコナテ
53	1	掘削中	土師器	皿	10.7	2.2	1/12	やや密	良好	にぶい黄褐10YR7/4	内外面:ヨコナテ 内面に漆付着
54	1	掘削中	土師器	皿	12.0	2.0	2/12	やや密	良好	にぶい黄褐10YR7/4	内外面:ヨコナテ 内面に漆付着
55	1	掘削中	銅製品	煙管	-	-	完形	-	-	-	雁首部 長さ:6.5cm
56	1	褐灰色粘質土(第7層)	土師器	皿	7.96	1.7	2/12	密	良好	にぶい黄褐10YR7/4	内外面:ヨコナテ
57	1	褐灰色粘質土(第7層)	土師器	皿	11.7	1.2	1/12	密	良好	にぶい黄褐10YR7/3	内外面:ヨコナテ
58	1	褐灰色粘質土(第7層)	陶器	碗	13.7	-	1/12	密	堅緻	緑灰10GY5/1	施軸
59	1	耕作溝	土師器	皿	6.5	0.9	1/12	密	良好	にぶい橙75YR7/3	内外面:ヨコナテ
60	1	耕作溝	土師器	皿	9.0	1.65	2/12	密	良好	灰白75YR8/2	内外面:ヨコナテ
61	2	精査中	白磁	壺	7.9	-	1/12	密	堅緻	灰白10Y7/1	中国製(福建産?)
62	2	精査中	青磁	碗	-	-	-	密	堅緻	オリーブ灰10Y6/2	
63	2	褐灰色粘質土(第5層)	陶器	鉢	12.0	-	1/12	密	良好	にぶい黄褐10YR4/3	美濃、施軸
64	2	褐灰色粘質土(第5層)	土師器	鍋	20.4	-	1/12	やや密	やや軟	灰白25Y8/2	
65	2	褐灰色粘質土(第21層)	瓦器	鍋	16.0	-	1/12	やや密	やや軟	灰N4/0	
66	2	褐灰色粘質土(第21層)	陶器	皿	16.8	-	1/12	密	良好	浅黄75Y7/3	古瀬戸
67	2	褐灰色粘質土(第21層)	土師質	釜	-	-	-	やや粗	良好	浅黄25Y7/3	口縁部
68	2	褐灰色粘質土(第21層)	陶器	すり鉢	-	-	-	やや粗	良好	にぶい黄褐10YR7/3	信楽
69	2	明褐色粘質土(第23層)第3遺構面	瓦	平	-	-	-	粗	やや軟	明褐75YR5/6	表面:布目 裏面:縄目
70	2	明褐色粘質土(第23層)第3遺構面	石器	石包丁	-	-	-	-	-	-	最長幅:81cm 未成品
71	2	褐灰色粘質土(第12層)水田面	陶器	皿	9.7	-	1/12	密	やや軟	浅黄5Y7/3	美濃、施軸
72	2	水田足跡内	土師器	皿	9.7	2.0	2/12	密	良子	褐灰5YR4/1	内外面:ヨコナテ
73	2	水田足跡内	土師器	皿	12.0	1.9	1/12	密	良	灰白10YR8/2	内外面:ヨコナテ
74	2	水田足跡内	陶器	碗	-	-	6/12	密	堅緻	にぶい橙75YR7/3	美濃、高台部、施軸
75	2	SD 01	土師器	皿	-	-	1/12	やや密	やや軟	浅黄緑10YR8/3	内外面:ヨコナテ
76	2	SD 02	土師器	皿	7.7	1.05	4/12	やや密	良好	浅黄25Y7/3	内外面:ヨコナテ
77	2	SD 02	土師質	釜?	16.0	-	1/12	やや粗	軟	灰白25Y8/2	口縁部
78	2	SD 05	土師器	皿	7.8	1.3	1/12	やや密	やや軟	橙75YR6/6	内外面:ヨコナテ

付編 乾谷遺跡の花粉・植物珪酸体分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、乾谷遺跡の発掘調査で検出されている近世(17世紀中頃)の水田の様態や当時の植生に関する情報を得ることを目的として、花粉分析・植物珪酸体分析を実施する。

1. 試料

分析試料は、1トレンチの水田1の耕作土(第4図23層)、2トレンチの第2水田面の耕作土(第8図33層)層準より採取された2点である。いずれの耕作土も塊状構造をなす砂質泥からなり、著しく擾乱されている。各耕作土は氾濫堆積物に覆われている。

2. 分析方法

(1)花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.2)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9:濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、現生標本のほか、鳥倉(1973)、中村(1980a)等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(2)植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定し、計数する。分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、乾土1gあたりの植物珪酸体含量を求めらる。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各

分類群の含量は10の位で丸める(100単位にする)。また、各分類群の植物珪酸体含量を图示する。

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を表1、図1に示す。いずれの試料からも花粉化石が豊富に産出し、保存状態も比較的良好である。1トレンチ水田1(23層)は、木本花粉の割合が高く、マツ属が木本花粉全体の85%以上を占める。その他ではモミ属、ツガ属、トウヒ

表1 花粉分析結果

種 類	1トレンチ	2トレンチ
	水田1 20層	南誌裏部 第3水田面
木本花粉		
マキ属	-	1
モミ属	9	2
ツガ属	8	12
トウヒ属	5	1
マツ属単雄管束亜属	5	1
マツ属複雄管束亜属	213	103
マツ属(不明)	78	38
コウヤマキ属	-	1
スギ属	1	3
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	1
クマシラ属-アサダ属	2	2
ハンノキ属	12	8
ブナ属	1	6
コナラ属コナラ亜属	4	7
コナラ属アカガシ亜属	-	7
ニレ属-ケヤキ属	1	5
エノキ属-ムクノキ属	-	1
フウ属	1	1
アカメダシノ属	-	1
ツツジ科	-	4
トネリコ属	-	1
草本花粉		
オモダカ属	-	2
ミズオオハコ属	-	4
イネ属型	72	305
他のイネ科	69	145
カヤツリグサ科	17	16
ミズアオイ属	2	2
サナエダ節-ウナギツカミ節	1	-
タデ属	-	1
ソバ属	2	-
アカザ科	1	-
ナデシコ科	-	2
キンポウゲ科	1	-
アブナ科	-	1
セリ科	1	-
シソ科	-	1
オミナエシ属	-	1
キタミ科	2	-
タンポポ重科	2	1
不明花粉		
不明花粉	2	3
シダ類胞子		
ゼンマイ属	-	1
他のシダ類胞子	17	34
合 計		
木本花粉	340	206
草本花粉	170	481
不明花粉	2	3
シダ類胞子	17	35
合計(不明を除く)	527	722
その他		
シャクモ科	-	1
タンシウモ属	1	4
同虫卵	1	4

属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属等を伴う。草本花粉ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、ミズアオイ属、ソバ属、キク亜科、タンポポ重科などを伴う。なお、多産するイネ科花粉中には、栽培種であるイネ属に類する形態を示すもの(以下、イネ属型とする)も多く含まれており、イネ科全体に占めるイネ属型の割合は約51.1%であった。花粉・胞子以外では、水生藻類のクンシヨウモ属、寄生虫卵の回虫卵が確認された。

2トレンチ南第2水田面(33層)は、1トレンチと異なり、草本花粉の占める割合が高い。木本花粉ではマツ属が優勢し、ツガ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ

表2 植物珪酸体分析結果

分 類 群	1トレンチ	2トレンチ
	水田1 20層	南誌裏部 第3水田面
イネ科葉部短細胞珪酸体		
イネ属	200	500
メダク属	200	-
タケ茎科	<100	100
ヨシ属	<100	-
不明	<100	200
イネ科葉身機能細胞珪酸体		
イネ属	600	500
メダク属	300	200
タケ茎科	600	600
ヨシ属	<100	-
シバ属	<100	<100
不明	900	1,400
合 計		
イネ科葉部短細胞珪酸体	500	900
イネ科葉身機能細胞珪酸体	2,400	2,800
植物珪酸体含量	2,900	3,700
珪化組織片		
イネ属珪酸体	*	*
イネ属短細胞列	*	**
イネ属機能細胞列	-	*
樹木起源珪酸体		
クスノキ科	*	*
その他		
海綿骨針	*	**

数値は含量密度(個/g)を示し、10の位で丸めている(100単位にする)。
<100は100個/g未満を示す。珪化組織片および樹木起源珪酸体の産状は、-が未検出、*が検出、**が多数検出を示す。

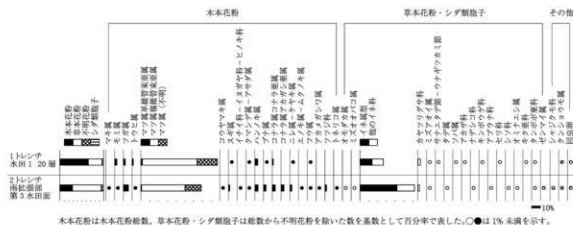


図1 花粉化石群集

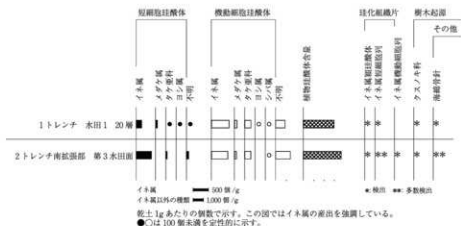


図2 植物珪酸体群集

属-ケヤキ属、ツツジ科などを伴う。草本花粉ではイネ科が優占し、イネ科に占めるイネ属型の割合は約67.8%であった。その他ではオモダカ属、ミズオオバコ属、カヤツリグサ科、ミズアオイ族、ナデシコ科などを伴う。花粉・胞子以外では、シャジクモ科、クンショウモ属、回虫卵などが確認された。

(2) 植物珪酸体分析

結果を表2、図2に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。また植物珪酸体含量も概して少なく、1トレンチ水田1(23層)が約3千個/g、2トレンチ第2水田面(33層)が約4千個/gである。

各試料からは栽培植物のイネ属が産出し、葉部の短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。その含量密度は、1トレンチ水田1(23層)の短細胞珪酸体が200個/g程度、機動細胞珪酸体が600個/g程度、2トレンチの第2水田面(33層)の短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体が共に500個/g程度である。また短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体には珪化組織片を呈するものも見られ、初(穎)に形成される穎珪酸体も検出される。イネ属は、特に機動細胞珪酸体がタケ亜科と共に、検出される他の分類群と比較しても産出が目立つと言える。この他にヨシ属やシバ属がわずかに見られる。またイネ科起源の他に、クスノキ科に由来する樹木起源珪酸体、海綿骨針も検

出される。

4. 考察

今回調査を行った近世の水田耕作土は、花粉分析結果をみると、いずれの地点も草本類ではイネ科が多産あるいは優占し、イネ属型花粉が多産する。イネ科全体に占めるイネ属型の割合は、1 トレンチ水田 1 (23層) で約50%、2 トレンチ第2水田面 (35層) で約70%と、高い割合を示す。なお、中村 (1980b) によると、現生水田のイネ属花粉の挙動からみて、イネ属の割合が30%以上を示す場合、少なくともその付近で稲作が行われていたとみなせるとしている。一方、植物珪酸体の産状をみると、イネ属由来の植物珪酸体が発見されるもの、杉山 (2000) で水田調査の基準としている値 (イネ属機動細胞珪酸体が試料 1 g 当り 5,000 個以上) の 1/10 程度と低い。このように含量密度は低いものの、イネ属由来の珪化組織片や柄柄に形成される顆粒珪酸体が産出することから、堆積物中にイネ属植物体が存在したことが示唆される。

栽培種を除く草本花粉化石は、イネ科、サナエタデ節-ウナギツカミ節、アカザ科、ナデシコ科、アブラナ科、キク亜科、タンポポ亜科など、開けた明るい場所に生育する種類が多く認められる。また、植物珪酸体でもメダケ属を含むタケ亜科、ヨシ属、シバ属などのイネ科植物が発見される。さらに、主に 2 トレンチ第2水田面 (33層) では、オモダカ属、水オモダカ属、ミズアオイ属などの水田雑草としても一般的な種類が含まれるほか、水田にも多いシャジクモ科、クンシヨウモ属なども検出される。

以上の草本花粉・植物珪酸体の産状から、調査区一帯は開けた場所であったと考えられることや、イネ属化石の産状から、調査地点では稲作が行われていたと考えられる。また産出した水湿地性植物は、水田雑草に由来する可能性がある。なお、イネ属植物珪酸体の含量密度が低かった点は不明だが、産出した植物珪酸体全体の保存状態が悪かったこと、植物珪酸体も環境によっては (たとえば、アルカリ性の水域など) 溶脱することがある (近藤 2010 など) ことから、堆積後の土壌生成作用の影響によって分解している可能性もある。また、イネ属以外の栽培種では、1 トレンチ水田 1 (23層) からソバ属が発見されたことから、当該期における周辺でのソバ栽培・利用も示唆される。

木本花粉をみると、マツ属 (主としてマツ属複雑管束亜属) が優占する。マツ属複雑管束亜属 (いわゆるニヨウマツ類) は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。また、極端な陽樹であり、やせた裸地などでもよく発芽し生育することから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。また花粉生産量が多く、風媒であることから、実際の植生に対して過大評価されている場合が多い。マツ属以外では、モミ属、ツガ属等の温帯性針葉樹や、コナラ属アカガシ亜属などの常緑広葉樹、クマシデ属-アサダ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属-ケヤキ属、エノキ属-ムクノキ属などの落葉広葉樹も産出するが、いずれも産出率は低率で、1 トレンチ水田 1 では種類構成も単調である。このような木本花粉の産状から、当時の調査区周辺にはマツ属が分布していたものの、森林と呼べる林分が成立していた可能性は低く、人為的植生擾乱を強く受けた植

生であったと推定される。このような近世の木本ならびに草本花粉化石の組成は、京都盆地の近世以降の組成としては、普遍的にみられる傾向である(佐々木ほか2011)。

引用文献

近藤錬三『プラント・オパール図譜』北海道大学出版会 2010 387頁

中村 純「イネ科花粉について、とくにイネ(*Oryza sativa*)を中心として」(『第四紀研究』13) 1974 187-193頁

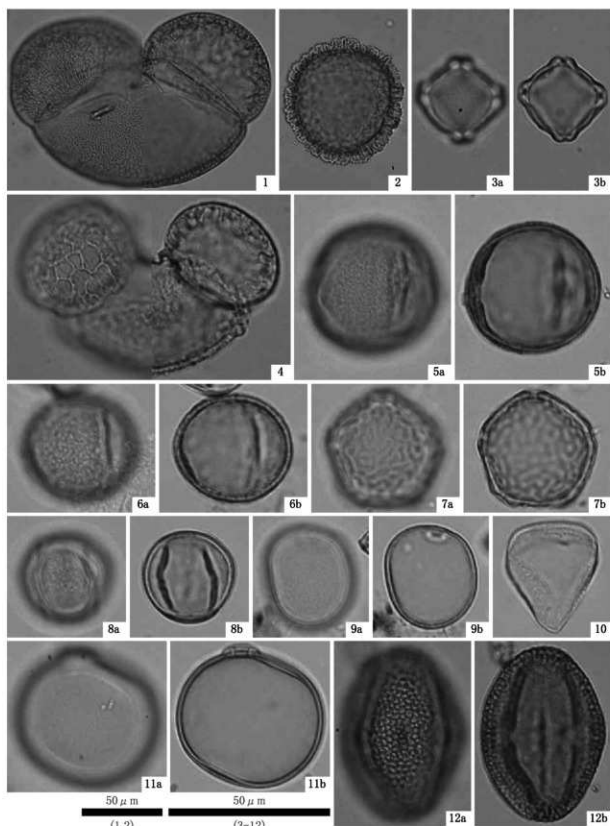
中村 純「日本産花粉の標徴 I II (図版)」(『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第12・13集) 1980a 91頁

中村 純「花粉分析による稲作史の研究」(『自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究 - 総括報告書-』文部省科研費特定研究「古文化財」総括班) 1980b 187-204頁

島倉巳三郎『日本植物の花粉形態』大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 1973 60頁

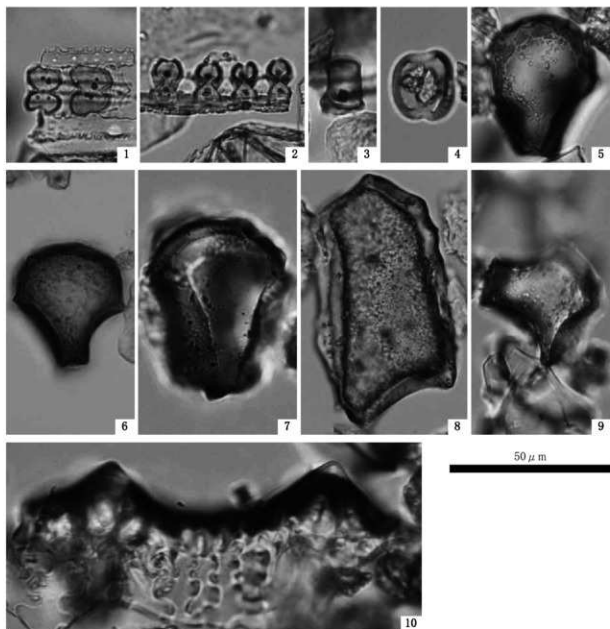
杉山真二「植物珪酸体(プラント・オパール)」(辻 誠一郎(編著)『考古学と自然科学3 考古学と植物学』同成社)2000 189-213頁

佐々木尚子・高原 光・湯本 貴和「京都盆地における「里山」林の成立過程」『地球環境』16 2011 115-127頁



- | | |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1. モミ属(1トレンチ水田1;20層) | 2. ツガ属(1トレンチ水田1;20層) |
| 3. ハンノキ属(1トレンチ水田1;20層) | 4. マツ属(1トレンチ水田1;20層) |
| 5. ブナ属(2トレンチ南拡張部;第3水田面) | 6. コナラ属コナラ亜属(2トレンチ南拡張部;第3水田面) |
| 7. ニレ属—ケヤキ属(2トレンチ南拡張部;第3水田面) | 8. コナラ属アカガシ亜属(2トレンチ南拡張部;第3水田面) |
| 9. イネ科(2トレンチ南拡張部;第3水田面) | 10. カヤツリグサ科(2トレンチ南拡張部;第3水田面) |
| 11. イネ科(イネ属型)(2トレンチ南拡張部;第3水田面) | 12. ソバ属(1トレンチ水田1;20層) |

図版 1 花粉化石



1. イネ属短細胞列(1トレンチ水田1;20層)
2. イネ属短細胞列(2トレンチ南拡張部;第3水田面)
3. タケ亜科短細胞珪酸体(2トレンチ南拡張部;第3水田面)
4. ヨシ属短細胞珪酸体(1トレンチ水田1;20層)
5. イネ属機動細胞珪酸体(1トレンチ水田1;20層)
6. イネ属機動細胞珪酸体(2トレンチ南拡張部;第3水田面)
7. メダケ属機動細胞珪酸体(2トレンチ南拡張部;第3水田面)
8. イネ属機動細胞珪酸体(1トレンチ水田1;20層)
9. シバ属機動細胞珪酸体(1トレンチ水田1;20層)
10. イネ属顆粒酸体(2トレンチ南拡張部;第3水田面)

図版2 植物珪酸体

圖 版



(1) 第 2 トレンチ全景(上空から、右下が北)



(2) 第 2 トレンチ遺構群全景(上空から、右下が北)



(1) 第 1 トレンチ全景(南東から)



(2) 第 1 トレンチ全景(北西から)



(3) 第 1 トレンチ S D04 検出状況
(南西から)

(1) 第 1 トレンチ S P 01 検出状況
(北東から)



(2) 第 1 トレンチ S P 01 完掘状況
(北東から)



(3) 第 1 トレンチ S D 03・04 近景
(北東から)





(1) 第 1 トレンチ S D 04 堆積状況
(北東から)



(2) 第 1 トレンチ S D 03 堆積状況
(北東から)



(3) 第 1 トレンチ S D 03・04 近景
(南西から)

(1) 第 1 トレンチ S D04 堆積状況
(南西から)

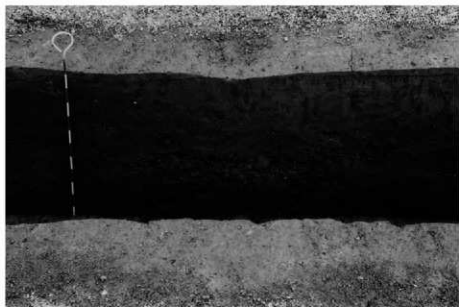


(2) 第 1 トレンチ S D03 堆積状況
(南西から)



(3) 第 1 トレンチ 噴砂近景
(南西から)





(1) 第 1 トレンチ噴砂近景
(北東から)



(2) 第 1 トレンチ埋め戻し状況
(南東から)



(3) 第 2 トレンチ近景(南東から)

(1) 第 2 トレンチ全景(北西から)



(2) 第 2 トレンチ S D 10 内
遺物出土状況(北から)



(3) 第 2 トレンチ S D 17 近景
(北東から)





(1) 第 2 トレンチ S D 16、S K 21
～ 23 近景 (北東から)



(2) 第 2 トレンチ S D 13～15 近景
(北東から)



(3) 第 2 トレンチ S D 12 近景
(北東から)

(1) 第 2 トレンチ S D 11 近景
(北東から)



(2) 第 2 トレンチ S D 15 堆積状況
(西から)



(3) 第 2 トレンチ S K 21 堆積状況
(西から)





(1) 第 2 トレンチ S K21 遺物出土
状況 (西から)



(2) 第 2 トレンチ S K21 遺物出土
状況 (北から)



(3) 第 2 トレンチ S K21 完掘状況
(北から)

(1) 第 2 トレンチ遺物包含層
検出状況(北から)



(2) 第 2 トレンチ遺物包含層
検出状況(北東から)



(3) 第 2 トレンチ11区噴砂検出状況
(北東から)





出土遺物

(1) 調査前全景(南東から)



(2) 調査前全景(北東から)



(3) 調査前全景(南東から)





(1)24-1 トレンチ全景(北西から)



(2)24-1 トレンチ断面(北から)



(3)24-2 トレンチ杭検出状況
(南東から)



(1)24-2 トレンチ全景(南から)



(2)24-2 トレンチ杭列検出状況(北から)



(1)24-2 トレンチ杭列断面
(北西から)



(2)24-2 トレンチ杭列断面
(南東から)



(3)24-2 トレンチ完掘後全景
(北西から)

(1)24-3 トレンチ全景(北から)



(2)24-3 トレンチ杭列検出状況
(東から)



(3)24-3 トレンチ完掘後全景
(北西から)





(1)25-1 トレンチ全景(北東から)



(2)25-1 トレンチ断面(北から)



(3)25-4 トレンチ全景(北東から)

(1)25-4トレンチ露検出状況
(南東から)



(2)25-7トレンチ断面(北西から)



(3)25-7トレンチ露検出状況
(東から)





(1)26-1 トレンチ全景(北西から)



(1)26-3 トレンチ全景(南東から)



(1)26-4 トレンチ全景(東から)



(1)26-2 トレンチ全景(南東から)



(2)26-2 トレンチ断面(北西から)



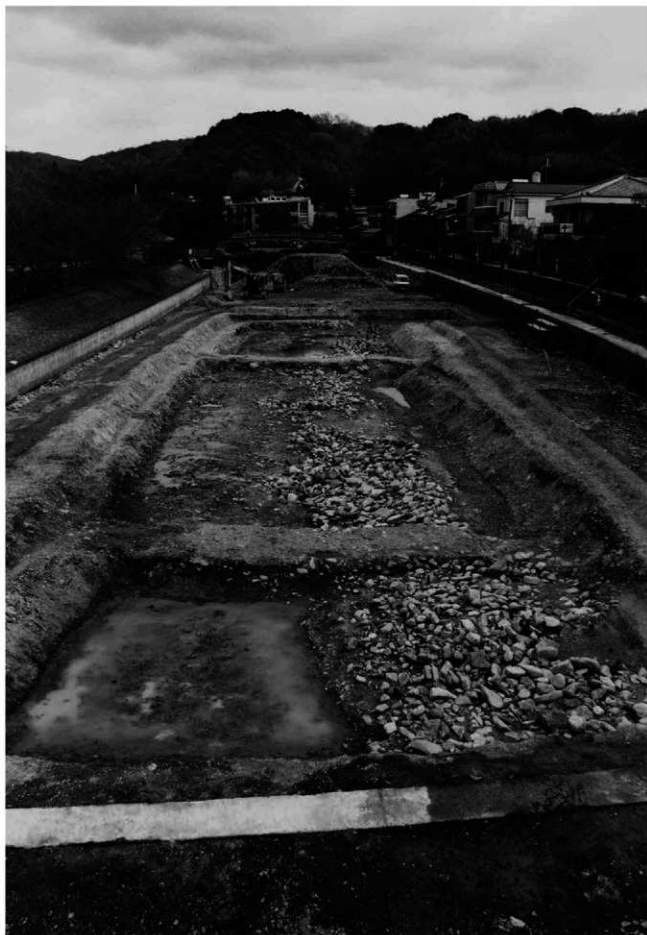
(1) 26-2 トレンチ断面(南西から)



(2) 26-2 トレンチと平等院
観音堂(北東から)



(3) 26-5 トレンチ倒木出土状況
(南西から)



26-5 トレンチ全景(南東から)



(1)26-5 トレンチ堤状遺構 S X01 全景(北西から)



(2)26-5 トレンチ堤状遺構 S X01 全景(南東から)



(1)26-5 トレンチ堤状遺構 S X01北半部分(東から)



(2)26-5 トレンチ堤状遺構 S X01北西部分(東から)



(1)26-5 トレンチ堤状遺構 S X01 南半部(南東から)



(2)26-5 トレンチ堤状遺構 S X01 南半部杭検出状況(南から)



(1)26-5 トレンチ堤状遺構 S X01 軒平瓦出土状況(北東から)



(2)26-5 トレンチ堤状遺構 S X01 瓦出土状況(南から)



(1) 26-5 トレンチ堤状遺構
S X01杭・流木検出状況
(北西から)



(2) 26-5 トレンチ堤状遺構 S X01
瓦出土状況(南から)



(3) 26-5 トレンチ南壁石造物出土
状況(北西から)



(1)26-5 トレンチ堤状遺構 S X01 確除去後状況(南から)



(2)26-5 トレンチ堤状遺構 S X01 確除去後状況(北西から)



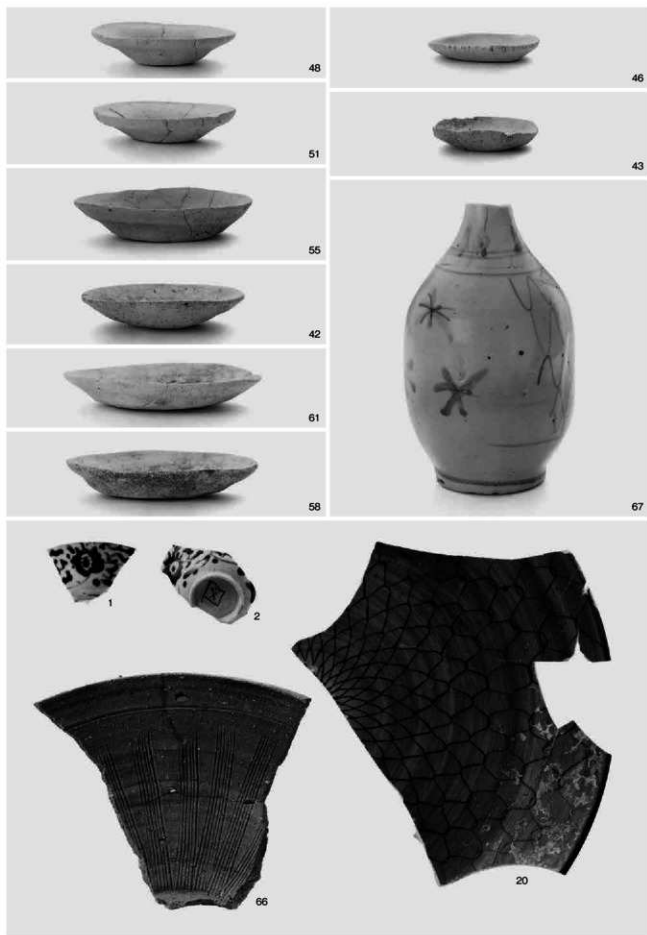
(1)平成26年度調査現地説明会
(北西から)



(2)平成26年度調査終了状況
(南東から)



(3)平成26年度調査終了状況
(北西から)



出土遺物 1 (土器・陶磁器)



68



73



69



74



117



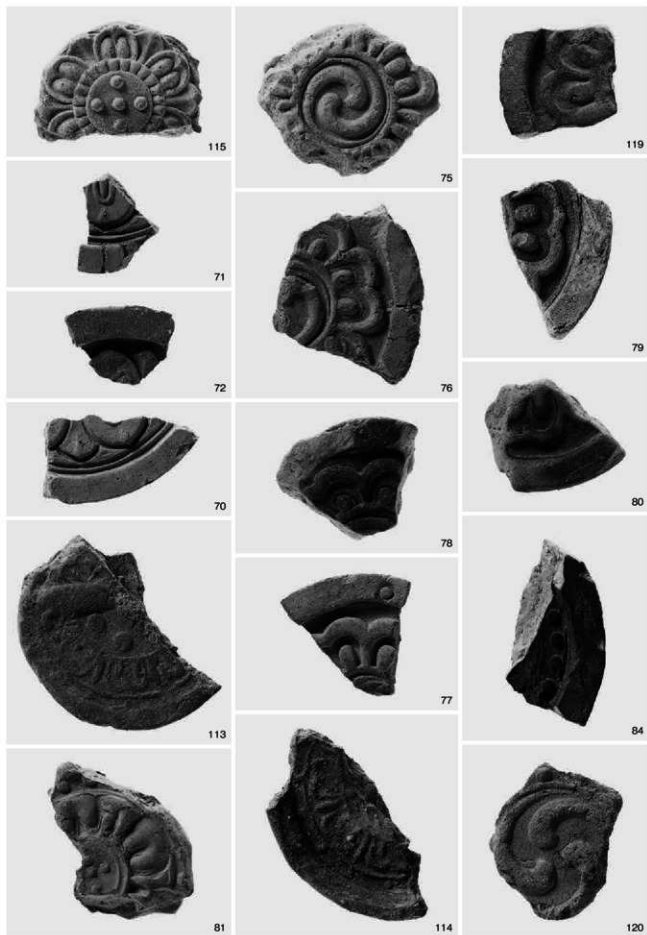
116



85



82



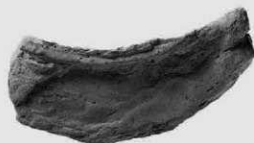
出土遺物 3 (軒九瓦)



86



121



86



121



86



92



121



93



94



87



98



122



101



89



100



90



99



95



102



96



124



91



22



22



23



23



24



24



104



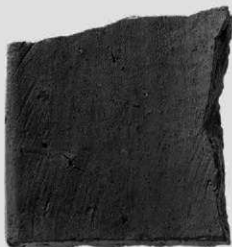
104



105



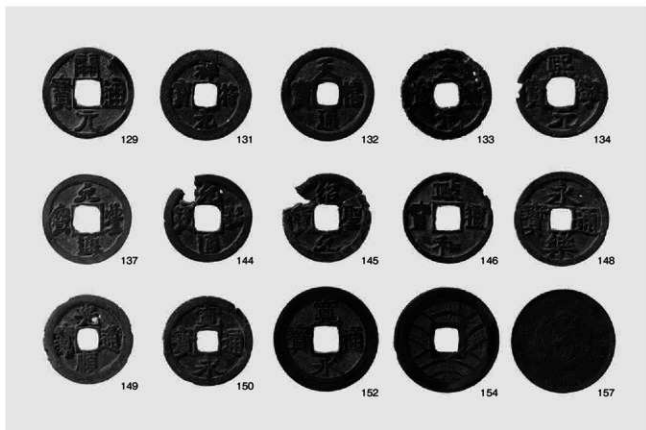
105



108



108



(1) 出土遺物 8 (錢貨)



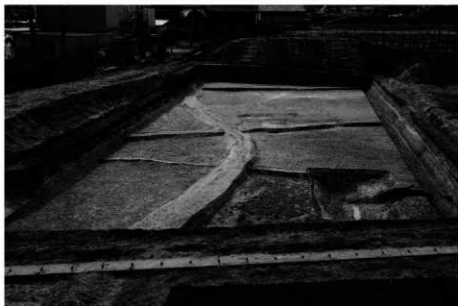
(2) 出土遺物 9 (石造物)



(1) 調査地遠景(北東上空から)



(2) 調査地遠景(北西上空から)



(1) 乾谷遺跡1トレンチ
水田検出面全景(東から)



(2) 乾谷遺跡1トレンチ
水田検出面全景(西から)



(3) 乾谷遺跡1トレンチ
北横断面(南西から)

(1) 乾谷遺跡1トレンチ
畦畔断面(c-c') (東から)



(2) 乾谷遺跡1トレンチ
畦畔断面(d-d') (東から)

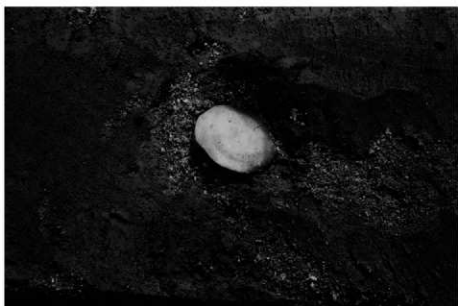


(3) 乾谷遺跡1トレンチ
水田1遺物出土状況(南西から)





(1) 乾谷遺跡2トレンチ
第2水田面全景(西から)



(2) 乾谷遺跡2トレンチ
第2水田面遺物出土状況
(北から)



(3) 乾谷遺跡3トレンチ
遺構検出面全景(東から)

(1) 乾谷遺跡3トレンチ
南壁断面(北から)



(2) 乾谷遺跡4トレンチ
遺構検出面(東から)



(3) 乾谷遺跡4トレンチ
東壁断面(西から)





(1) 乾谷大崩遺跡1トレンチ
第1遺構面全景(西から)



(2) 乾谷大崩遺跡1トレンチ
第2遺構面全景(西から)



(3) 乾谷大崩遺跡1トレンチ
北横断面(南から)

(1) 乾谷大崩遺跡2トレンチ
第2遺構面全景(西から)

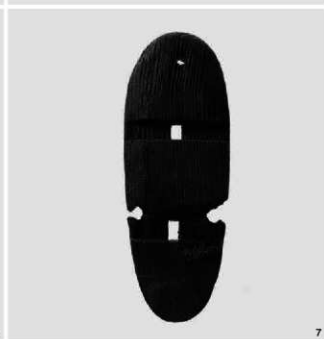
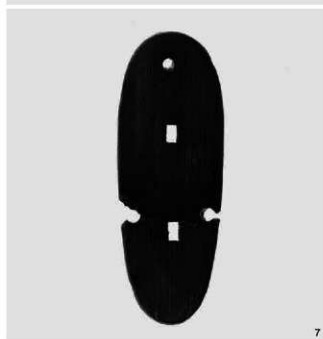
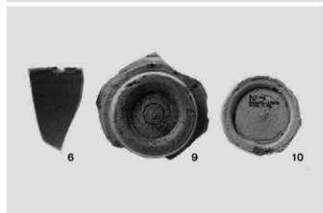
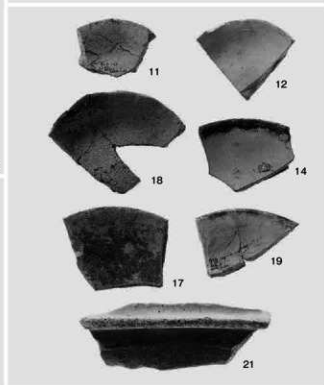
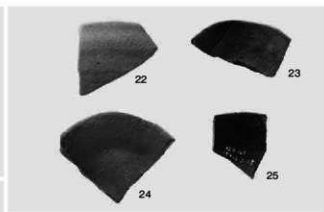


(2) 乾谷大崩遺跡2トレンチ
南壁断面(北から)



(3) 乾谷大崩遺跡2トレンチ
溝S D01・02完掘状況(南から)







26



26



27



29



35



32



39



41



43



30



46



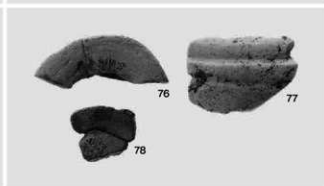
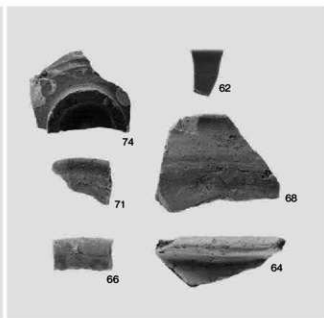
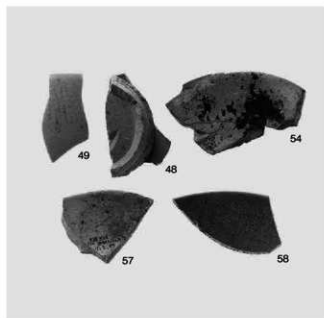
47



31



51



報告書抄録

ふりがな	きょうとふいせきちょうさほうこくしゅう
書名	京都府遺跡調査報告集
副書名	
巻次	第165冊
シリーズ名	京都府遺跡調査報告集
シリーズ番号	第165冊
編著者名	岡崎研一・中川和哉・引原茂治・竹村亮仁・細川康晴・福山博章・村田和弘・有井広幸・首博絵
編集機関	公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40番03 Tel. 075(933) 3877
発行年月日	西暦2016年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡 番号					
きづがわかしょう いせきだいにじゅ うななじ 木津川河床遺跡第 27次	きょうとふやわ たしかわぐちち ない 京都府八幡市川 口地内	26210	4	34° 52' 42"	135° 43' 29"	20140507 ～ 20140611、 20141104 ～ 20150129	300 700	河川改修
びょうどういん きゅうけいだい いせき 平等院旧境内遺跡	きょうとふうじ しうじとうがわ 京都府宇治市宇 治塔川	26204	114	34° 53' 19"	135° 48' 34"	20121206 ～ 20130116、 20140203 ～ 20140304、 20141216 ～ 20150310	400 480 1600	河川改修
へいせい26ねん どいっばんこくど う163ごうせい かくふくじぎょう 平成26年度一般 国道163号精華 拡幅事業 いぬいだにいせき 乾谷遺跡 いぬいだにおお くずれいせき 乾谷大崩遺跡	きょうとふそう らくぐんせい かちょういぬ だに 京都府相楽郡精 華町乾谷	26360	14	34° 43' 51" 34° 43' 49"	135° 46' 18" 135° 46' 12"	20141023 ～20150306	1703 347	道路建設

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
木津川河床遺跡第27次	集落跡	飛鳥～平安 中世	柱穴・溝・土坑・噴砂	須恵器・土師器 土師器・瓦器・瓦質土器・緑有陶器・中国製磁器	
平等院旧境内遺跡	寺院跡	平安～近世	杭列・堤状遺構	須恵器・土師器・瓦質土器・中国製青花磁器・染付磁器・白磁・陶器・瓦・石造物	
乾谷遺跡	水田跡	中世～近世	水田跡・畦・杭列	須恵器・土師器・瓦器・瓦・青磁・白磁・陶器・煙管・鉄製品・下駄	
乾谷大崩遺跡			水田跡・溝	石包丁・土師器・灰釉陶器・青磁・白磁・陶器・瓦・煙管	

所収遺跡名	要 約
木津川河床遺跡第27次	今回の調査では、古墳時代前期から飛鳥、奈良、平安、鎌倉時代にかけての遺物が出土した。遺構は、12世紀から13世紀の柱穴、溝、土坑を確認したが、建物等性格は不明である。また、奈良時代以前の遺構は確認できなかった。8世紀代の遺物包含層があり、付近に遺構が所在すると推定される。このほか慶長伏見大地震に係ると考えられる噴砂も確認した。木津川河床遺跡の時代と性格を考えるうえで貴重な調査成果を得ることができた。
平等院旧境内遺跡	平成24・25・26年度3か年にわたって塔の川河床を調査した。今回の調査では、塔の川左岸寄りで堤状遺構を幅5m全長53m確認した。堤状遺構は、人頭大の礫と木杭で積み上げてあり、平安期の瓦、近代陶磁器片等が出土し、近代まで使われていたと考えられる。堤状遺構の性格は防災施設、船着き場、堰などが想定されている。出土遺物は、平等院に関係すると考えられる平安期の瓦片が多数出土している。利水治水施設に係る貴重な調査成果を得ることができた。
乾谷遺跡 乾谷大崩遺跡	今回の調査は、乾谷遺跡・乾谷大崩遺跡とも初回の調査である。乾谷遺跡では、近世初期の畦畔を伴う水田跡、室町時代後期の水田跡と考えられる遺物包含層を確認した。遺物は、奈良時代から近世にかけて出土している。山田川の洪水による砂の堆積層も確認された。乾谷大崩遺跡では、中世から近世の畦畔を伴う水田跡を4面確認し、水田耕作に伴う溝を5条確認した。乾谷遺跡・乾谷大崩遺跡とも山田川の洪水の被害を受けながら、水田耕作が中世から近世にかけて行われてきた様子が分かり、付近に集落跡も想定できる貴重な調査成果が得られた。

京都府遺跡調査報告集 第165冊

平成28年3月31日

発行 公益財団法人
京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社
〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961 Fax (075)231-7141